川柳塔

創刊大正十三年　通巻一一四九号

日川協加盟

特集　こんにちは新同人です

No.1149

二月号

第十一回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第十一回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題2句　共選）

課題吟
「花」［中岡千代美（番傘川柳本社）　藤村亜成（川柳塔社）］
「待つ」［佐藤岳俊（川柳人社）　木本朱夏（川柳塔社）］

自由吟
［樋口由紀子（「晴」）　小島蘭幸（川柳塔社）］

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**令和五年二月二十日(月) 消印有効**

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九－三四九〇

賞及び発表　各題特選に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

☆同人特集☆

「私の好きな笑いの句」募集

締切　2月15日（本社事務所宛）

発表　四月号

※　詳細は刷り込み用紙参照

「各地句会だより」原稿募集

川柳塔社グループの川柳会で、紹介・アピールをご希望の会は、川柳塔社事務所まで原稿をお送りください。

内容　―　会の特色・様子・行事・今後の予定など自由
字数　―　19字×50行
写真　―　会の様子や集合写真など1枚
締切　―　随時

なお、掲載月・文章の添削については編集部に一任願います。

生涯現役生涯同人

小島　蘭幸

三年振りに千光寺山ロープウェイ山頂駅に降り立つと、何も彼も美しく改装されていました。早速、昨年の3月29日にオープンした「千光寺頂上展望台ピーク」へ。らせん階段を上ると、全長約63メートル、幅約3・6メートルの渡り廊下風の展望デッキがありました。デッキから美しい尾道水道、尾道大橋、向島を眺めていると何故か涙が溢れてきました。そして私は、「生涯現役生涯同人」と心の中で叫んでいました。

最後の最後まで作句して、最後の最後まで川柳塔社同人でありたいのです。

のどかさや小山つづきに塔二つ　　正岡　子規

この句は、日清の役に、日本新聞の従軍記者として尾道を通過したときの作で、西国寺の三重の塔と天寧寺の海雲塔を眺めたものであろう。（千光寺と文学のこみち　発行　千光寺より）

あれは伊豫こちらは備後春の風　　物外
大屋根はみな寺にして風薫る　　巌谷　小波

久し振りに文学のこみちを歩きました。ここには、俳句、詩、短歌、小説など多くの文学碑が建立されています。

海が見えた。海が見える。五年振りに見る尾道の海はなつかしい…。

林芙美子の文学碑が見えると千光寺はもうすぐそこです。

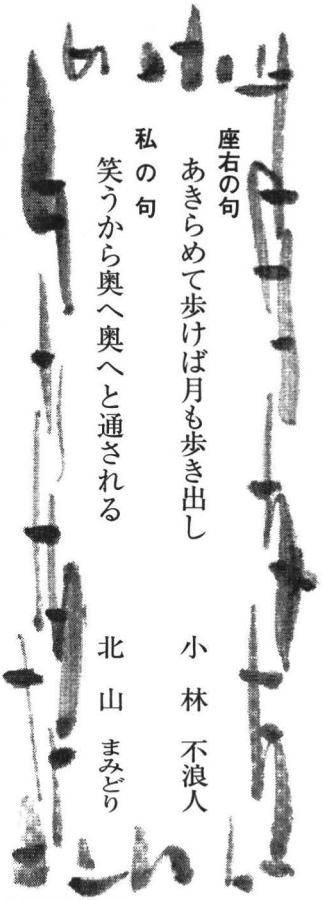
千光寺では、お賽銭を弾んで三年分の感謝と川柳塔本社句会が毎月開催出来ますようにとお願いをしておきました。

千光寺から石段をトントントンと降りると、かって文学の館があった細道に出ます。そこからさらに石段を降りると、志賀直哉旧居と麻生路郎の文学碑がある中央公園です。

おれに似よ俺に似るなと子をおもひ　　路郎
飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ　　葭乃

比翼の句碑に手を合わせて、昨年の10月1日に第28回川柳塔まつりを無事済ませたことを報告させていただきました。

1月5日、快晴の一日でした。



座右の句　あきらめて歩けば月も歩き出し　小林　不浪人

私の句　笑うから奥へ奥へと通される　北山　まみどり

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「ヨシの収穫・近江八幡」

■巻頭言　生涯現役生涯同人……小島　蘭幸…(1)
父・大島無冠王……鴨谷　瑠美子…(2)
川柳塔（同人吟）……小島　蘭幸選…(4)
菠薐草の花②……野沢　省悟…(36)
英語 de Senryu ⑬④……吉村　侑久代…(37)
誹風柳多留一三篇研究 30……(38)
自選集……(40)
句集の森……森田　茗人…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……木本朱夏選…(44)
橘高薫風句集『肉眼』……(60)
せんりゅう飛行船⑭⑥……新家　完司…(61)
愛染帖……新家完司選…(62)

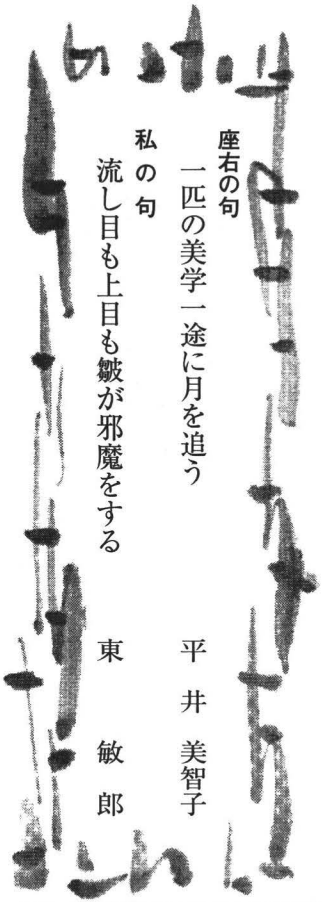
父・大島無冠王

鴨谷　瑠美子

『近・現代川柳アンソロジー』を出版されました桒原道夫さん。立派な本の中に父・大島無冠王も明治生まれの柳人として選んで下さいました。有難く感謝しています。

父は青森の「ねぶた」、長野の「しなの」や姫路方面でも活躍していて、京都の「川柳平安」の同人でした。木本朱夏さんから「川柳平安」の柳誌を頂きました。それは「川柳平安」五周年記念川柳大会特集号でした。記念大会は、一九六二年四月一日に京都御所に隣接した平安寮で開催され、出席者３２０名。選者は、石曽根民郎・大野風柳・大森風来子・大山竹二・近江砂人・岡橋宣介・中島生々庵・定金冬二・三條東洋樹・平賀紅寿・大島無冠王・北川絢一朗・布部幸男・福永泰典・堀豊次氏で、一人一人の披講の写真も撮っています。父は「未来」の選でした。出席者の中には、橘高薫風先生、森中惠美子さん、時実新子さんなど、有名な方が

檸檬抄「アイドル」……江島谷勝弘・永見心咲共選…(67)
一路集（「運」……菊地政勝選…(70)
「初々しい」……川名洋子選…(71)
初歩教室「守る」……平井美智子…(72)
川柳塔鑑賞……大久保眞澄…(74)
水煙抄鑑賞……永井松柏…(76)
■各地句会だより　六甲川柳会……上田和宏…(77)
特集　こんにちは　新同人です……(78)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世…(84)
『麻生路郎読本』余滴(74)……桒原道夫…(86)
一月本社誌上句会……(88)
各地柳壇（佳句地十選／藤村亜成・上村夢香）……(94)
柳界展望……(107)
二月各地句会案内……(108)
■編集後記（ひとこと／中田　尚）……道夫・じゅん子・勝弘…(110)



座右の句

一匹の美学一途に月を追う　　平井美智子

私の句

流し目も上目も皺が邪魔をする　　東　敏郎

殆どです。祝辞は、岸本水府さん、椙本紋太さん。コロナ禍以前の川柳塔まつりの場面を想像してしまいます。

六〇年も前の川柳大会に、父は私の尊敬する川柳作家の方々と同じ空気の中にいました。とても不思議で感慨深いものです。入選句を少し挙げます。

平和がいっぱいスカートのひだやわらいで　　恵美子

みほとけの拳のみ手にまだ逢わず　新子

お互いの善意は膝を揃えてる　薫風子

ちいさなちいさな善意交通マヒの中　　恵美子

恋人を未来へ誘う愚かしさ　　新子

目高の列のほかに平和な列なきか　薫風子

川柳に明け暮れていた父ですが、青年期は騎兵隊にいました。乗馬は出来て京都の時代祭に流鏑馬の姿で行列に加わりました。父が亡くなりました折には京都の柳友に見送られ、時実新子さんは百合の花を抱えて嵯峨野の自宅へこられ、お線香をあげて下さいました。「川柳平安」の一冊と父との想い出に浸ることが出来ました。

川柳塔

大阪市　谷口　義

黙っているのにも芸がいるのです
暇やねんけど退屈はしておりません
お茶漬さらさらといかぬのが人生か
予定にはなかった物が降って来る
紅白に出たいぐらいのおばあさん
マスクしてマスク外しておめでとう

広島市　岸本　清

老化より朗化私の合言葉
円安のボディーブローが効いてきた
記憶とぶ人に政治は任されぬ
欲もなく呑気に過ごす傘寿道
笑いヨガ一人でやると笑えない
「村神様」新語大賞文句無し

笠岡市　藤井智史

君という愛のマラソン給水所
受け止めて受け止められて夫婦愛
太陽になれる無敵のハイボール

小島蘭幸選

ワイン三杯　一夜の宇宙旅行する
散らかし放題の作家気質部屋
川柳のネタに自虐がてんこ盛り

堺市　桒原道夫

さて僕のどこ耕すか日向ぼこ
負けん気の握りこぶしを撫でてやる
何年も日の目を見ない足の裏
土埃舞っているのもなつかしさ
旅のゆとりか丁寧に髭を剃る
それとなく僕の鞄になってきた

堺市　内藤憲彦

コロナ禍も登ればきっと青い空
お取り寄せのおにぎり食べて旅気分
値上げ分妻はしっかりまた値切る
ブラボーに元気もらった十二月
生きる喜び寂聴の笑顔から
家中で一番使う勝手口

全員が傘寿達成五兄弟
マイナカード赤ちゃんだって持っている
寄らば大樹雷さまはお断り
いくつかの修羅場潜っていま米寿
5回目のワクチン打ってまだ不安
戦のない時代に生きたこれも運

鳥取市　岸本宏章

視点変えてもやはり苦手な人でした
見た目より打たれ強くはないのです
愛しさにペンが勝手に走り出す
ペンだこを忘れた指が繰るスマホ
粗い目のザルに残った下手な嘘
自転車を漕げば乾いてくる涙

大阪市　小野雅美

私にも沸点があり愛があり
氷点下そこにも命咲いている
人よりも人のこころで木守柿
大切な人となんでもない時間
笠地蔵ヒトは愚直で美しい
のんのんと翁のかおになってゆく

枚方市　栃尾奏子

素っぴんを隠せるありがたいマスク
駅のポスターで即決ぶらり旅
おひとりさまの楽しみ時間気にしない

犬山市　金子美千代

プレミアム券のお陰奮発のうなぎ
メンタルの強さアスリートの豪語
ラストダンスの思い出とロゼワイン

尼崎市　山田耕治

働いたご褒美皆で日向ぼこ
ご登場今日も翁の面つけて
ハイタッチデイサービスのバス発車
ぬくい肌着おじいさんにもサンタくる
何しているのと亡妻が小声で呼んだよう
おやすみのメール火の用心してね

大阪市　平井美智子

永遠の愛を信じた金魚鉢
嫌われぬように時々配る飴
マヨネーズかけて私を擬装する
鳥葬の話を聞いているカラス
紙袋に入れた老後を持ち歩く
笑えないジョークを抱いて冬を越す

桜井市　安土理恵

夫はイビキさあ夜遊びの時間です
書きかけのノート頬杖ついている
メールひらけば括弧でくくり「ほ」の一字
間引き菜のおいしさ湯気のたつ朝餉
会いたい逢いたい私がわたしでいるうちに
追い打ちの老いにこんがらがってくる

土佐清水市　辻内次根

包まれる小春日和のひと時を
もう朝まで寝ないでいようかと思う
ストーブ点火朝のくしゃみが止まらない
みそ汁と朝のご飯がうますぎる
加熱して消費期限の二日過ぎ
絨毯の端に躓くことがある

西予市　黒田茂代

断捨離にすっきり独り身の茶の間
返事せぬ遺影へ今日の無事頼む
あのひともう寝たかなそうだ居ないんだ
十時過ぎ休む日課は変わらない
ひとり寝る十畳部屋の片隅で
紅葉が主役癒やしの娘との旅

箕面市　中山春代

うっとりと天体ショーの赤い月
公園の紅葉に染まる落葉掃き
ラインのラあたりで溺れてる私
転た寝をテレビが起す除夜の鐘
「コロナ収束」氏神様に無理を言う
ふる里の記憶はいつまでも昭和

富田林市　中村惠

ほのぼのをくれる家族のある至福
一人きりの宙のんびりと漂う
甘党のわたしは自分にも甘い
損得を言えば心が風邪をひく
我慢するたびに大きくなるようだ
原点に還るもともと無一物

鳥取市　前田楓花

眠られぬ夜にはラジオ深夜便
政治家に欲しいサッカーの精神
マナー良くスタジアム去る日本人
恋人の色に染まっていく楓
人生を共に歩いた長い影
咲いて散るバラも私も同じ道

河内長野市　大島ともこ

今日という何にも勝る贈り物
勝負の赤三年振りの旅支度
坂の街通学路から雪の富士
小さな手も平和を願い募金箱
宝物そんなん人に言えません
お昼間はうとうと夜は寝ずの番

寝屋川市　廣田和織

物忘れしても困らぬ暮しぶり
夢ばかり追って躓きやすくなる
真っすぐな道だが蛇行して歩く
子育てを終えて胡瓜の種を蒔く
ブレーキが遅いと妻に叱られる
女房の許可が出なくて逝けません

正月が素通りしてく夫の留守
健康と住まいと食べる金はある
財産があればあるほど欲も増え
武器のため増税なんて酷すぎる
強豪も負けるんですよW杯

可児市　板山まみ子

赤ちょうちん今日は招くな誕生日
値上げするのか電気料冬が来た
言えぬ傷誰でもひとつふたつ持つ
一瞬一秒ゴール前の死闘
ナビにない目指す山奥一軒家

名古屋市　山本三樹夫

節電に協力してるチャンチャンコ
特売に目光らせる物価高
何かあるアナウンサーの恐い顔
神官がそろそろお札売りに来る
気持良い言葉をくれる友がいる

犬山市　関本かつ子

今朝もまたご飯零して叱られる
食べ残し見つからぬよう処分する
家の前掃く親切か意地悪か
タグ嵌めて金持ちだけのカニになる
クレムリンに今欲しいのはブルータス

愛知県　早川遡行

カバンからでっかい夢が顔を出す
弄るほど味がよくなるつるし柿
客が増え不安もよぎる観光地
空腹でスーパー行けば買い過ぎる
泣き顔に騙されるのも生きる知恵

奈良市　東定生

免罪符はマスクあちこち密だらけ
美魔女はごめんだやっかみではないぞ
何してもトロいが老いるのは早い
スマホまでチャランポランになってきた
ダックスフントなぜかなれなれしい視線

奈良市　大久保眞澄

独裁者手のひらにあるさじ加減
片栗粉混ぜて焦点ずらしとく
「ナカムラ」の思いをつなぐ広場出来
ビルが立つ見たい風景閉ざされて
来ぬ賀状もっともっと会っておけば

奈良市　加藤江里子

底力世界に見せて眠らせず
なせばなる日本国中勇気湧く
両の手に拳作らすPK戦
プーチンに見せたい民のこの笑顔
露天風呂月と話しにもう一度

奈良市　高橋敬子

奈良市　辻内　げんえい

スロー&ステディ我がリハビリの合言葉
叫んでも助けが来ない時スマホ
いつもより寝坊した日に不意の客
孫成長注意するより注意され
救急車乗った日のこと記憶消え

奈良市　米田　恭昌

W杯にわかファンも目が赤い
W杯ベスト8の壁厚し
傷心を氷雨がいっそ寒くする
リストカット隠す少女の辛い過去
笛吹けど踊らぬZ世代の子

生駒市　飛永　ふりこ

葉牡丹も卯年の福を手繰り寄せ
生き方の真摯が迫る絵画展
一人でも生きられるはず旅帰り
ふっとふと取り付かれたか魔の時間
仲間との再会声も華やぎに

香芝市　大内　朝子

ワールドカップ俄ファンを燃えました
小学校の友と再会してランチ
コオロギを食べるやなんてとても無理
節電へ湯湯婆を抱く亡母を恋う
顔上げてしっかりこの世渡り切る

香芝市　山下　じゅん子

演歌には連絡船がよく似合う
石油ストーブ湯沸きイモ焼け仕事人
握力は弱いけれども射たハート
気弱な息子の頼れる嫁にありがとう
青春がクラスラインで甦る

奈良県　安福　和夫

八咫烏ドーハの空で見事舞う
W杯快挙讃えてついブラボー
覇権争い命と夢を奪い去る
ウ露戦争長びき世界困らせる
国連が策講じねばエンドレス

奈良県　谷川　憲

ニュース見てぶつぶつ妻に嫌がられ
おだてられ良い気になって蹴躓く
縁の不思議他人どうしが添い遂げる
古里の電話方言すぐに出る
戦争と飢餓くり返す人類史

奈良県　中原　比呂志

福引きの運は私を呼びに来ず
印刷の松竹梅では福も来ず
暑い暑い寒い寒いで歳を積み
子はスキー親は温泉別行動
豪雪苦都会は雪をうれしがり

奈良県　中堀　優

ボランティア所詮自分のためなんだ
老いたなら夫婦ゲンカも口ゲンカ
困ったらもう逃げ足の速い人
ローン終えやっと落ち着くマイホーム
古里という暖かい着地点

奈良県　長谷川　崇明

紅葉散り眠るしかない山となる
腐葉土となって仕事をする落ち葉
一人欠け酒飲み仲間またひとり
八十路過ぎ音沙汰なしになる不安
三年振り強気弱気の同期会

奈良県　渡辺　富子

あっと叫ぶ形で出土した埴輪
ふる里の駅に降り立つサングラス
定年後に行きたい処がたんとある
嘘少し混ぜて正論らしくする
ほどほどの嘘で和んでいるお酒

和歌山市　上田　紀子

厄介な話さておき鍋煮える
知恵の輪が解けないままに年を越す
一期一会心豊かに置き土産
働いた私にやさし柚子の風呂
先代の御恩無理なく生かされる

橋本市　石田　隆彦

食欲は旺盛なまま冬が来る
孫四人枯れゆく爺にファイトくれ
私の血を繋いでくれよ孫四人
まだ余白あるから夢を描いていく
医療費を上げる老いは無口だから

和歌山市　柏原　夕胡

声かけてくれるご近所増えました
最強かコロナ感染しなかった
誌上大会手当たり次第出している
間違って猫に生まれたような猫
どうしても許せない人は過去形に

和歌山市　松原　寿子

純粋なあなたで謎が見当らぬ
マフラーへ夢の続きを編みあげる
詩心が膨らんでくる散歩道
信頼を深め重ねている絆
死角からきつい言葉の矢が刺さる

岩出市　藤原　ほのか

十二月何がなくてもかぞくのわ
来年こそ自分の足で歩きたい
リハビリを自分の為といいきかす
リハビリをすれば歩ける信じてる
この頃は寝られることが一番だ

百歳へ頭の良さが衰えぬ
若い子の名前フリガナでわかる
すみませんまたプラゴミがたまったわ
貧しさに度量の広い人育つ
便利な車足は弱り放題

海南市　小谷小雪

CMが老後の心配してくれる
新語辞書年々厚くなるばかり
カタールの地に青い戦士花と散る
血圧を測ることから今日始まる
父親の年齢に並んでまず息災

京都市　清水英旺

無いとこには寄らぬお金は寂しがり
友の死を歳と割り切ることできぬ
笑えぬジョーク言っている人だけ笑う
愚痴と陰口そっと補聴器外してる
駆ける用事もないままずぎる師走

京都市　藤井文代

歩いてさえいれば灯りに辿りつく
気が付けばテレビに相槌打っている
若作りしても並べぬセルフレジ
ペン胼胝も消えて手紙も書かぬ日日
叱ってくれる人がないのも寂しいね

長岡京市　山田葉子

出雲路に神々集い禊ぎする
二年間笑ってないが皺増える
愚痴だけはしっかり言える脳がある
プーチンに奈落の声を聞かせたい
日章旗今日は何の日昭和の日

大阪市　東敏郎

ぶっきらぼうに北風が背に鼓舞をする
山茶花が歩幅五センチ広げろと
カサカサと遊ぶ落葉の強かさ
赤い血が流れてるから白い息
クリスタルな朝の空気を持ち帰る

大阪市　石田孝純

猛暑厳寒日本の四季も様変り
湯たんぽのぬくもり優し母に似て
いつか来る延命不要子等に告ぐ
勉強不足没句の山を築いてる
民間参入月の世界が騒がしい

大阪市　磯島福貴子

団子虫に教えてもらう処世術
五七五と指を折ったら知恵熱が
会いたくもない人だけは来るけれど
二枚目の舌もしっかりと生え　おとな
一日中ヨイショと言って惚けてゆく

大阪市　井丸昌紀

書ききれぬ五年日記をまた買った
口当り軽いワインに騙された
ぐるぐると出口わからぬ地下迷路
就活も代行がありカネしだい
深夜まで自販機の音途切れない

大阪市　岩崎公誠

体操もいちにいさんと声出して
音読は好きな記事見て三回と
生きるコツわかりかけてはかくれんぼ
記念日はちょっと高めのワイン買い
金婚サプリはいつもありがとう

大阪市　岩崎玲子

あの日から家事の分担して平和
冗談の通じぬ人で肩が凝る
三歳のなりたいものは消防士
裸木に取り囲まれて磨崖仏
ハラハラと枯葉しんしんと初雪

大阪市　内田志津子

百人一首読み手はいつも亡母だった
青空に見られてしまったため息
枯葉舞ういつか私もこのように
そのままでマスク美人はそのままで
謎解きができないままに一つ屋根

大阪市　宇都満知子

抽出しにカスタネットが眠ってた
年齢は足してばかりでおもろない
しあわせです僕は甘辛二党流
ありがたし可も無く不可も無く生きて
飛行機の影がわが家を通過する

大阪市　江島谷勝弘

コルセット取れて歩いてやっと秋
難しい世相忘れて街に出る
街師走華やかに賑やかに
今年だけ曽孫のためにクリスマス
節料理娘各々受け持ちで

大阪市　榎本舞夢

隣国の神に貢いで国の危機
ワールドカップ日本が元気になりました
詰め放題得意な嫁は理数系
待合せ必ず遅れてくる息子
冬大根ほっこり炊いて亡母偲ぶ

大阪市　大川桃花

変人は変人の子を産みました
顔と名は一致しないがサポーター
たっぷりの蜜入りリンゴ丸齧り
泣いてもいいゆっくり歩くことにした
友もみなぽっちゃりばかりよくしゃべる

大阪市　大沢のり子

雨宿り目の前にある縄のれん
大丈夫あの世と宇宙つまずかぬ
この値上げ家計簿投げて妻怒る
ロシアでは刑務所の部屋広くなる
家族増え喜怒哀楽は倍になる

大阪市　奥村五月

バラの棘抜けないままで年明ける
寒椿ほめてもらって実をつける
襖絵の滝おだやかに時すごす
老いの坂挑み疲れて深眠り
あと十年楽しませてと月仰ぐ

大阪市　折田あきこ

丁度良い時期に昔がひょいと出た
ひょっこりと本が出て来て役に立ち
答え出るいろんなものがまじり合い
淀川の水と話して落ち着くの
毎日の気分とうまく付き合うの

大阪市　笠嶋惠美

笑ったらいい友だちがやって来た
日日新たなんで後を向くのです
教室に仲間が二人増えました
来年はうさぎの妻と跳ねてみる
来年は何はともあれ米寿です

大阪市　川端一歩

飽食と飢餓同じ地球の上にある
本物の蟻は屈託なく生きる
便利さに甘え工夫を置いている
時代だな花嫁よく食べよく笑う
生姜汁呑んでひととき母の声

大阪市　古今堂蕉子

都構想二度負けてなお諦めず
「青い星」上梓しました感無量
ブラボーとドーハの歓喜あとは夢
領収書白紙で済ますのか総理
十八歳盤寿の爺と時事談義

大阪市　近藤正

始めての事するのには勇気要る
久し振り友達もみな元気です
名乗らずに手伝う人に助けられ
考えるだけじゃちっとも進まない
遺る事があるから元気　もう少し

大阪市　坂裕之

コンビニに売っていそうな愛である
オジサンになっても好きな水たまり
武闘派もひとり仲間に入れて冬
落書きをして欲しそうな壁がある
雑草に教わる自由とは何か

大阪市　高杉力

明日の夢に元気沸沸車椅子
欲しいもの形あるもの要りません
懸命に食べるカロリー書いてある
早起きをしても出掛ける訳でなく
笛の音に誘われ暫しテレビ消す

大阪市　高杉千歩

カレンダー届き来年頑張るぞ
物価高しっかり節約乗りきろう
義母と観た歌舞伎素敵な思い出に
すぐ決めて後からなやむ服えらび
旅プラン決める間の夢ごこち

大阪市　田中廣子

口下手を武器にセールスのグラフ
寒紅を引いて披講の声清し
寒卵コツン平和の音で割る
のたりどたりトドの包容力が好き
チューリップ曲がったことは大嫌い

大阪市　田中ゆみ子

雲百態瞑想しきり白い部屋
元気を出そう空は碧いぞでっかいぞ
水琴窟も奏でる春を待っている
鬼に金棒人に辛棒と言う支え
病む身にもきっとやさしい春が来る

大阪市　津村志華子

ゆうゆうと走っているがビリじゃない
相棒はいない孤独な独裁者
腕時計せずに気ままに生きていく
平凡なニュースになったオミクロン
さんざんの文句の後にしらんけど

大阪市　寺本実

少子化に国の財産人と知る
優しいね音むかしの償いか
今回もにわかファンで四年後も
料理好き掃除は嫌い見ないふり
ブランド品家にあるのはさつま芋

大阪市　中井朋

予備は買う化粧品やら正油やら
幸せ太りと自分に言っている
こだわりを少し削って丸く住む
サッカーが日々のリズムを変えさせる
お互いの趣味は関心無い夫婦

大阪市　原田すみ子

柿リンゴ果物で知る季の移り
後期高齢前にそびえる八十の壁
健康体いただき父母に感謝する
煙草は怖い兄の肺ガン重症化
突然に老老介護兄嫁は

大阪市　平賀国和

百均でコスメ集める中学生
少し上の世界楽しむハイヒール
見栄はると金がかかってしょうがない
ケンカして甘える親が居てる幸
買ってよとばかりに服と目が合った

大阪市　降幡弘美

何よりも朝日に祈る子の無事を
走れない若さに勝てるわけがない
星ぴかり真夜中逢いにきた夫
わくわくとグランドゴルフ今日も晴れ
音読で新聞読んで呆け防止

大阪市　山本加お里

何もかも捨てた銀杏に諭される
首の皺七面鳥にシンパシー
散歩コース必ずベンチある所
新暦にまず検査日の丸印
角取れてつまらなくなる男達

大阪市　横山里子

アートネイルちょっと楽しくなってきた
空元気で闊歩といくか若ないが
心して行きたいものだ老い半ば
病む母に手鏡そっと隠しとく
だんだんと少なくなった年賀書く

堺市　今井万紗子

お惚気を聞く勘定はこちら持ち
アメ細工もアートの仲間入り令和
フェイクだとしても私には宝
年金日盛り上がってる路地の店
赤紙が復活しそう自衛論

堺市　柿花和夫

国民負担言う前に無駄を無くして
ラクダ色のマフラー亡夫の残り香
あと五年しっかり生きてバトンタッチ
後事託す嫁はしっかり頼もしい
本物のおまわりさんか手帳みる

堺市　源田八千代

そのうちがだんだん忘れられている
妻の愚痴知らん顔して耳動く
愚痴言える友に何度も救われた
若いねと言われ年相応とも言われ
ご迷惑お掛けしますが増えてきた

堺市　齋藤さくら

普段は妻とルンバに任せてる掃除
ルンバ君の後の水拭き僕の役
大掃除済ませ今夜は美味い酒
寝もやらず手に汗をしたW杯
強きを倒し弱きに屈すこの不思議

堺市　坂上淳司

夢が湧くから子どもが好きになる童話
生きてればこそ良いこともある年の暮れ
老いてなお大志を抱いて八十路行く
八十年洗い過ぎたか顔のしわ
虎落笛にハモリだしてる耳の奥

堺市　澤井敏治

ありがとう村営バスを降りる客
モノクロの新婦以外はみな故人
居酒屋に客を呼び込む笑い声
偲ぶ会遺影の前の笑い声
患者食全部食べても痩せてゆく

池田市　太田省三

生きる事の応援貰う靴磨く
電子音聞こえる内は大丈夫
物価高せめてスリッパ買い替える
悪いのは頭だけだと胸を張る
訳有りのりんごアップルパイに化け

貝塚市　石田ひろ子

ここんとこサンマをやめてブリにする
聞く耳が背中に付いていた総理
美術館一歩入ると別世界
健康のままで4キロ太りたい
バンジージャンプだけは一億積まれても

河内長野市　梶原弘光

何故だろう虫は食べないホウレン草
他人には多く求めず押しつけず
整理整頓よどみなくしていい暮らし
独り居も三年グチが減ってきた
生きる術やっと掴んだマイペース

河内長野市　木見谷孝代

弱点を言ってもらえる友がいる
激動の昭和を語る歳になる
撃破するサッカージャパン二度三度
華やかな歩行者てんごく御堂筋
素潜りでサザエや鮑海人の糧

河内長野市　黒岩靖博

がらくた市右も左も目利き顔
見栄張って「中の上」だと言い聞かす
反戦の狼煙ピカソとバンクシー
サポーター歓喜の後のゴミ拾い
競い合い感性磨き合う句会

河内長野市　中島一彌

デパ地下で値上げ分だけまず試食
バーゲンの主婦の背中が殺気立ち
図書館は知恵の泉僕昼寝
政治家は蛸か疑惑に墨を吐く
へそくりの諭吉数える年の暮れ

河内長野市　藤塚克三

久しぶり目で値踏みする同期会
老いたれど妻に綺麗とためらわず
古民家にいのち吹き込むシェアハウス
おしゃれ着でワイン褞袍で芋の酎
手をつなぎ心ぶらに酔い人に酔い

河内長野市　村上直樹

炊き出しを待つ人のいる街に住む
電飾にこころ光れと御堂筋
木枯しを待って開店焼き芋屋
もういいか八十路のお節荷が重い
重箱が待つのでレシピ繰る朝日

河内長野市　森田旅人

呟きの中に混じっている本音
角度かえ見たらあなたは善人だ
ＪＲ東海だけが笑ってる
空気読み恥ずかしい手を上げている
手の内はやはり読まれていたらしい

岸和田市　岩佐ダン吉

胸のうち聞いてくれてる冬の月
冬の月フェイクニュースに惑わされ
下町に残る昭和の人情味
生きてれば心が折れる時もある
失敗を重ね輝く今がある

岸和田市　雪本珠子

寂しくて人間臭い友に逢う
壊れそうな夢を箪笥に仕舞い込む
再生紙過去より白くなりたがる
シグナルは青しか知らぬヤングたち
捨てる前に一度試食をなさいませ

吹田市　太田昭

金貨バラ撒くようにイチョウが風に舞う
伝えたいのに言葉出ぬのが悩ましい
ゴミ出しは主人隣もお向かいも
きっちりが過ぎてみんなに疎まれる
友達について行けずにマイペース

高槻市　片山かずお

枯葉と霜踏み締めながら朝散歩
じわじわとやって来るのが老化です
心配事あるが御飯は食べている
ごろごろとできる実家の有り難さ
好きな事歳を忘れて本気です

高槻市　島田千鶴子

それなりに老人力もついてきた
日日のウォーキングも膝にサポーター
思わぬところに潜んでいたひやり
もうちょっときばるつもりのお爺ちゃん
散らかしたままの部屋にもある規律

高槻市　初代正彦

高槻市　富田保子

ひたすらに女でいたい紅を引く
こんな世も微妙に私生きてます
また注射後に並び身構える
ショパン弾くさては受験も済んだのか
ネギ刻む音より今日はチンの音

豊中市　上出修

胸踊らせバレンタインの朝を出る
三年ぶり子も孫も居るお正月
久しぶり芝居小屋にも大向こう
戸籍では家長は僕のはずですが
ばらばらの意見まとめる古狸

豊中市　きとうこみつ

たったひとつのほくろ人相まで変わる
きんもくせいの甘い香りと秋の陽と
弟の病亡母も私も気にかかる
流す音わざとつくってあるトイレ
起きぬけの風呂ほんに至福の温泉地

豊中市　藤井則彦

「おかげさま」のおかげで今日も生かされる
夢叶うまでの道のりこそ楽し
大股で先ずは一歩を踏み出そう
家族皆一期一会という絆
味わってみるには怖い太郎の絵

豊中市　松尾美智代

やっと慣れたスマホが今日は謀反する
昨日出来た事が出来ない今日のうつ
白子鍋食べて心のしわ伸ばす
私をリセットしますヨガタイム
あと少し今年も急ぎ足で往く

高槻市　松岡篤

トイレまでくっついて来る作句帳
近頃は歩数計から愛のムチ
紅白は歌手名さえも分からずに
初詣感染怖いけど参る
大関が勝つと何だかホッとする

豊中市　松田蟻日路

またいらしてママの小指にあしらわれ
元気出せよ　思わず涙腺が緩む
横たわれば心音がする生きている
炊き出しの湯気にくるまれ除夜の鐘
はなみずきも俺も真赤にやがて冬

豊中市　水野黒兎

ふる里の匂いが味のよもぎ餅
ラーメンに長い列ある世の平和
初雪の便りちらほら里は過疎
健康にいつも味方のゴマ・大豆
人の世もゴール見事に決めたいね

富田林市　山野寿之

満喫の老いローカル線のひとり旅
たけなわの秋を栞の文庫本
スマホのア孫から指導アナログ派
月蝕と天王星と宇宙ショー
赤貧の糊口を凌ぐ物価高

寝屋川市　川本信子

幸せの角度に子・孫・曽孫居る
一〇〇米先にコンビニ減る歩数
ブラボーと言える一年努力する
目力が頼り目薬欠かせない
値上がりが続くどうするお年玉

寝屋川市　伊達郁夫

回想のどのページにも雪が降る
長い旅家の便座が温かい
思い出にするには少し時が要る
生命線いまどの辺か冬木立
いいですよ酒の肴になってやる

寝屋川市　冨山ルイ子

部下だった女の子ドイツより来る
娘夫婦よくしてあげて感心す
ウクライナ九ヶ月よく頑張った
ウクライナに送ってあげたいホッカイロ
ウクライナ寒いだろうな冷たかろ

寝屋川市　平松かすみ

花束は娘から孫から祝米寿
仕方なく糸通し機を買いました
ゴミ暦持っているのか街カラス
売れたのは万年筆と金盃で
里の米魚沼産より旨かった

羽曳野市　磯本洋一

今日もまた24時間ノープラン
茶の間には薬と白湯が待っている
通院はナースの白衣に逢いたくて
レントゲン笑った方がいいですか
休肝日時計進めて早寝する

羽曳野市　宇都宮ちづる

令和にもようやく慣れて日付書く
忘年会できないままで晦日そば
インフルとコロナ連れ立ちくる師走
チラシにも安いと思う品がない
マスク下ほうれい線が深くなる

羽曳野市　徳山みつこ

汚点そのままに国会の終幕
ウクライナ思えば10℃ありがたい
お身拭いわが仏壇も清めねば
大根焚きうちのおでんも煮えている
今年こそ戦なき世になるように

羽曳野市　三好専平

道の駅ミカン積まれて冬に入る
いくさへと煽る報道つづきけり
痛みだけ押しつけてくる人の愚痴
コルセット外して一日終わりけり
散り溜る溝の落葉やカユすする

羽曳野市　吉村久仁雄

どん底に落ちてふつふつ生きる欲
好奇心すぐに右向き左向く
行列の時間返してほしい味
タイプじゃない人と気づけば結ばれる
閻魔からの呼び出し今日も拒否をする

東大阪市　北村賢子

いわし雲はるか少女の日へ続く
飽き足りぬと思う平凡こそに幸
ああ言えばこう言いながら日日平和
今年の漢字みなそれぞれの思い込め
朝焼けへ願ういつもの普通の日

東大阪市　佐々木満作

平凡に暮らせぬ不条理な戦
倹しくも暮らしの中にあるゆとり
人生の余白に残したい軌跡
名も告げずゆうゆう去った救い主
兎年ぴょんぴょん跳ねて事運ぶ

東大阪市　西村哲夫

ジャンル無しすぐうち溶けて酒旨し
木漏れ日へこころ晒した二日酔い
禅問答のりつっこみで独り酒
誘惑の抗体酒で消えている
このままじゃ仮の宿から帰れない

枚方市　谷英也

もったいない分別ざかり定年後
霜柱サクサク踏んで弾む心
逃げ惑うサイレン響くその昔
人の世は何時も晴れない霧の中
朝帰りはっきり言わぬ方がよい

枚方市　丹後屋肇

物価高始末始末の疒（やまいだれ）
省エネへ湯タンポ選ぶ冬の陣
黒四ダム眼下に放つど迫力
執念のもぐらになって掘る翡翠
底冷えに冴えるダム湖の星あかり

枚方市　藤田武人

両親の想い何だと反抗期
白線があるから一歩踏み出せぬ
時刻表見ずにローカル線の旅
本当に青いかどうか月旅行
絶頂の怒りだゲンコツが痛い

藤井寺市　太田扶美代

栞にする疵なしモミジ選っている
こんな夜は寅さん映画で暖まる
曇り空人の心を読み損ね
木枯しが見えない幸を連れて来る
私流の咲き方ですが明日も咲く

藤井寺市　鴨谷瑠美子

うさぎの干支の飾りで足りるお正月
答えなどないけど長生きしています
流されてばかりで角がありません
暑い　寒い　腹式呼吸続けます
絵手紙のうさぎを抱いてポストまで

藤井寺市　鈴木いさお

いい人生だったと思うことにする
過去帳に僕のアナザーストーリー
婦唱夫随だこれまでもこれからも
すぐ顔に出るからポーカーは苦手
諸説あり長生きのコツ痩せるコツ

藤井寺市　吉田喜代子

「さようなら」これが最後にならぬよう
今日を生き明日の夢は画けない
継母逝きもつれた糸も解れゆく
コブ巻もオセチも止めて寝正月
客もなく静かに雨音聞いている

箕面市　大浦初音

句作りは海の深さと果てし無さ
影だけでも若くありたい背を伸ばす
イエスマン案外出世していない
嘘つくと目が泳ぐのですぐ分かる
優しさは返す言葉の温かさ

箕面市　酒井紀華

しあわせな友はゆっくり喋りだす
雨に煙る思い出抱いていい時間
しあわせな故人コロナを知らぬまま
一戸建て負担になってひとりぼち
物価高青色吐息不況風

箕面市　出口セツ子

イベント好きの母につきあう息子達
あと何度家族で祝える誕生日
無駄話して笑える日恋うコロナ
誕生日ダシに家族でフルコース
経済力体力も失せ子に頼る

箕面市　広島巴子

W杯ブラボー四年夢を追う
木枯らしに耐え木守りの柿健気
光熱費節約のため冬眠へ
年末に骨折の友思い遣る
具だくさん粕汁作り二三日

聞き役と腹をくくっていた迂闊
洗脳へ土地まで貢ぎゆく怖さ
数人が核のボタンを持つ地球
汚れた地球一度丸ごと洗いたい
ひと言言えばお歳ですねと笑われる

八尾市　寺川はじむ

ワクチン五度目鬼の首でもとったよう
サムライブルーすてきな夢をありがとう
なんとか生きているスマホ無い暮らし
エンピツ5B走る早さと減る早さ
添削で好きなことばがいなくなる

八尾市　村上ミツ子

ブラボーと呼べる世の中早く来て
物よりは笑顔の欲しい歳となり
知らぬ間に本音を洩らす独り言
スレンダーになってくパンも年金も
不注意でアクシデントのあった悔い

大阪府　米澤俶子

小国の勝利勇気湧いて来る
召集兵無事に帰れと流れ星
ガードマンごとく見回り夜散歩
知らぬこと知る楽しみは衰えず
気分良し熟睡するぞまた明日

神戸市　上田和宏

白内障補聴器次は何なんだ
こんなにも老い集まってくる眼科
楽しめばいい川柳が苦しめる
生き抜けなかった人の面影冬銀河
大根足の暮しが性に合う私

神戸市　奥澤洋次郎

カネないが気配り笑顔まあいいか
気弱で生きてこれでよかった友が増え
老いのおふざけ大盛り上がり皆なみだ
老い二人ボヤキ笑いでぐっすり寝
これじゃまるでかくし芸わが音痴

神戸市　興水弘

アイメイク紅は引かずにマスクする
のんびりと歩く人なし年の暮れ
ああ師走ゆっくり歩く私だけ
懸命に駆けても勝てぬ行く月日
寄付集め手練手管の統一教

神戸市　近藤勝正

初日の出拝んだ後はまた布団
マネキンと同じ服でも似合わない
今はもう箪笥の肥やしペアルック
あれとこれそれで通じる共白髪
息抜きに始めたゲーム今やプロ

神戸市　斎藤隆浩

風呂の中で作った川柳温かい
湯どうふと熱燗あれば冬越せる
今年もまた妻はサンタを待つと言う
お互いに頼りないけど支え合う
サムライブルー夢の続きを待っている

神戸市　敏森廣光

うまくいったらしいな声が明るい
腹筋を五回して行く健診日
芋ケンピ開けたら最後止まらない
出し過ぎたファンデーションの行き所
続けていようチャンスはきっと来る

神戸市　冨永恭子

五七五で柔らかくなる石頭
百二歳食事は全てとろみつけ
好きな物はつるりと咽を通過する
好きな餅食べれなくなる百二歳
百二歳のためにお節を仕分けてる

神戸市　能勢利子

あと何度賀状書けるか知らんけど
長電話病気自慢と孫自慢
紅白は高齢者層をないがしろ
見るだけのお節のパンフ目の薬
ガラポンで当てた景品ティッシュのみ

神戸市　松倉正美

相手のエラー見たら我が身が引き締まり
歩き初め茨の道が待っている
地蔵さんと話し込んでる独り者
身の程を知っているから出しゃばらず
何でも屋でこき使われるのも嬉し

神戸市　山口光久

儲けてるときは誰にも教えない
貸し借りは茶飯事長屋での醤油
無為徒食日めくりだけは忘れない
瞑想のつもりがやがてうとうとと
飽きっぽい俺だな読み止しのまんま

明石市　糀谷和郎

神病んだかコロナ戦争おさまらず
嘘でもいい優しい言葉待ってます
憧れた老後の自由あて外れ
小心者ノーと言えない私です
一人旅ドラマの予感ひしひしと

芦屋市　荒牧孝子

5回打ち人体実験言う人も
家内とは非常時動く制御盤
朝食にウェイト掛けるオレ流で
脳と腸食と運動気を常に
鍛えてる第二心臓足裏を

芦屋市　新阜義明

平和ボケ聞かなくなった反戦歌
断捨離終え八十路ひとりの旅支度
諭吉消えカードばかりの長財布
お茶一ぱい断る気概ボランティア
追伸に然りげなくあるさようなら

尼崎市　永田紀恵

一人だとこけやすいので手をつなぐ
今のところ飽きはきません生ビール
アル中にならぬ程度の酒を飲む
プルタブが近頃固くなってきた
ワクチン注射五回目打ってお正月

尼崎市　藤井宏造

動く歩道何回乗るもおっとっと
干柿を吊したやさしそうな軒
ひょっとしてまだ飛べそうな水たまり
いつも合う人と出合わぬ散歩道
幾年月納戸に眠る登山靴

尼崎市　藤田雪菜

椿褒め一輪もらう散歩道
片付けの手がつい止まる古写真
折り折りに生きた答えがちゃんと出る
趣味の灯り平凡な日の道標
腕相撲子に倒される日は近い

尼崎市　森菊江

黙々と銀杏をむく黙々と
渋沢栄一の墓が異様にでかかった
プランターでデコポン三つ生っている
富士山がだんだん好きになって来た
お守りに祖母の手紙を置いてある

尼崎市　山田厚江

日なたぼこする時間なしボランティア
動けるのボランティアする御蔭かな
飽きさせぬようマジックも挟みます
「ありがとう」言って言われて一日過ぐ
ペットロス妻は心のリハビリ中

加西市　山端なつみ

初恋の人住む街に雪予報
手を繋ぎヨチヨチ登る八十路坂
石蕗は亡き師の雅号黄花咲く
小春日や憂きことひとつ浮かび来る
車椅子オーケストラの指揮者老う

川西市　山口不動

波しずか親子げんかも覚えない
忙しい娘がみていると頑張れる
さすが姉任せておける頼もしさ
お歳暮は体調管理の乳酸菌
思いやり一線越えればお節介

三田市　足立つな子

三田市　稲角優子

大晦日母さんなりのシナリオで
日本人らしきゆかしきお正月
晴着きる一年分の妻を見る
昭和史を綴るに深い母の海
再生の音がきこえる浅き春

三田市　上田ひとみ

言わないとだめなことさえまだ言えぬ
良い方へ考えるのはああしんど
大根を使い切るのは自尊心
啄木のつぶやき今の私です
一緒に居れることさえもう奇跡

三田市　大西重男

あとひとつ皿のギョーザに箸が出ず
カラオケを歌えと言われ音痴です
誕生日ひとりで祝うコップ酒
思い出が色濃く残る我が故郷
酒タバコ止めて長生きしたくない

三田市　尾崎一子

子の帰省今年最後の墓参り
分厚い手母の手を引く血の温み
ケンチン汁振舞う母の至福時
受験の孫それぞれにある暮らしぶり
大掃除も子が手伝ってくれる齢

三田市　九村義徳

幸せの入れる隙間空けておく
窓際へ行って俺にも味が出た
国訛り心に響く道の駅
アフターファイブ集う駅裏縄のれん
道の駅昭和レトロの味がする

三田市　住吉美和子

枯れ葉散る兄弟姉妹バラバラに
気は急くが齢相応の動きしか
年の瀬に財布の紐が緩くなり
老いた手にハンドクリームたっぷりと
菊まつり待ちに待ってたお披露目場

三田市　多田雅尚

電飾の見事に映える御堂筋
永久歯とは名ばかりの総入れ歯
小中が廃校となる我が母校
Gゴルフしている時は痛み無く
休肝日夜が余りに永すぎる

三田市　中山昭美

ヒメジオン活けた玄関野の風情
久しぶり会えたね孫はおどけ顔
マスクとり笑ってみるがぎこちない
年下の友を立てたり諭したり
終の家小さい方が暮し良い

三田市　野口真桜子

ひらがなの会話でとけたわだかまり
受け身から攻めに転じた年女
年女ですお寄り下さい福の神
女という薄衣を脱ぐ墓参り
二兎を追う気丈な妻の影が痩せ

三田市　堀正和

虹に会い初雪も見た琵琶湖旅
五回目を打ってジーンズを買いました
コロナ明けクルーズの旅模索中
卒業の孫へ最後のお年玉
朝刊はうれしいニュース拾い読み

三田市　村田博

赤いカプセル飲んでコロナを追っ払う
大口を叩き鮟鱇食べている
知らぬ事いっぱい有って惚けられぬ
友が逝く目刺し一匹分けた仲
小数点以下で切り捨てされている

高砂市　松尾柳右子

枯れ葉舞う車窓一年振り返る
杖頼り努力重ねて住む八十路
幸せと願う老後に孫ひ孫
怖がりでマスク3枚持ち歩く
衣食住足りて感謝の陽が沈む

宝塚市　丸山孔一

リハビリに顔しかめたり笑ったり
胃も切ったペースメーカー脊柱症
急峻を登るロケ先カメラマン
食レポの「うまい！」は喰ってからにしろ
食レポのすぐにマスクは要らんやろ

丹波篠山市　北澤稠民

人は皆皺くちゃになる顔を持ち
年末の気がせず酒を飲んでいる
雑学の中で人間臭くなる
野暮ですね生年月日聞くなんて
ありがとうすぐ出るように口に溜め

丹波篠山市　酒井健二

健気にも雨風負けずジム通い
徴兵に取られず銃も持たされず
お隣は昼から酒で良い調子
良いやろか広島へ牡蠣食いに行く
被爆地の小春日和の川下り

丹波篠山市　藤井美智子

この師走コロナなかなか消えません
人生の紆余曲折を越え八十路
あと五分五分温みに負ける朝
忙しい時間ヘラインが邪魔をする
生きる事瞬時瞬時の積み重ね

西宮市　緒方美津子

謝罪会見初めて顔を見る社長
忙しくしてると逃げる病垂
珍しい苗字に出合う散歩道
残りものではありません木守柿
振られた人に会ってみるクラス会

西宮市　亀岡哲子

お散歩も兼ねてゴミ出し陽を浴びる
亡き母も亡きミーチャンも居た炬燵
嘘だ嘘だ追い掛けてくる歳の数
少しずつ演技も込めて老いてゆく
値上げだが三年振りの蟹パーティ

西宮市　福島弘子

あの光景一・一七巡り来る
テニス優勝弾んだ声の孫のＴＥＬ
焼き立てのパンの香りや今朝の冷え
人招く過疎のアイドル猫駅長
姿見ぬ数多のレシピメモのまま

南あわじ市　萩原狸月

パンデミック政治力では治まらず
一国のメンツ世界に物価高
老い二人無縁になったクリスマス
ふる里に昔のままを願う無理
ちぐはぐに妻と私の予定表

岡山市　大石洋子

朝焼けがきれいだ今日はゴミの日だ
生きている確認としてゴミを出す
ごちゃまぜの人生のような味噌汁だ
三日坊主にならぬよう川柳ひねる
遠慮がちの手書きの値上げの知らせ

岡山市　工藤千代子

笑い声響いて雨が止みました
逢いたいなぁ柿紅葉ゆらりゆらりと
コーヒーにちょっと甘言入れてみる
母の役だけが卒業できません
一押しを拒むと雪になりますよ

岡山市　丹下凱夫

おはようさん朝一番の名セリフ
落ち葉踏むのが楽しくてする散歩
お茶を飲みながら炬燵を出す話
晩酌が早過ぎたのか日が高い
金がないので炬燵から出たくない

岡山市　永見心咲

冬花火掴めないから美しい
新しい波避けようか乗っかろか
飲み込んだ言葉醗酵くり返す
どれほどの背中を見失ったのか
テープカットあの日の君は横にいた

階段で犬が見守る歳となる
戦争よ無くなれ地球抱きしめる
岡山に生まれ育って土となる
晴れ女わたし居るから晴れの国
孫の受験ばあばはそっと祈るだけ

岡山市　前田恵美子

朝食に南天の実に来る小鳥
雨上がり三年振りの大名行列
信心深い姑の形見の小銭入れ
引出しでお四国行きを待つ小銭
友とおしゃべりいつしか心晴れてくる

岡山県　高岡茂子

秋と言う織機が木々を錦繍に
干し柿が喜んでいる空っ風
古稀すぎて師走来るのが早くなる
血統はわたくしよりも猫が上
みんな持つ人を笑顔にする笑顔

岡山県　藤澤照代

軽く手を上げて夫の朝送る
時計の早さよ薬飲む時間だよ
ポストからコトリ幸福の音がして
幸福のふりして薬買うてくる
引き算ばかりして師走の人となり

竹原県　岩本笑子

仰向けになって探している虫歯
決断をするには踊り場が狭い
心からのお詫びが伝わらぬ政治
前歴など捨てるオトコの分岐点
秒針まで合わすお役所の時計

三原市　笹重耕三

ぴょんぴょんと跳ねる真似して若さ鼓舞
自分史に少し足りないピリ辛が
枯れ葉舞うわたしは詩人縁側で
冬景色ワクワク京へ旅支度
スマホメモつい忘れては無駄を買う

岩国市　上村夢香

勝ちゲーム一〇回以上観て飽きず
独り者チームワークで守られる
語尾などは上げないプロの判定者
注目の人しか目には入らない
役割をこなしてチャンスやって来る

防府市　坂本加代

瞑ってるのに像がはっきり病気かも
寒さが厳しい自分は暖房にいる
蕎麦粉練る手加減にコツあるらしい
有頂天になっているけどあと落ちるだけ
遠くてもはっきり聞ける悪口は

鳥取市　池澤大鯰

鳥取市　奥田由美

手作りのチョコが渡せぬ片思い
娘が作るチョコが今年も太らせる
粗食でもアイス効果のリバウンド
外灯を役所が増やす野獣事故
百円のビールで祝うルビー婚

鳥取市　岸本孝子

新米の匂いも添えてまず仏
リモコンを握ってテレビ独り占め
厳しいが凌ぐほかない物価高
よほどのことなければ折れぬ千羽鶴
相棒がいるから弾む台所

鳥取市　倉益一瑤

寒いから笑い袋を吊っておく
くすぐってみたい仁王の足のうら
普通にははまりたくない子がひとり
ランドセルでかい翼になるだろう
寄り添って夫婦はやがて風になる

鳥取市　田賀八千代

水槽の中でもがいているけじめ
嬉しいとサイフの口もよく喋る
縄跳びが下手で荒波には弱い
鍬持ってワンマンショーの幕が開く
セルフレジ避けて長い列に並び

鳥取市　棚田大

ふと目覚め今日の幸せ祈っちゃう
なあ皆んな勝手気ままをなくそうよ
わっ寒いあったかい夏浮かべちゃう
飲み会で言い寄られるも迷っちゃう
想像にこだわり過ぎかやつれはて

鳥取市　谷口回春子

日替わりで歩く路地裏家庭愛
あっよろめいた歳をとったか気のせいか
菜園の妻の優しさ二度惚れる
秋風に負けるもんかと膝小僧
紅葉が我が家の庭にやってきた

鳥取市　永原昌鼓

ひと蹴りが地球を沸かすドーハの勇
連れ添って六十五年元気なら
白寿まで歩くつもりの靴を買う
黒帯をもう結べまいプーチンよ
想像を絶する砂の美術館

鳥取市　中村金祥

年賀状縁を切るのも難しい
川柳で会話夫婦が上手く行き
もう二度とチャンス来ないか北の島
車座へ我慢の強い人ばかり
口下手も心開ける五七五

鳥取市　福西茶子

計るたび律儀三十六・五
距離よりも坂道選ぶスニーカー
大丈夫まだ悪口は聞こえます
仕切るのはわたし独りのユートピア
脳トレに漢字クロスとアエイオウ

鳥取市　山下凱柳

高齢者にまだ働けと言う政府
争いを避けて通れぬ人の業
想像力こそ生きる力と師の教え
七億円に今年最後の運試し
サッカーで狂喜今年の憂さ晴らす

鳥取市　吉田孔美子

柿ゆずみかん黄金に光る庭よ
街路樹を尖らせ春を競わせる
病なし米寿でビール酎二杯
木の家に残る背の丈猫の爪
ぼろを着て読書に嵌っているらしい

鳥取市　吉田弘子

夫愛でた坪庭秋は殊更に
どの部屋も四季を一輪侘住い
手術したからだ労る献立表
採算が老いには合わぬバイキング
来年の花粉予想をきく初冬

倉吉市　大羽雄大

菜園を止めたら善意ありがたい
新米ができたと玄米で届く
駅飾る生徒の作の花時計
集音器みんな拾ってくたびれる
紙とペン準備してるが浮かばない

倉吉市　牧野芳光

イソヒヨドリ啼いて異国の空になる
近寄って同じ空気を吸っている
箱から出たら薄れてしまう玩具たち
雑踏で目を閉じる時君が居る
元気度と比例している貯蓄高

米子市　池田美穂

母止めて妻止めてヒト保留中
あと一句未練があって辞められぬ
干し柿に干し芋秋は干しづくし
サイズ変化ないのにどれも似合わない
柚子の棘あれは絶対武器になる

米子市　伊塚美枝子

人間を支配下に置く電子音
ぽかぽかの縁側ババと猫昼寝
政治家もタレントさえも二世占め
七波でも八波でもいいコロナ慣れ
ためらわず飛び込む勇気人の群れ

筆箱の底に貴方の秘密基地
日めくりの格言いつもおこってる
柔かい日差しのようなアドバイス
ライバルは落伍一人旅はつらい
仏さん見てるが見ないふりをする

米子市　後藤宏之

老松が毅然と生家守ってる
法要に夫の写真は若いまま
物価高料理の知恵も尽きだした
腹が鳴るカップラーメン待つ間
断捨離の決断急かすダンボール

米子市　後藤美恵子

時々は嘘もまぶして続く縁
ちくちくと愛も一緒にこぎん刺し
ほどほどに不幸もあって友が寄る
喧嘩などしない夫婦がいるものか
命日が奇数月だとワンカップ

米子市　妹能令位子

当選を出口調査は知っている
神さまに聞きたい僕の砂時計
言い訳が完璧だけに増す疑惑
色柄もサイズもいいが諦める
忠告を無視して通う飲み屋医者

米子市　竹村紀の治

新しい感動景色四年後に
体力を保持して前を向き続け
没句にも推敲をして光当て
こつこつの努力が運を引きよせる
人生のゲーム笑って終わりたい

米子市　中原章子

いつからかただのメダカが熱帯魚
熱が冷めテキスト全部捨てました
あなたにはオーラがあると言う詐欺師
鈍いのかオーラある人見たことない
この一年何もしないで押し詰まる

米子市　成田雨奇

穏やかな日が続きお米が減り出した
うさぎ年コロナ蹴飛ばす心意気
役所より我が家に欲しいすぐやる課
もの忘れ歳のせいではないらしい
勝利知りゆっくりビデオ観るゆとり

米子市　野川宣子

泣き言は言わぬ白髪が増えるだけ
フリーの身何もあわてることはない
老いて今わかること多々曼殊沙華
いそがしく立ち働いて今日の幸
読書という杖があるから今日元気

鳥取県　門村幸子

風が来てまわす記憶の糸車
推敲はつづく深夜のまどろみで
超ミニを穿いていました雪のなか
隣からしんしんしんと話し声
周五郎短編集と柿の種

鳥取県　斉尾　くにこ

真っ青な冬空腹一杯もらう
雨の日は花壇も畑も水もらう
流れ弾当ると恐い山歩き
句会参加車乗れなきゃダメになる
会員が減る高齢化止められぬ

鳥取県　竹信　照彦

変わらずに若いと言われ苦笑い
還付金戻った税は酒に消え
口裏をいつも合わせる仲間です
アイデアが浮かんでは消えマイ川柳
酒が好きこんな私は父のせい

鳥取県　本庄　ひろし

造成地隣はどんな人だろう
花を植え隣近所で競い合う
さっぱりと水を流して日々新た
想像が人の生活進化さす
免許返納暮しのリズム狂い出す

鳥取県　山下　節子

道楽を見せ合うアホを曝け出す
なにひとつ狂うことなく正弦波
右脳から左脳へソプラノが刺さる
嘘つきになるのか夢をあきらめる
不可欠な楕円の出雲路を歩く

松江市　石橋　芳山

夕焼けに皺のひとつを笑われる
コタツ抱きウクライナの冬を想う
淋しいとポツリつぶやく冬の貨車
時々はアルバム覗く遠い人
気ままに生きてボタンの穴が足りません

松江市　藤井　寿代

裏表少しありますマイタワシ
転んでも畑地はやさしケガも無し
元気出る白寿の母の絵を飾る
飽食は悪　難民に冬が来る
さざんかの甘い香りで満たす冬

松江市　松本　知恵子

ワールドカップ新時代がやってきた
8強逃すも強豪と好勝負
一度だけのこの世今年も暮れる
曽孫八人みな達者
転ぶなと五・七・五の運動し

出雲市　伊藤　玲峰

境港市　藤原久直

いつもと違います今日は誕生日
年金のサイズで生きる老い二人
八十路坂人生ゲームこれからだ
絶好調声も半音高くなる
流行など追わないダブルのズボン

阿南市　小畑定弘

老人に火を付けたのは美文字です
パスワード忘れたボクはどう生きる
通販が知らせてくれる誕生日
今日もまた一人笑いの日記帳
樹木葬それもいいなとボクの骨

東かがわ市　川﨑ひかり

華やかな舞台支えている黒子
仲良しの家族に絶えぬ笑い声
家族皆息災なのが我が宝
疎遠でもすぐ車座になる家族
望郷の思い深まるあかね雲

松山市　大内せつ子

細胞が真っ赤になったプロポーズ
ゆっくり聞くわ白木蓮の裏話
あの時のおもちゃに聞いてみたいこと
雑念を抱いたままで大根切る
無花果の口のあたりがこそばゆい

松山市　栗田忠士

出力不足思えば古いバッテリー
閃きのネタを探しに回り道
血も涙も汗もまだまだ涸れてない
赤と黄が不足で虹が描けない
断捨離の捨の字辺りで蹴躓く

松山市　古手川光

この地球手玉に取っているコロナ
後手後手へ千変万化するコロナ
休火山が噴火始めた中国
ああ生きていたんだ目が醒めた
読んでも読んでも素通りする頭

松山市　宮尾みのり

掛け算で夢がいっぱいあった頃
加速する老いへ割り切る他は無し
デパートで疲れ百均リラックス
電子辞書語彙も少なくなってきた
子らの足引っぱる長寿とも言えず

松山市　柳田かおる

秋深む学園街の銀杏散る
明日咲くためにパワーをためている
体内時計ズレたようです午前四時
ブランコが揺れるストレス乗せたまま
ちっぽけな悩み水平線しずか

今治市　永井松柏

訳あって離合集散くり返す
口の軽いワライカワセミには注意
愛想つかして二酸化炭素吐き出した
若冲の多彩な黒が鶏を描く
その通りなので笑ってやり過ごす

西予市　西田美恵子

ステキな映画が始まるように雪が降る
シャワー全開本当ですかあの噂
息吸って吐いて十二月も終る
寄り道をしようか時間ならあるが
パチパチで終った味の無い会議

熊本市　杉野羅天

花みんなひまわりに見えて来る危機
晩節へまた難題が課せられる
旅楽し自然の花を見ています
百歳元気二十年振り作る義歯
人衰れ死が平等に忍び寄る

北九州市　小松紀子

老いて似る姉兄母の血が通う
極楽で恩師と句座を囲む夢
デイケアで筋力アップ努力中
暖かいベッドで塔誌ブラボーで
あの世でのシナリオ今も考え中

唐津市　坂本蜂朗

妻の背の曲りを止める術がない
夫婦共湯たんぽ抱いて笑いあう
白内障女性がみんな美しい
丸坊主孫の決意が肘を張る
孫の恋見え隠れするクリスマス

札幌市　小澤淳

熊鹿が増えて近年負け戦
コロナ禍の三年重し白髪に
もち搗いた記憶なつかし十二月
監視社会に穿ちはどこへ行くのやら
食の基地牛が悲鳴の餌の高さ

男鹿市　伊藤のぶよし

節電の冬昔の風にドッと遭う
胸に住む鬼ならオラの味方です
言い逃れなら酒のせいより歳のせい
納得しても服従はしない質
泣くな心臓騒ぐな家族まだ生きる

黒石市　石澤はる子

風が味方肩の力を抜いてから
自動ドア噂話を撒き散らす
ずれる音符老いの悪あがきかも知れぬ
標識無視我が道をゆくかたつむり
ゆっくりと今日一日を噛み砕く

一面の白にも慣れてきたけれど
安心はできない冬の曲り角
腕ばかり鍛えられてる雪の嵩
陽が射して雪の重みが増してくる
降り止まぬ雪の大きさばかり見る

黒石市　北山　まみどり

リメークに命預けたワンピース
肥後守時々研いで使用中
病む地球ウルトラマンは匙投げる
物価高断捨離少し早かった
お見合いはご馳走めあての十二回

弘前市　稲見則彦

人としての強さを知った愛子さん
98歳健気に生きて文を書く
ステイホーム一心不乱に知識を得
四季折々自然対処も生きる道
大雪に埋もれる冬もやって来る

弘前市　今　愁女

掛け声は今年もデカく鬼遣らい
立春に背筋気にするウメ古木
一カ月年初の誓い反故にする
しばれる夜地酒がじわり利いてくる
爪を切る生きてる証見るように

塩竈市　木田比呂朗

欲張って二兎は追わないことにする
老いの身に気合いを入れて鼓舞をする
コロナ禍を上手に渡る知恵が増え
断捨離の次の時代は物不足
紅ささず女をやめるらしい妻

横浜市　菊地政勝

再入院デジャブのようにまた深夜
婿殿がコロナいよいよ我が家にも
濃厚接触娘は移動できません
夫の目力弱くて少し不安です
「ありがとう」夫が病院から電話

上尾市　中村伸子

「今日が山」の老衰の猫抱き帰る
孫と子と目を泣き腫らす老猫よ
声かけ続け奇跡起こした老いた猫
断捨離に断捨離こころは捨てない
引越しの荷造り亡夫など思い

朝霞市　前田洋子

手のしわに流れた日々の重さ見る
老後にもこんな苦労がつきまとう
経鼻胃管取れて主人の顔晴れる
これからの貴男私が看取ります
良いこともあるさ満月菊日和

越谷市　久保田千代

東京都　川本真理子

着ぶくれて覚悟はできていた寒さ
ウォーミングアップのアップ必要に
作戦を練ろう時間は有り余る
小さめの器になみなみと注ぐ
どこよりもまずはウクライナに春よ

八王子市　川名洋子

老いたとて仄に燃える恋心
だとしても好きなタイプにまた惚れる
ほっこりと機嫌良さそう今日の雲
まだまだと離してくれぬ我が布団
実印を押され重責担う紙

（前月分）大阪市　田中ゆみ子

腹立ちを支えるシャドーボクシング
重ね着は電力不足の救世主
池上さんを呼ぼう日本語を使おう
北風に負けるな激辛のラーメン
端っこが隅っこが好き兎も我も

（前月分）大阪市　寺井弘子

マイホーム昭和の匂いする家族
待つ人のおでんぐつぐつ酒二合
連弾のピアノに映える日暮どき
髪油匂う雨傘虹を待つ
赤子の声まっすぐ空へとどいてる

（前月分）河内長野市　黒岩靖博

弱点を言ってもらえる友二人
熱中症ぐにゃり体が戻らない
絶食後食べた食事の旨いこと
忍び寄るくの字の背中老いの波
映画館の昭和のポスター高値つく

（前月分）鳥取市　池澤大鯰

晩酌に好きな刺身がついて来る
夢の中に他人の思い出迷い込み
いい思い出まだまだ作ってかなくっちゃ
ずさんな工事道路ぽかぽか穴があき
東塔があれば西塔もあったはず

（前月分）熊本県　岩切康子

久し振り杖使ったら肩が凝る
お礼参りの記念の鈴を私にも
父の齢母の齢越え祖父目指す
新年も杖をお供に生きてゆく
通販に感謝している老夫婦

川柳塔柳箋

3冊　送料共　1000円

事務所あてお申し込み下さい。

菠薐草の花 ②

野沢省悟
「川柳触光舎」主宰

久びさの句会血液さらさらに

石田　ひろ子

コロナ禍の中、昨年から少しずつ再開されて来た句会や大会。第七波がピークを越えた秋、僕も喜び勇んで句会大会に参加した。久しぶりに会う顔、顔、顔。そして、披講、呼名の声。やっぱりナマはいい。参加者全員「血液さらさら」となり、みんなが若返ったのだ。

年賀状触るアドレナリンが出る

栃尾　奏子

インターネットの時代となり、画面で何でも済むようになった。そのうち「手触り」という言葉は消えてしまうかも。年に一度届く年賀状。遠い友人ではあるが、まだ元気なのだと知る。葉書の紙の肌ざわりが、ゆるやかな喜びと、活力を与えてくれる。「今年もがんばらなくっちゃ」とつぶやく。

青空のブローチとなる大銀杏

藤澤　照代

黄金色に輝く銀杏もいいが、全て葉を落とした銀杏もいい。いつでも通る道にある大銀杏だが、ふだんはよく見ていない。辛いことのあったある日、空を眺めたら青空が眩しかった。そこに銀杏の大木がそびえていた。青空という洋服にブローチのように佇む銀杏。その銀杏に洗われた心。

九条で戦も知らず喜寿傘寿

村上　直樹

太平洋戦争後、日本で戦争はない。戦争によっての殺人もなく、また殺されることもなかった。この句のように「九条」があったからであろう。この九条が全ての国にあったら、戦争は地球から消える。この句の背後には、作者の九条への感謝と平和への願いが込められている。

この先にボクの停留所はあるか

稲見　則彦

雪の降るなか停留所でバスを待つ。他には誰もいない。時折通る車の他は何も聞こえない。しんしんと降る雪だけが眉や肩に積ってゆく。ふいにこのままの生き方でいいのかと思った。可もなく不可もなかったこれまでの人生。まだ何か出来るかもしれない。「あるか」の「か」ににじむ、未来への静かな決意。雪は降りつづきバスはまだ来ない。

いつの日か切れなくなるよ足の爪

江島谷　勝弘

読者のみなさん、足の爪を切るとき、どんな格好してますか。おそらく背中を丸めちぢこまっているでしょうね。そのとき、腰や背中は痛くないですか、痛い人はけっこういるはず。実は僕もそうです、加えて老眼がすすみ爪がよく見えない。足の爪を切るって大事業なのです。でも足の爪を切れる内はまだまだ大丈夫。

線を引きました静かになりました

藤原　久直

やさしい言葉でつくられた句であるが、難解な句で、そしてコワイ句である。「線を引く」という行為は、たぶん人間特有の行為と思う。大きくは国と国の境に引く線。精神的には差別をするという線。人間は様々な線を引いて暮らしている。ふつう線が引かれると騒がしくなるが、作者は静かになるという。それは線の向こうが消滅した、あるいは消滅させた、からなのだろうか。

英語 de Senryu ⑬④

麻生葭乃 『福壽草』 (1955)

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

児を寝かしてからの天下を寝てしまい

after getting kids to sleep
I miss my Golden time
to go to sleep too

浴槽へずらり立ったは皆わが子

standing around
the bathtub…
all my kids

---

get~ to sleep　～を寝かしつける　*miss*　取り逃す　*my Golden time* 最高の時間
too ～もまた　*stand around* まわりに立つ　*bathtub* 浴槽　*kids* 子供たち

～リバーウィローのため息～ ⑭　２０２３年河合楽器 photo-haiku　カレンダー

１月号に続いてカレンダーの紹介です。吉村が「河合楽器製作所」のカレンダー「フォト・ハイク」に作品を寄せて20年になります。同社の河合弘隆社長が世界各地で撮影した写真に日英俳句作品を寄せています。写真そのものを説明するのではなく、写真に人が映っていれば人になりきり、山や海、動物などに入り込んで、イメージを膨らませます。２０２３年度は以下のような作品ができました。

a bistro/near the harbor …/winter gull
ビストロは港の近く冬カモメ　(1,2月) バレッタ　アッパーバラッカ・ガーデン(マルタ)

spring breeze…/a woman polishing/her nails blue
海色に爪磨く人春の風　(3,4月)　エルニド　ラゲン島（フィリピン）

yucca flowers/on rocky hilltops/like dinosaur bones
ユッカ咲く恐竜のごとき岩の山　(5,6月)　パームスプリングス（アメリカ）

through/the alley, fado…/in my drowse
路地越えてまどろみのなかファド聞ゆ　(7,8月)　リスボン（ポルトガル）

he plays/Polonaise/this fall again
今秋も夫の奏でるポロネーズ　(9,10月) ワルシャワ　ワジェンキ公園(ポーランド)

winter rainbow/in his pocket/he crosses the sea
冬の虹ポッケに入れて海渡る　(11,12月)　モン・サン＝ミシェル（フランス）

誹風柳多留一三篇研究 30

高野範雄・山田昭夫
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男
清　博美

236 **直の出来ぬ門トでせげんハ一ツぶち**

高野　売買交渉がうまくいかなかつたのであろう。それに腹を立てた女衒は、門口へ出て来た所で娘をぶったというのである。引用句の如く娘が大きな声を出し泣きわめいたのが原因かもしれない。

ほへたので弐分ちがつたとぜけんい、　安五宮1

大門だ泣クとしばるとせげんいひ　一一27

清　賛。

237 **なつかしくゆかしくそして金と書**

高野　遊女からの文である。客の足がちょっとでも遠のくと、なつかしいだの、ゆかしいだの、美辞麗句を並べたてた手紙を文使いに届けさせる。が、それは金の無心、馬鹿を釣るための餌なのである。手紙は唇の紅付き巻紙であった。

馬鹿をつる餌サニみゝずをのたくらせ　四二32

そらつことありがたそうにむす子よみ　一一28

山田　賛。肝心要は「金」。

伊吹　賛。唇の紅付き、知りませんでした。

清　賛。

238 **その畳そうで大門かつぎ出し**

高野　どこかの妓楼で心中があつたのであろう。大門から担ぎ出されている畳がその部屋の畳だというのである。『川柳心中考』によると、妓楼で心中があった場合には、その畳や建具一切を非人に払い下げなければならないという細則があったので、四方から非人が集まってきて、御法度に関係のない什器備品までうちこわされ……とある。遊女は失う。悪い評判がたち客足は遠のく。部屋の模様替えしなければならぬ。妓楼にとっては大変な損失なのである。

壱畳取リかへりやい、と遣リ手い、　安九智3

心中のあすから遣リ手気かちがい　明四松2

小栗　賛。大門をかつぎだしている畳が、例の心中の畳らしいな。

清　賛。

239 **車に酔て大内のわらひもの**

高野　『平家物語』第七十六「木曽猫間の対面」から、

義仲は牛車の遅さに怒り、牛飼いに牛をたたかせ、両手をパタパタさせて、車の中を転げ回っていた。まるで羽根を拡げた蝶のように。挙句の果てに降り方も反対から降りるという無作法を演じた。

車などに乗ったことがない木曽の田舎者。車に酔つた無作法と、御所の笑いものになつたであろうという想像句。

ひそ〳〵と車のうわさ京てする　天六満1

馬の気で車にのつて笑ハれる　安五亀2

清　賛。

240　**ばかな事娘にきんをけられぞん**

高野　おきゃんで、おしゃべりで、早熟で、色気を漂わせた生娘だが、男女関係は未熟である。

口説かれてもはっきりと返事はできないのであるが、主題句・引用句の如く近づいて来るのが嫌な男であれば、相応の態度をとり逆襲するのである。

木娘をくどくハあらぼねがおれる　天元梅3

木娘をくといたつらにミゝすはゐ　安四満2

清　賛。

241　**高ゥの師直とかつほをわるくいひ**

高野　「高師直」は、足利尊氏の執事、武蔵守高師直。塩冶判官高貞の妻に横恋慕して、侍従という女性を使ったり、兼好法師に恋文の代筆をさせて思いを伝えるが、高貞の妻は応じないので高貞を討ち果たした。妻は高貞の後を追い自殺した（『川柳大辞典』）。

「鰹」は、『徒然草』のなかでけなされている鰹。「この魚、己れら若かりし世までは、はかくしきひとの前に出づる事待らざりき」（第一一九段）とけなしている。

代筆を兼好いつそうるさかり　三六33

けん好がきらひしつじとかつほなり　天元松2

清　賛。

242　**下女ていしゆ帯ひろどけで〆られる**

高野　「帯広解」は、帯をきちんと締めないで、だらしない姿（『川柳大辞典』）。

亭主が下女に夜這いをかけたが、女房に現場を押さえられ、亭主と下女はだらしない姿で女房に懲らしめられている光景。

女房を三声おこして下女へはい　天八天2

女房のけいどうをくふ下女か部や　天六宮2

清　賛。

243　**すけんぶつひる寝して居るばからしさ**

高野　遊女を買うのではなく、冷やかしに行くだけなのに昼寝をして夜に備えている男。馬鹿な男と笑っているのである。

むすこのひるね晩にゆく当テが有リ　一〇〇127

すけんふつ本田に結ふハ何事そ　明五仁2

山田　「夜に備えている」のではなく、前夜歩き回って寝不足になったからでしょう。

小栗　礎説、山田説共ありうる。礎説の方がより馬鹿馬鹿しい。

細井　事前の方がおもしろい。しかし眠れるかな?

清　小生は礎稿説。

244　**御つまりそうで置に来る金屏風**

山田　詰まりは「②困窮すること」（『日国』）で、御が付くから、いわゆる御不勝手の事で、そのため家伝の金屏風を質に「置きに来る」。この御詰まりには、年が詰まるを利かせているか。

御不勝手おくさまびわも琴もなり　一〇22

長船もながして仕廻ふ御不勝手　四〇25

清　賛。

自選集

ホップステップ兎よ眠ってはならぬ
師の句碑の深さ千光寺の高さ
天守から彬の句碑に手を合わす
展望台私の明日が見えてくる
ロープウェーにするか石段にするか

小島蘭幸

目が覚めて今日も一日生きられる
青春の友と傘寿の回顧録
冬将軍タイヤ交換急がせる
アドレスに喪中ハガキが吹き溜まる
眠ったまま逝けたらなあと床につく

福士慕情

自己顕示欲　薄くなる日ごと
妥協を重ね目力弱くなる
嘘つきたくはない約束はしない
萎みながら甘さ増す吊るし柿
さあ朝だ布団の温もり蹴る勇気

藤村亜成

酸欠になりそうふらっと寒い風
我慢ガマンと生きて来た昭和
幸せをしっかり結ぶ糸の先
蚊も生きているのに叩くくせが出る
米寿です自転車を止めました

松本文子

W杯俄ファンとなり叫ぶ
老い仲間話題花咲く病垂
内乱が続く足腰肩頭
賞味期限が過ぎて思わぬ味となり
このままじゃ水の星から砂の星

三浦強一

年の暮れだから解決できること
テレビでは窮屈そうな立ち廻り
祭りより露店目当ての孫はしゃぐ
村長の音痴の歌で盛り上がる
坂道があって人生鍛えられ

三宅保州

我ながら老いたと思う身の動き
二度三度夜中に尿意あり忙し
耳遠くなって世間に疎くなる
アラサーの孫二人もいて未婚
生涯の重荷をおろす終の駅

村上玄也

廃船

忘れたいことはきっぱり忘れよう
小さくても棘は残さず抜いておく
時間はある老人だもの閑だもの
廃船ながら祈りと知恵の旗印
みつめると天にも浮かぶ船の影

八木千代

としのせいなら腑に落ちることばかり
句読点打ちそこなって八十路坂
米寿なりに欲もだんだん小さくなり
試されている老々介護の日々
かと言うて老いの独りも切なかろ

山本希久子

冬の夜のコケシ聖書を読んでいる
ユーモアのわからぬ猫を飼っている
意地張れば鴉はやがて白くなる
懸命に影ついてくる曲り角
仇討ちはイチゴ畑でするがよい

板尾岳人

自らを花粉で汚す百合の白
このほかに雨降る星はあるだろか
老いたれば子供に還る飴ひとつ
またしてもお涙頂戴されちまう
沈黙で守るわたくしの尊厳

居谷真理子

正月が近いとなぜかよく転ぶ
一期一会どこかでお会いしましたか
まだ明日があるぞ小銭の音がする
今日も雨また体重が増えそうだ
税金の値上げで議員また太る

川上大輪

ポストから霜見て帰る休刊日
第九やら忠臣蔵の師走越す
家族ほどは残して船の旅
耳に琴目でも食べさす京の宿
灰はもう線香だけの家になり

北野哲男

目立たないように咲くのも自己主張
微笑みを忘れてマスクにも馴れて
まだ未練あって漂う昼の月
数え日の机の上の諸事雑事
ローズマリーで煮込むわたしの非日常

木本朱夏

斬暫塹漸にほんごはむつかしい
篇偏編遍にほんごはややこしい
贈増憎僧にほんごはなやましい
弦絃眩呟にほんごはたのもしい
漫慢饅鰻にほんごはすばらしい

新家完司

訃を告げる電話だ次は誰だろう
長くなく短くもなくいい読経
煙草止め酒止め痩せて痩せて　骨
チンチロリン悪友たちの声がする
あーまたも生き残ったか葬儀場

高瀬霜石

紅葉を求めルンルンバス旅行
なんとなくせわしい師走歯科眼科
退屈だスマホ忘れた受診待ち
スニーカー歩ける幸を謳歌する
静寂はみんなスマホと格闘中

津守柳伸

新しい風持ってきた孫の嫁
逝った子は心の中で生きている
焼酎にうるさい昭和演歌好き
ちゃんちゃんこ着る豪雪のテレビ見て
イルミネーションされた木々たちご苦労さん

西出楓楽

二月には旧正月や地酒酌む
九州の唐津の雪や缶ビール
チョコの日にリクエストして2合瓶
診察が済んでお酒の許可を取り
過去未来トリスの瓶に印つけ

仁部四郎

倖せは妻が米寿で僕卒寿
会長の役がサプリになる卒寿
老人会右も左もドッコイショ
ラッキーもアンラッキーも越えた皺
無位無冠だけど明日もボランティア

平田実男

「川雑」語録 ⑫

蒼々亭閑談

川上三太郎（かわかみさんたろう）

一句中絶対に動かすべからざる言葉――それが僕の言ふ句語である。即ち僕の句に就て例を挙げれば

物干で日本を見てる居候

の場合「日本」が句語なのである。これは「東京」でも「大阪」でも「京都」でもいかない。絶対に日本でなければいけない。然し

大日本天気晴朗無一文

の場合の日本は句語ではない。句語は下五の「無一文」である。

（「川柳雑誌」昭和9年8月）

句集の森

『凧のいと』

森田茗人（もりた みょうじん）

母を恋ふ旅の枕がざくり鳴る
今日からは素直にならう歯をみがく
柳青く青くこの道たそがるゝ
灯を消して月が明るいのに気付き
今宵嘘がきれいに言えた爪みつむ
間道を抜けて悪路に突き当り
売られゆく牛へシグナルまだ赤い
無縁墓の上の椿が一つ咲き
寝転んで吹く口笛へ飛行雲
耳掃除ふと忘れもの思い出し
百までをやっと憶えた肩叩き
日帰りをするには惜しい海の色
腹の立つ夜人形の向きをかえ
道標に雲が湧いてる秋の空
凧のいとのばして風にさからわず

（昭和54年8月5日発行、うみなり川柳会）

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

限りあるいのちを思う風の宿
寂しさをじっと耐えてる風の町
兄ねむる　みんなみの島風渡る
兎小屋にも極楽の余り風
木堂忌　軍服を着たテロリスト
花時計　男はいつも待たされる
北向きの書斎が好きな父のペン
ペン軸が少し重たい日のコラム
辛酸をなめて仏の顔になる
生真面目も不真面目もいる猿の島
なめんなよ鉄骨飲料のんでいる
屑籠に夫の私語が捨ててある
風雪を刻んだ父のプロフィール
お茶めし風呂　妻という名の全自動
七転びしてから運がついてくる
集まるとすぐ号令をかけたがる
雑兵に妻が子がいる孫もいる

木本朱夏選

尼崎市　八木幸彦

後ろ髪引かれて帰る冬花火
風狂の湯につかりたい一人旅
コンビニに置いた自転車見当たらず
建て売りのチラシに使い捨てカイロ
電柱で不法投棄を見るカラス
北窓を塞ぐと旅に出たくなる

岐阜県　喜多村正儀

盛り過ぎた言葉ちらかる披露宴
言い訳のための持病もちゃんとある
丸文字が見抜く大人の修飾語
薄墨の知らせの後の長い雨
リフォームの服で二度咲く花の幸
傷心を癒やす旅なら北だろう

貝塚市　吉道あかね

死にみやげ　いっぱい作るはずでした
七十が終着駅か弟よ
姉ちゃんとも一度呼んでほしかった
友達の数の多さに救われる
東京は嫌い弟もういない
今年最後の満月通夜の空に出る

山口市　中前幸子

海月ふわふわ何かお喋りしたそうに
両手広げて今の幸せ抱きしめる
ブリキの鳩も世界平和を叫んでいる
月煌煌とわたしの海原を照らす
雑踏の中で凍っている影よ
退化する脳　自画像が歪みだす

松江市　中筋弘充

逝った子の部屋で近頃寝ています
八十を越えた頃からよく転ぶ
言わなくてもいいことまでも言う家電
猪から守った米を兄が呉れ
過疎の村に元気な人がたんと居る
八十二歳着地点など知るもんか

枝豆に禁酒守ってものたりぬ
電車待つ五分を惜しみ毛糸編む
銀杏散る百周年の校門に
わたしには戦を止める手立てなく
孫は別言えぬ節約物価高
欲しいのはがんばってより大丈夫

泉大津市　助川和美

人参をぶら下げてみる反抗期
ああ言えばこう言う人に鉄亜鈴
あれもこれもひと先ず預け十二月
肩の荷の残りひとつが下ろせない
あの人に会える期待の旅支度
気まぐれな人ね午後から雨になる

松山市　郷田みや

早起きの褒美朝焼け美しい
老いたとて食べて歩ける大丈夫
ああ紅白昭和が遠く遠くなる
喧しいなどと不届き除夜の鐘
兎跳びできてた頃を懐かしむ
煩悩は白紙卯の年春の夢

尾道市　村上和子

たられば の話纏って悪だくみ
うきうきもためらいもあり老いの恋
野路菊の白の秘密を知っている

大阪市　岡田恵子

Uターン禁止　進むしかないおんな道
散り時の覚悟はできて椿咲く
臓器提供使い古しでいいですか

尼崎市　宗和夫

退職後自分探しの旅をする
探しても目指す自分が見つからぬ
この歳でドン・ガバチョにはなれないし
肩肘を張らずこのまま生きようか
発熱外来予約取れたら熱が引く
神あれば疫病退散希う

八幡市　武田悦寛

冬眠に入る前には種を蒔く
早朝の都市ビル群は皆無口
ガラス窓雨だれ好きと書いて消す
軽いうそ仕立て直して立ち話
細胞をおだてて生きる老いの知恵
ずっと5分遅れたままの古時計

尾道市　小川道子

曖昧な風だ褒めたりけなしたり
本当は人間みんなさびしんぼ
寄り添うて傷の深さを庇い合う
生き延びて此の書籍にも救われる
情熱が冷めないうちに試し書き
夢で逢い声なき声で笑い合い

河内長野市　穂口正子

母の倍健気に生きてようやった
サプリ飲む内が花だと無駄遣い
吐いた嘘忘れんように吐き通す
赤か白あんた卑怯やロゼワイン
孫の目も険しくなった反抗期
息子たち原石のままおじさんに

安来市　原徳利

一人占めをするスイーツセレクション
心臓の毛も白くなるような冬
星数え続きは明日の夜にする
純情と思わせぶりのチョコレート
三味線と鼓が鳴れば踊るざる
おひたしに情けいっぱい振りかける

大洲市　花岡順子

カタールのコートに熱い血が騒ぐ
面白く大阪弁に叱られる
ネジ少し緩めておくと困らない
裕福になった野菜を貰った日
日々老化探しものだけ増えてゆく
幸せになると幸せ色褪せる

富士見市　中島通則

判断が後手後手になる聞く力
敵も然る者コロナウィルス七変化
ジェンダー議論「女らしさ」は幻か
百均に売っていました知恵袋
葬儀屋の松竹梅のコマーシャル
本棚に眠る定年指南本

伊丹市　延寿庵野鶴

両の手に今日一日の幸包み
生きてます伸びた手の爪足の爪
ボロボロの辞書から学ぶ明日の知恵
アスリートこころひそかに火を孕む
配るものないので笑顔配ります
しがらみを捨ててすっきり二度の職

海南市　山中閑

入相の鐘にセンチなたんぼ道
アルバムを開けばははの声がする
風呂吹きの寛ぐ居間にははの味
サクッふわ愚痴も一緒に揚げるカツ
やめようと言いつつチラシ見るお節
早くおいでお茶しましょうと置き炬燵

丹波篠山市　河南すみえ

愛される土筆のような人になろ
風邪ひくな粥と梅干し特効薬
春を待つピンクのスカーフ出しとこか
聞き上手一緒に泣いてお茶が冷め
犬好きが犬に挨拶して通る
老人会みんな名医になっている

竹原市　土井輝恵

失言に頭を下げて回る妻
曾孫可愛や婆人生をブラボーに
義姉が来て昭和息巻き吐いて行く
色々な惚け方があり夫と居る
頬被りするしかないか夫の乱
施設代詳しく聞いて溜息が

吹田市　岩口のぞみ

ひんやりが清々しくて遠まわり
師走だけ歌謡曲を聴いている
巣に籠る息子巣立てと尻叩く
熱燗用お酒揃えて冬仕度
こたつとはダメ人間製造機
人生に重ね駅伝折り返し

神戸市　村松久江

納得など出来ぬ規則が多すぎる
どのキーを押せば未練は消えるのか
好き嫌い年を重ねて加速する
優しげな声は出せなくなりました
様々に姿を変える雲に問う
これからは私が守って見せましょう

三田市　野口龍

ふところに余裕というサイフ持つ
まっすぐな道ばかりだと脇見する
見あげては銀河の彼方夢飛ばす
カタログを見てはため息ゼロの数
十七音書いては迷うペンの先
肩書きの無い名刺ですそっと出す

泉大津市　葛城隆雄

またアイツ呑んでくだ巻く悪いクセ
姫路城江戸がそのまま今に在り
睦まじく花も実もあるいい夫婦
根は真面目時代遅れが玉に瑕
秋風とともに懐冷えてくる
政権は垢抜けのせんその姿

小田原市　虎澤昭久

顔を打つ枯葉のふぶきそれも良し
箱根路の蕎麦屋のジャズのネギ青し
迷い道ひと角ごとに夜になる
病院の坂で味わう旅気分
胃カメラに内部情報露出され
古本の痒みと匂い渋味あり

高槻市　鳥居宏

散髪の頭すっきり気も軽い
遺言書できて心は秋の空
疲れはてノンアルコールぐっと飲む
病む地球治す人智を信じよう
窓拭いて紅葉の山近くなる
惜敗のサッカーを見る午前四時

今治市　安野　かか志

アクセルの爆音に酔うツーリング
父さんの背中が見えた蜃気楼
解らないZ世代の笑いツボ
名月を神話のままで崇めたい
原付きを響かせ朝を切る八十路

福岡県　本田　さくら

仲良しが風の便りにあの世へと
朝散歩仕事行く人帰る人
あら可愛子猫子山羊が丸まって
空見上げ親子の雲がゆうゆうと
朝晩の薬血圧友とする

唐津市　前田　廣幸

言う丈は言うて他人には言わせない
通販の吸引力に耐え切れず
齧られた脛も心のアルバムに
平和呆けしてる場合でない世界
疑えばそんな顔にも見えてくる

佐賀県　真島　久美子

おだやかな空だと思う更年期
鳥は二羽わたしは一人にも満たず
終電の箱を開けてはなりません
神様の声持ち帰る恋みくじ
冬の雨やがて涙になるのかな

宮崎県　恵利　菊江

運河から古い話が顔を出す
泥軍手働く汗と励み合う
酔うほどに御国自慢の酒がある
頑張った証し浮き出る玉の汗
日常の風景に猫参加する

沖縄県　あら　さくら

過去はすて自由に生きろ願い逝く
定年後肩書き背なに担ぎ行く
断捨離で肯定否定多数決
寄り添って哀を共有いやし猫
距離保ちまるでスマホも糸電話

弘前市　小山内　真由美

さよならがどんどん側に寄って来る
私の小さな歴史まだ途中
寒くなった金魚もあまり動かない
芸名付けたとカラオケ好きのおばあちゃん
いろんな人とときどき笑うそんな町

石川県　堀本　のりひろ

あちこちに気を遣いすぎ枯れ尾花
老い深し口を開けば眼鏡何処
土壇場で右へ左へ迷う杖
心中に居座る妬み深い海
年齢を数えたくない歳になり

アラームを叩き消すのは足の指
音もなく忍び込むしあわせな魔女
言の葉の裏に隠れている擬音
茜雲不協和音を丸め込む
戦いの悲鳴に地球儀ドタバタ

船橋市　中嶋常葉

働いた生きた笑った泣かされた
手の平で遊んでた人ずり落ちる
キッチンは我が家の魔法レストラン
諦めが早くて過去はすぐ忘れ
見回せば四方八方みな他人

東京都　尾畑なを江

親離れ加速している留学生
できる事老犬の世話全力で
食卓の花に癒されまた生ける
憧れるミニマリストは断捨離で
子の不在肉の消費が減っている

東京都　高岡弥生

文庫手に津軽鉄道胸弾む
メロス号　太宰の津軽識る旅よ
金木駅改札パンチ音今も
じょんからが心に沁みる五能線
弘前は珈琲の街歴史有り

東京都　宮田栄子

家の中ダウンベストで節電に
値上がりで我慢する物話し合い
喪中だがおせちについて揉めている
戦争の決着やはり腕相撲
夫より先に逝くよう祈ってる

横浜市　巖田かず枝

熱狂がマスクのブルー吹き飛ばす
W杯付き合う八十路壁を超え
16強よくやったねと前を向く
ブラボーとお祭騒ぎ許されよ
W杯平和なればの熱狂か

横浜市　加藤佳子

墨色の濃淡にじみ魅せられて
捨てられぬアルバム詰めたダンボール
カマキリの卵見つけて庭の木へ
静かすぎコトン・カタンが不眠呼ぶ
学習室若者と並び作句する

豊橋市　小松くみ子

豊作のミカンに泣ける生産者
贅沢は健康こわす元凶だ
勉強は今一つでも人気者
初優勝親方泣かす阿炎の技
渡り鳥星を頼りに海渡る

京都府　北野クニオ

大阪市　今村和男

最初からチョキを出してる見栄っ張り
いつまでもグーを出してる頑固者
人生は楽しくゆこうパーを出す
ジャンケンで決めてしまえばいいものを
手の平を二回返して仲直り

大阪市　近藤風羅

名も知らぬ雑草凛と花咲かせ
立つきわも後を濁さず逝った人
桶屋さえ儲かりもせぬ風吹かず
北風に背を向け独り飛ぶアゲハ
かさかさと落葉踏む音われ独り

大阪市　阪本秀子

新年の出足と未来どんなだろ
守るものできて覚悟が深くなる
傷ついてまた立ち上がり人になる
極寒の庭には凛と咲く椿
父母の遺影に和むはなしする

大阪市　白谷よしみ

三回のくしゃみで揺れる浅い恋
バツイチの黄昏同士ねこ自慢
てにをはの辺りで妻が尖ってる
アマゾンのおせち三段夜明け待つ
花札の満月昇るお正月

大阪市　滝井えみこ

父と子の湯船に九九の答え浮く
顔知らぬ隣人の咳気にかかり
竹串でさみしさ計る大根煮
上の空頭の中は君で満つ
母の語尾待たずになおも急かす父

大阪市　田原康雄

愛でてよしドングリ踏んで秋楽し
談山神社蹴鞠ポーズの妻七十路
紅葉のさあ見てくれと広ぐ枝
背を伸ばす老いた二人の影若し
秋宵の天体ショーで一句詠む

大阪市　中村峰子

まだ飛べるかもしれないと青い空
見ているよゴミにしないで形見分け
甘やかし犬でもアホになりまっせ
もう会わぬ会えぬ人増え老いてゆく
会えぬ友君の分まで生きてます

大阪市　森廣子

コロナの街ポインセチアは眠れない
あれは煩悩おぼろに群れて雲が行く
冬に入るちょっと小さくなって寝る
素っ気ないけど何故か心に残る人
生き延びてやがて欠片で風に散る

友五人逝ってスマホは鳴りもせず
権力者のエゴが世界を狂わせる
免許返納不便と安全天秤で
朝六種薬忘れることもある
背を丸め足の爪切りひと苦労

堺市　古川光雄

夜も更けてワインの赤が淋しそう
太くなったなあ細かったあの妻の指
娘ら嫁ぎ小さな御節妻と食う
旧クラス会　指笛を吹きたくなった
五七五に気持ちを吐いて救われる

池田市　倉本一弥

盗み食いしてませんよとシラを切る
孫に言う婆しんどいよ孫笑う
気づかないめっきり増えた独り言
食べたいなマシュマロみたい孫の頬
性格を知り尽くしてもまた喧嘩

泉佐野市　樫葉良子

タンポポのように地を這い生きてます
見つけたいせめて四つ葉をひとつでも
弾けるなら奏でてみたい街ピアノ
街ピアノ奏でる背中に物語
一文字で表すならば恋でしょう

柏原市　神崎江

ハーモニカ吹いて昭和にワープする
エンジンの音でパパだと分かるポチ
笑顔だけ残し写真を整理する
初恋はフリーズドライしたままで
信じれば伸び代はある八十路にも

交野市　山野双葉

冬のブランコ風の孤独を聴いている
朽ち果てまいぞ裸木へ雪が舞う
独りにも慣れサボテンに花が咲く
かごめかごめ後ろの鬼が背を摩る
もう夜かもう夕食かもう寝るか

門真市　坂本星雨

登山靴ほこり払って春を待つ
さざ波をたてる息子の反抗期
父母が逝き時がとまった里の家
川柳に勤しむ今日のペンの冴え
欠ける月おまえも知るや片想い

河内長野市　坂野澄子

日日円が値打ちを問われ悩ませる
眠い眼を擦って観てる大接戦
老醜は見せたくないと意地を張る
命運を分けたあの時あの一打
両肩を揺すってみても出ぬ気合

吹田市　西沢司郎

摂津市　荻（おぎ）の布　律子

新券は漱石ばかりお年玉
ショートケーキ千円超えはやはり無理
バレンタイン超ラブラブのタマと我
悲しみをクレンジングで落とす夜
チョコ食べて鎧を解いて素のままで

豊中市　貝塚　正子

知恵熱を出して母さんスマホ持つ
お節介コロナ後押しする老化
雨音に浸る私は今ショパン
ほどほどの優しさ欲しい日暮れどき
溜息をつけば幸せあぁ逃げた

豊中市　齋藤　奈津子

30分耐える通販口車
物価高洗脳されて買っている
デパ地下の令和のおせち多国籍
引き続き10年満期と言われても
世界の人が同時に笑う日がほしい

寝屋川市　長尾　千賀

「黒髪」と但し書きあり巫女募集
集合写真目立ちたがりの空笑い
モナリザになって弁解肩で聴く
平凡に生きると決めて楽になり
セーターが編み上がる頃他人かも

羽曳野市　黒木　ひとみ

「知らんけど」話のオチに使ってる
干し柿が日々に萎んで甘くなる
吊るされて夕日と同じ柿の色
一枚の田に数軒の家が建ち
老いの身のリハビリとして家事こなす

東大阪市　青木　ゆきみ

うどん屋で好きに食べろと言われても
夫婦仲数値化すれば恐ろしい
後ろ美人前向けません呼ばれても
太陽の塔まだまだ負けぬ顔がある
おにぎりの米粒見つめありがとう

東大阪市　青木　隆一

噛みしめてもう師走かと鮭のトバ
熱燗でしめて雑踏冬の宵
アクセサリーしているような蟹のタグ
折鶴になってチラシも誇らしげ
青インク手紙に滲む深い夜

八尾市　田邊　浩三

痛いとこ出るたび歳を思い出す
歩けない足もキレイに洗います
我がマンション桜は凄いが紅葉無し
秋はどこテレビの紅葉きれいだが
赤ちゃんが少なくなってゆく日本

神妙に新年コトッと扉開け
吐き切って新たな私チャージする
退くことを覚えて背中軽くなり
骨密度下がって老いを自覚する
肉球のやわさ私を労りて

大阪府　大浦福子

よくなじむ木綿どうしの恋の糸
墨をするしだいに気持澄んでゆく
この僕もライバルなんてうれしいな
世辞言ってニヤリと笑う変な奴
物分りよくなり過ぎてふやけ気味

大阪府　奥野健一郎

冬バラの蕾つらぬく意固地さよ
その話また聞かされる日の短か
大根の曲がりに合わせ引っこ抜く
同窓会三年振りの老け具合
菩提寺の方へ雲行く家族葬

大阪府　高木道子

ひとりじめ雲ひとつない秋の空
あれ程のギセイ払って何を得る
祈るしか打つ手が無いの平和の世
5・7・5固い頭をほぐします
いつの間にこんなに歳をとっていた

神戸市　石川克美

赤い実に鳥のおしゃべり盛り上がる
一本のもみじにもある多様性
銀河から九ちゃんの歌降り注ぐ
ランナーが吸い込まれゆく朝焼けに
オーラ消し子の光る時そっと待つ

神戸市　城戸誓子

ライバルの誤解を解いて夕焼ける
家籠もりへ派手な弁当屋のチラシ
雑炊までのコースやっぱり家族鍋
除夜の鐘許せぬ人を許せたら
新年の誓いわたしへ挑戦状

神戸市　米田利恵子

世のレールうまく乗れたか脱線か
少しずつ枯れてゆくよりひと思い
痛む背は夕日に踏まれた跡ばかり
職業に貴賤はないが好みあり
何色も楽しガーベラ君のごと

神戸市　田本古鈴

呱呱の声キレイな水で産まれ来る
清流が何時頃濁り始めるか
濁りたくないのに人生濁り川
摩周湖の神秘の蒼を霧隠す
洗い過ぎ私の色が薄くなる

神戸市　みぎわはな

逝きし子へ母の手向けた風車
帰郷して無縁さんにも手を合わす
まっすぐな背が悲しみを支えてる
折り合いをつけて緩める古財布
充分な介護を受けて尚淋し

尼崎市　山本百合

惣の芽もこごみも食べて春を呼ぶ
崩し字の流れの中にある妙味
万華鏡未知の世界へもぐり込む
虹の橋ゆるりと越える観覧車
メガネからはみ出す笑みへ人が寄り

伊丹市　岡村風琴

サッカーを夜伽のように見つめてた
金持も貧乏も同じ空気吸う
高齢の事故を見るたび我に問う
九十の背すじピンには憧れる
お出かけに気になるコロナ服が無い

三田市　生田えい子

助手席で眠る私を突く肘
眠れぬ夜魔の二時辛い安定剤
返納して家族の話題バスプラン
色便箋愛を盛り込む初レター
クラス会遠い秘密を連れて来た

三田市　幸田厚子

聡太ファン将棋無縁の私だが
のら猫と目が合い睨まれ仁王立ち
術後一年術のすごさを教えられ
実家には大の字で寝る部屋がある
何となくラジオの音が眠剤に

三田市　辻開子

近づけば歴史感じる君の顔
節約は断捨離という名目で
美味そうで買いそうになるキャットフード
高い値をつけると売れた価値基準
重すぎる茶碗が出来る妻の趣味

三田市　松下英秋

海辺の宿二重の虹がお出迎え
孫の絵も額に飾れば美術館
子育ての娘息抜き里帰り
一個のりんご今朝も夫と半分こ
日本チャチャチャ奇跡起こすと信じてた

三田市　森玲子

働かぬ働きアリはお友達
自分史に若干加筆する長寿
コロナ明けあれもこれもと描く夢
目の端に遠慮の塊蹲踞する
紅玉を探しスーパーはしごする

宝塚市　岸田万彩

誕生日ケーキ切り分け配る祖母
やってくる迎えたくない誕生日
山もりの落葉でかくすおとし穴
亡き夫の声が聞こえる深い霧
後始末自分でしてねと孫が言う

丹波篠山市　横溝安子

キャンバスにはみ出す程の秋を描く
結束で寒さ堪える猿団子
イカ墨パスタ喰えば御歯黒笑い合う
ときめきは若さを保つサプリです
採れたての野菜を運ぶ過疎のバス

西宮市　高橋千賀子

白浜はパンダ軍団マスコット
大掃除鍋釜磨きお正月
寄せ鍋は湯気プラスして御馳走だ
丸は好きでも丸い背は好まない
無口です風に話してうなずいた

西宮市　藤原みよし

しんしんと雪と歳月降り積もる
助けたい雪に埋もれた地蔵さま
敵味方埴生の宿を歌いあう
いつの日か森に棲みたいチェロを弾き
せせらぎと森の小径を夢に見る

生駒市　饗庭風鈴

古き友四方山話で日が暮れる
雪が降る大根煮込みゆっくりと
年重ね胸のトキメキ　ジャンボ買う
世渡りが下手で枕に愚痴を吐く
ジイちゃんは大人の公文一年目

生駒市　永田芙美子

飯盒の焦げも楽しい初キャンプ
節電に昼寝を兼ねて図書館へ
口喧嘩白旗揚げるいつも俺
責任大　目が離せない孫の守り
何不足子と孫五人妻元気

奈良県　室田行久

新しいノートへ紡ぐ日のドラマ
まだ坂が続いて役が終わらない
気ばかりがせかせかとして老いた足
ほっとした時間至福のお茶を飲む
喜びもまた悲しみも去年今年

和歌山市　北原昭枝

五十四日本メダカの冬仕度
夕立ちに洗濯物が泣きじゃくる
空っ風木の葉時雨を浴びて冬
無灯火でスマホ夕暮れの自転車
野良猫が消えた団地のものがたり

和歌山市　倉橋悦子

和歌山市　定松宏枝

ワールドカップ老いも地球も揺れている
あれこれと箇条書する十二月
運動のために続ける道掃除
チャレンジは五年日記を買ってみる
知恵袋子らが時々借りに来る

和歌山市　佐藤まき

楽しみの深夜ラジオは子守歌
後悔の何故かぐっすり夢の中
音を消し逆に眠れず夜が明ける
日曜のクイズ数独ルーティーン
温暖な土地に御縁で暮らす幸

和歌山市　鍋嶋澄子

登下校行きつ戻りつランドセル
洗濯物日差しうれしくダンスする
他愛ない夫婦ゲンカを老いて尚
夢さめて老いを背中に日々暮らす
姫椿紅い蕾を点す冬

和歌山市　西川千鶴

アスファルト突いて顔出す名無し草
気弱さを叱ってくれた郷の風
旅烏ビッグニュースを連れ帰る
軽い嘘ついて奈落の底に居る
私にはないかも知れぬ羞恥心

和歌山県　三枝眞智子

お帰りとロボットの犬尻尾振る
ひた向きにただただ花を植える日日
まな板の鯉開き直ってポーズする
人面魚ヒーローだったひと昔
最愛の人を見送る薄化粧

鳥取市　上山一平

天仰ぐガスよ電気よお前もか
矢印に泳ぐ水鳥行儀よく
夕焼けにワルツを踊る赤トンボ
卒寿です旅の支度はまだ早い
今年こそ両手広げて天を取る

鳥取市　大前安子

八十迎えあのねを口に出さぬこと
せっせっせここがいいよと子の元へ
子と積木倒さぬようにゆっくりと
プライドはぽつぽつ旅に出しましょう
一、二と伝えたきこと整理する

鳥取市　狭武紫陽

運命線透かしてみても見えぬもの
回れ右過去を見ている暇はない
一歩目は右足これで生きてきた
ぐうたらを許してほしい日曜日
最後にはやはり似てくるＤＮＡ

ひらめかぬ脳の掃除にひと眠り
初霜にやられましたよ無花果が
孫と過す一日なんと嬉しすぎ
いい婆ちゃんで居たくて孫に甘くなる
休みます最後になった友の声

倉吉市　宮田風露

つれづれに昭和の良き日思いだす
招待をされても遠くは行けないね
来てくれる人は待ちますいつまでも
寂しさが電話の後に押しよせる
晴れた日は畑の友を誘いだす

鳥取県　橋谷静江

船頭が多いと山を越えちゃうよ
再生紙多少の色は気にしない
これよりも上のサイズはございません
困難を笑って話すときが来る
ガラス越し手と手を合わせキスをする

松江市　相見柳歩

オレ流で簡単プラス大雑把
健康法貧乏ゆすり取り入れる
究極を小出しにしてる老いの知恵
音読で老いにブレーキ利きはじめ
それなりが身に付き小さき満足度

広島市　松尾信彦

言う事は皆同じの見舞客
地獄耳町内会を取り仕切る
つまらない事から埋まる予定表
まだ余裕八十路の俺が夜食する
免許返納夫が妻に付き纏う

広島市　森田博之

子育てで共に成長する家族
本心をふざけて隠す君の癖
青春はワクワクドキと生きること
残された余白が真価物語る
時の神誰の味方もしない主義

山口市　兼崎徳子

閉店の貼紙濡らし時雨去る
墓掃除ごめんごめんと花を抜く
義士の日の夜には雪の降りそうな
戦力にされて八十路は腰にきた
古暦最後見ぬまま外される

府中市　岸田武

八十半ばやっとその気になる後期
是が非でも八十半ばから再起動
衰える五体サポートする意力
年金と打ち合わせする旅プラン
クレヨンで描いたヒコーキ偲ぶ老い

美作市　岡本余光

実直な赤いポストが駄句ゴクリ
マスク取る知らぬおばちゃんニッコリと
抒情にも恋にも無縁村太鼓
運転はシルバーマークらしいでしょ

高知市　三谷松太郎

一枚の年賀が結ぶ五十年
取り上げた初孫だっこ感動よ
クリスマス町ど真ん中彩りて
ばあちゃんも柱の傷に背比べ

沖縄県　壽モモト

雨の日は湿った髪が邪魔をする
残秋に心に決める二つほど
営業の上から目線買うものか
あらあらと腐葉土の隅新芽見る

沖縄県　宮すみれ

介護中あと一口とホウレン草
公園で保護したウサギもクリスマス
クシャミして気づかわれたのはナースの方
子はないが子の立場だけ満喫す

神奈川県　小田幸子

人生は何日も疾走忘れない
八咫烏日本勝利願掛ける
新薬のゾコーバ飲めば利くそうな
物価高下げる工夫は何もない

大阪市　前川善之

ポケットに夢と希望の昭和の日
何もせずサプリばかりを飲んでいる
八十路前やっと終わった介護の日
週末は心の傷の大掃除

大阪市　吉積栄次

月食に自然の不思議思い知る
サッカーは守った人も賛えよう
湯たんぽは故障しない暖房具
八波来て仙人生活逆戻り

高槻市　三谷白黒

早や人生白寿に二年残ってる
お隣に落葉散るパパ謝って
訳ありのリンゴの中のあまい蜜
少し紅つけてはにかむ祖母写真

寝屋川市　坂本ミヨノ

若かった名残りの角があと一つ
相性の悪さ分かってまだ親子
よく噛めばそこそこ苦い母小言
不機嫌で細かく刻む今朝のねぎ

神戸市　槇田次郎

寒いけど家族の中は温かい
苦楽あり生かされている命です
自立した我が子に学ぶ事多く
ワクチンも五回接種で気も弛み

三田市　木村マユミ

年の瀬を喪中ハガキで時を知る　丹波篠山市　澤　良子

ひと声があなたの心和ませる
ズバリ好きあの時口に出せなくて
開花する語る人脈味が出る　西宮市　高瀬照枝

陽が部屋に春夏秋冬ありがたい
年月に汚れたわたしきれい好き
無知なので知ること好きでおもしろい
小休止コーヒー飲んで句はふたつ　倉吉市　伊藤嘉昭

独り居り楽しい話題持ってきて
妻実家淋しかろうと電話する
駄目元で今日の想い出作ろうか
飲み会の声もかからぬこのコロナ　倉吉市　若松由紀子

閃かぬ自分の頭脳持てあまし
百までは二本の足で歩く夢
許したがくすぶっている胸の内
針含む言葉は胸を突き抜ける　鳥取県　田中重忠

九十六　五臓六腑はまだ無傷
滑るなよ転ぶでないぞ杖の音
ふる里に誇れる物に伯耆富士
泥鰌ひげ剃れと鏡に睨まれた

雪模様おでん湯豆腐屋台酒
諺に励まされたり無視したり
生きて行く知恵の宝庫が諺よ
健康も暮らしも普通それが良し　尾道市　小畑宣之

「これが最期よ」電話をくれて逝った友
脳トレに店番してはいけんかな
大往生店番しつついけたらな
お客さまをリハビリにしてごめんなさい　三次市　伊藤寿子

思い出した時の嬉しさ自負してる
期待するほど喜ばない親心
日溜まりでぼんやり過す至福時
木枯らしと踊る木の葉よ何処へゆく　津山市　髙橋由紀女

「川雑」語録 ⑬

春寒

麻生葭乃（あそう よしの）

猫が欠伸をした。
屋根のちよつぱなに座つて、また、もう一篇欠伸をした。何を視てるんだろうなア。あの空つぽな脳がうらやましければ、あんたも屋根へお上り。
春の陽はまだ〳〵寒む寒むとしてゐるけれど。

（「川柳雑誌」昭和13年2月）

川柳句集『肉　眼』

橘　高　薫　風

耕耘機　色異なれど音同じ
石仏を三たびめぐれば縁し生る
掃苔の隣の墓に帽をのせ

能登から佐渡へ　九句

てんと虫　ここにも小さい輪島塗
銭湯に隣りす　輪島映画館
鬼あざみ　能登曇りてふ曇りあり
さい果ての旅に見し滝　海へ落つ
灯台と神の塗らせし花との白
海渡る　たかが佐渡とは云う勿れ
花の墓　大佐渡小佐渡並走す
忘恩や　磯の香のせぬ日本海
男あり　すっぱり痩せておけさ節

佐渡を去る

青佐渡を墓と思いしは只今なり
暮れ切らぬ花火　心があとさきで
虹の輪に孔雀も負けん気を起こし
夜の波にふたりの心縫わせおり
霧の夜の松の林に死後の景
彼岸会の無音無明は亀にあり
睡蓮に汗くさき身を遠ざける
漆黒のピアノから出る海の音
晩涼の木に吊るされし歌謡曲
猫抱いてあれば乙女子耳聡く
秋風に傷なきものはなかりけり
眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり
一人旅　切符切らるる音もよし

悼　河相すゝむ氏

面影の中折帽と旅鞄
草臥れがどっと仁王の大わらじ
スケートを履くと獣の姿勢とる

嗚呼　清原祐志君　五句

柩出た跡形もなし　療養所
耳濡らす涙　生涯仰臥の身

146

フィールドは無限

川柳を「伝統」と「革新」に分けて論評するのはいささか乱暴ではありますが敢えてそのように分類しますと、伝統川柳は一読明解ですが同想になりやすいと言えます。一方、革新川柳は独自性がありますが難解に陥りやすいものです。

創作で重要な事は「独自性」です。従って、伝統に飽き足りなくなって革新に向かう姿勢は理解できますが、「平明で深くまだ誰も言っていないこと」は無限にあります。

次に挙げる作品は昨年の愛染帖に掲載されたものです。

心臓に異常はないが気が弱い　松田蟻日路
階段を数えて登る癖がある　米田利惠子
定年後お風呂の掃除上手くなる　藤原　久直
取り零す目から口から掌から　大石　洋子
特売に弱く初物にも弱い　髙杉　　力
悪女にはなれないままで今老女　妹能令位子

右それぞれ作者自身のことを述べています。現代川柳のテーマの一つは「自分自身を詠うこと」であり。自分の状況や考えていること等は、他の人にとっては未知の世界です。「気が弱い」こと「階段を数えて登る」こと「風呂掃除が上手くなった」こと「取り零す」こと等々、すべて独自性があり、このユーモアと自嘲は革新川柳では味わい難いものです。

対向車疲れてますね大欠伸　大羽　雄大
じいちゃんはお菓子の袋歯で千切る　野川　宣子
初孫は寝返りだけで褒められる　槇田　次郎
抱き枕夫は三つ持っている　山下じゅん子
出るたびに衣装が派手になる識者　松尾　信彦
四捨五入すると男は全部四捨　真島久美子

右それぞれ、「対向車の運転手」「じいちゃん」「初孫」「夫」「識者」そして「男たち」等、自分以外の人間を詠っています。このような句を見ていますと「人間は面白いなあ」と改めて感じます。革新川柳ではこの「人間の面白さや哀しさや優しさ」等を表現した作品にはなかなか出会えません。

空き家だがセコムシールは貼ったまま　堀　　正和
豪邸にケチつけながら散歩する　大久保眞澄
どれほどの命奪った蠅叩き　黒田　茂代
カラスの死運動場のど真ん中　杉野　羅天
欄干にカマキリぽつん朝日受け　丸山　孔一
運命を知らずに牛は大欠伸　栂瀬みちを

右の前3句は「空き家」「豪邸」「蠅叩き」と物体を分析。後ろの3句は「カラス」「カマキリ」「牛」と、生き物を見詰めています。そして、次の6句は時事を詠っています。このような「作者が発見した具体性のある作品」を見ていますと「川柳のフィールドは無限！」と改めて感じます。

砲弾も白球も飛ぶ広い空　川本真理子
戦争は天災よりも恐ろしい　奥村　五月
停戦を願う読経が長くなる　松尾柳右子
ピロシキは好きプーチンは大嫌い　清水久美子
悲しい場所になってしまった西大寺　北村　賢子
店員に聞くのも癪なセルフレジ　菊地　政勝

愛染帖

新家　完司　選

（投句257名）

言葉だけ記憶に残る微積分

美作市　岡本　余光

（評）微分とか積分とか、そのような言葉だけは覚えているが、さて、内容は如何様なものであったか？　その欠片さえ出て来ない。

銀行の利息のような記憶力

大阪府　米澤　俶子

（評）今や「ごく僅か」という比喩の代表となった預金利息。記憶力がそのようになったとは、残念ではあるがまさにその通り！

冷蔵庫明日すること貼って寝る

大阪市　岩﨑　玲子

（評）明日の予定などひと晩寝るとキレイに忘れてしまう。毎朝開く冷蔵庫のドアにメモを貼り付けておくのはグッドアイデア！

職業欄「無職」の筈が何故多忙

宝塚市　丸山　孔一

（評）ヒマを持て余すようになるとボケる恐れあり。現役の頃より忙しいのは「川柳」のおかげではないか。有り難いことである。

飲むほどに賢いことを言いたがる

神戸市　奥澤洋次郎

（評）酔っぱらいが声高に主張するほとんどは日頃から腹に抑えている自己主張や自慢。翌日は自己嫌悪で頭を抱えることになる。

年齢をカミングアウトして自由

横浜市　加藤　佳子

（評）女性が「年齢不詳」でいたいのは少しでも若く見られたいから？ そのガードを取っ払うと軽やかになるのかもしれない。

へこむ日に限って猫が邪険にする

黒石市　石澤はる子

（評）へこんだ日、愛猫に癒してもらおうと思っていたらプイと逃げて行く。猫もへこんでいる人の傍にはいたくないのだろう。

本心はポッケの底の綿ぼこり

郡山市　安藤　敏彦

（評）いつも周囲に気遣って、ポケットの奥に仕舞い込んでいる「言いたいこと」。まるで綿ぼこりのように頼りなくなっている。

蟹のタグもったいなくてコレクション

米子市　池田　美穂

（評）水揚げした漁港を示すブランドタグ。信頼できる証であるが、さて今シーズン中に何枚集めることが出来るのだろうか？

小春日にじっくりと見る俵紋

安来市　原　徳利

（評）俵紋とは指の腹に出る縦皺のこと。これがあれば「食べることに困らない」「金持ちになる」とのこと。私にもあるのはあるが…。

香芝市　山下じゅん子

白内障ベール剥がして異邦人

奈良県　中原比呂志

寂光も白内障でぼやけがち

岡山市　工藤千代子

寝たふりも聞こえぬふりもうまくなる

松山市　柳田かおる

残高をＡＴＭに笑われる

堺　市　内藤　憲彦

寺めぐりお手手つないでフルムーン

広島市　岸本　清

着飾ってみても隠せぬ歩き方

神戸市　能勢　利子

ページ繰る指に唾つけ叱られる

羽曳野市　吉村久仁雄

正論も若さも譲らない傘寿

大阪市　大川　桃花

ラジオ体操首回したら目も回る

富田林市　中村　恵

涙腺はゆるむし水洟も垂れる

大阪市　磯島福貴子

八十歳五年日記か十年か

府中市　岸田　武

誠実に生きて来たとは言い難い

橋本市　石田　隆彦

俺の死を追いつめるのはどのパーツ

三田市　北野　哲男
バラ色で生まれ今では水墨画

東京都　川本真理子
遺伝子を笑いとばせるようになる

池田市　太田　省三
コンビニへ行くためだけのエコバッグ

鳥取市　福西　茶子
イヤリングの様な補聴器着けている

堺　市　村上　玄也
ポリシーはないが一言居士である

奈良市　大久保眞澄
腹巻をしても夜中に目が覚める
ちりとてちんも潜む不気味な冷蔵庫

松山市　栗田　忠士
足踏み器納戸の隅で苦笑い
不味くても不味いと言えぬグルメルポ

津山市　髙橋由紀女
ナンプレが解けて嬉しい初トライ
湯豆腐が優しい朝にしてくれる

松江市　石橋　芳山
ミシュランのタイヤに雪を待っている
肩書に押されてだらしなく揺れる

三田市　上田ひとみ
三日目のおでんますます琥珀色
あらイヤだ金婚式はあと四年

弘前市　稲見　則彦
手旗信号必死で覚えたのも過去
しんしんものんのんも雪津軽冬

橿原市　居谷真理子
王冠はきっと重くて冷たくて

奈良県　安福　和夫
合わせ柿キャリアには無い熟れた味

香芝市　大内　朝子
妹が亡母に似てきていとおしい

米子市　竹村紀の治
大海も生簀育ちも黒マグロ

大阪市　原　幸子
鏡みて笑顔をつくり螺子を巻く

豊中市　松田蟻日路
うっとりと見とれて睨み返される
人の世の流れ眺める橋の上

大阪市　古今堂蕉子
体重計忖度してるように見え
返事せず笑わず冬の十五歳

弘前市　髙瀬　霜石
これでぐっすりレモンチューハイ3杯目
大盛りは卒業します明日から

奈良県　長谷川崇明
椋鳥の塒避けつつ縄のれん
シスターも駅まで走る十二月

豊中市　齋藤奈津子
脳トレにならぬ買い物キャッシュレス
ノンアルを飲んでもびびる検問所

香南市　桑名　孝雄
95の生活痕を句に残す
「駄作だね」コトリ笑っているポスト

鳥取市　田賀八千代
老いていく姿「ないない病」が出た

東大阪市　青木　隆一
好きなもの一に長湯で二にスルメ

三田市　尾﨑　一子
気がつけば秋刀魚を食べず冬の鍋

川西市　大坪　一徳
この子達生んで育てた妻は〇

尾道市　村上　和子
通帳を睨み百歳までは無理

倉吉市　牧野　芳光
洋食か和食か腹に聞いてみる

越谷市　久保田千代
風化せぬものを背負いしまま余生

生駒市　饗庭　風鈴
目のふしぎ景色くっきり貯える

佐賀県　真島久美子
腕組みをほどいた父が立っている

吹田市　西沢　司郎
宇宙とは一体誰の物ですか

黒石市　北山まみどり
ごめんねの数だけあったありがとう

今治市　永井　松柏
言の葉の裏を詮索するスズメ

大阪市　平井美智子
聞こえぬよう聞こえるようにいう小言

南あわじ市　萩原　狸月
効率がすべての今に老いの愚痴

神戸市　斎藤　隆浩
塔句会サプリ飲むより元気でる
大阪市　平賀　国和
句作りの飛躍を願ううさぎ年
箕面市　出口セツ子
忍耐と英知を神に試される
藤井寺市　鈴木いさお
むずかしい話になると眠くなる
桜井市　安土　理恵
恥ずかしい話も平気年の功
神戸市　山口　光久
よぼよぼに追い討ちかける癌手術
寝屋川市　冨山ルイ子
杖なしで歩く稽古を一千歩
堺　市　澤井　敏治
逃がすまいと思うがやって来ぬチャンス
東大阪市　青木ゆきみ
店じまいそんな垂れ幕半世紀
鳥取市　岸本　宏章
実力があったら運も寄って来る
大阪市　津守　柳伸
歩いてる只それだけで満ち足りる
宮崎市　押川　胡坐
念入りに調べたうえで間違える
鳥取県　斉尾くにこ
高齢者ですが老人とも言えず
大阪市　中島　幸徳
裾を出すスタイル少し板につく

大阪市　髙杉　千歩
音のした方から嬉し見舞客
浜松市　中田　尚
音楽は薬こころの処方箋
貝塚市　石田ひろ子
節電はするがけちれぬ暖房費
三田市　堀　正和
ボランティアの名でやってくるお節介
沖縄県　宮　すみれ
いまどきの自動調理器よくしゃべる
岡山市　丹下　凱夫
独り言病かも知れぬ独り言
東大阪市　北村　賢子
お地蔵さま寄り道しても手を合わす
三田市　村田　博
パクチーの臭いで消えた加齢臭
岡山市　永見　心咲
初冠雪よろこび豪雪を愚痴る
堺　市　坂上　淳司
専守防衛の看板下ろすのか日本
八王子市　川名　洋子
好きですねサムライ日本いい響き
塩竈市　木田比呂朗
習いごとまたサッカーに変えそうだ
鳥取市　狭武　紫陽
チチンプイ魔女になりたい年の暮れ
西宮市　髙橋千賀子
ヘソクリをはたき歳末助け合い

境港市　藤原　久直
自治会の役を引き受け二キロ痩せ
沖縄県　あらさくら
孫からの三本手だと杖届く
東大阪市　佐々木満作
思い出の真ん中にある青春譜
西予市　黒田　茂代
真剣に読んでないから眠くなる
大阪市　髙杉　力
翌年の予約も決めるカニツアー
奈良県　渡辺　富子
ゆっくりと進む時計と日向ぼこ
松江市　中筋　弘充
カミさんが悪あがきする試着室
松山市　大内せつ子
耳よりな話に赤いシール貼る
尼崎市　山田　耕治
駅前のティッシュじいさん避けている
米子市　妹能令位子
老後など考えてない猫と住む
東京都　尾畑なを江
老夫婦話の種は猫のこと
明石市　糀谷　和郎
俎板の音も小さく母は老い
豊中市　藤井　則彦
起き抜けの片足立ちで頬に艶
大阪市　谷口　義
挨拶はしないで夫婦すれ違い

箕面市　中山　春代
第八波忘年会をどうしよう

芦屋市　新阜　義明
特需沸く笑い止まらぬマスク元

京都市　藤井　文代
衣替えしてもマスクはそのままに

神戸市　敏森　廣光
マスク取り鼻が見えればただの女

高槻市　初代　正彦
やっと外したら寒波にまたマスク

和歌山市　上田　紀子
空白のページを埋める旅案内

河内長野市　森田　旅人
旅行解禁散歩の足に力こぶ

豊中市　きとうこみつ
全国旅行支援うけてホイホイ旅に出る

三田市　多田　雅尚
自給率知れば出来ないフードロス

鳥取市　奥田　由美
ドクターが停止言わないダイエット

福井市　伊藤　良一
定年後水掻きいつの間にか消え

海南市　小谷　小雪
足弱り初めて杖のありがたさ

宇部市　平田　実男
楽隠居呆けと老化が急ピッチ

大阪市　岡田　恵子
焼肉が旨いまだまだ生きられる

米子市　野川　宣子
お宝はゼロ金産む孫を育ててる

大阪市　坂　裕之
孫が来て夕食いつも肉が出る

弘前市　小山内真由美
あと少し幸せの数かぞえます

鳥取市　前田　楓花
家族写真うつむいているのがわたし

八幡市　武田　悦寛
側溝にふんわり落葉冬の色

尼崎市　藤田　雪菜
置き手紙少し太めのペンで書く

石川県　堀本のりひろ
大都会隠花植物跋扈する

岡山県　高岡　茂子
心のつかれ癒されたくて美術館

鳥取県　本庄ひろし
貯めるより使った方が僕は好き

交野市　山野　双葉
譲れないおでんはいつも柚子胡椒

丹波篠山市　酒井　健二
ゲームやる意欲活かせば博士号

鳥取県　山下　節子
くじ当たり隣近所がやかましい

大阪市　今村　和男
そのたびにおもちゃに見える新紙幣

尾道市　小川　道子
デイケア泣きと笑いの人生譜

大阪市　森　廣子
今年の漢字「戦」の一字が突き刺さる

鳥取県　門村　幸子
なつかしいでしょうと貰うニッキ飴

笠岡市　藤井　智史
冬という自然のビール冷蔵庫

札幌市　三浦　強一
晩酌が美味いひいきの勝ち相撲

尼崎市　永田　紀惠
まあええかちょっとだけなら休肝日

寝屋川市　伊達　郁夫
死ぬことを時々忘れ呑んでいる

和歌山市　北原　昭枝
酒飲みの父の気持がわかる歳

羽曳野市　宇都宮ちづる
発泡酒なら良いノンアルはあかん

広島市　松尾　信彦
言えぬこと各自持参の縄のれん

横浜市　菊地　政勝
友達になれそう酒をおごられる

大阪市　井丸　昌紀
只酒にきつい仕事が付いてきた

三原市　笹重　耕三
抜け殻がさ迷う午前様のトラ

奈良市　加藤江里子
言い訳を理路整然と午前様

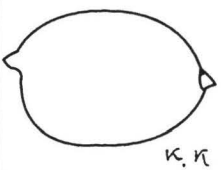
和歌山市　柏原　夕胡
酒飲みでない夫には感謝する

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句310名）



「アイドル」　江島谷　勝弘　選

アフガンに中村医師の肖像画　大阪市　平賀　国和
僕のアイドルは二宮金次郎　倉吉市　牧野　芳光
皆が見た聞こえた名前ハラセツコ　三田市　松下　英秋
アイドルは鉄腕アトム戦後の児　美作市　岡本　余光
永遠のアイドルでしたヘプバーン　箕面市　酒井　紀華
ジョンレノン歌った頃は青かった　伊丹市　延寿庵野鶴
アイドルは今もひばりと裕次郎　豊中市　藤井　則彦
健さんがアイドルだった寒い春　丹波篠山市　酒井　健二
じいちゃんの枕の下の由美かおる　大阪市　平井美智子
どうなっているのだろうか天地真理　神戸市　奥澤洋次郎
若大将老いれば老いた人間味　河内長野市　木見谷孝代
ブロマイド大好きでした青リンゴ　浜松市　中田　尚
聖子ちゃんカットして嘘泣きもした　大阪市　大沢のり子
父ちゃんもアイドルいたな百恵ちゃん　堺市　今井万紗子
郷ひろみ還暦すぎて足上げる　尼崎市　山田　厚江

「アイドル」　永見心咲　選

アイドルがトイレに行っちゃダメですか　笠岡市　藤井　智史
偶像の表と裏にある悲哀　生駒市　饗庭　風鈴
アフガンに中村医師の肖像画　大阪市　平賀　国和
夢千代の聖地訪ねるサユリスト　河内長野市　中島　一彌
折に触れ手に取るゾカのプロマイド　越谷市　久保田千代
アイドルに成らずとも良い初鰹　鳥取市　上山　一平
タバコ屋の看板娘猫が継ぎ　河内長野市　穂口　正子
潔い退き際ヒーローだったなあ　松山市　柳田かおる
わがままなアイドルでしたかぐや姫　郡山市　安藤　敏彦
アイドルと呼ばれカツ丼食べにくい　大阪市　高杉　力
ぴか一のミッキーマウス人気者　沖縄県　宮　すみれ
すぐに完売松田聖子のディナーショー　尼崎市　山田　厚江
まだミニで踊るリンダが痛ましい　豊中市　上出　修
紙おしめ元アイドルのコマーシャル　奈良市　大久保眞澄
アイドルは鉄腕アトム戦後の児　美作市　岡本　余光

オバサンとちゃう！　森高千里似合うミニ　大阪市　田原　康雄
僕のアイドルはチコちゃんかもしれぬ　高槻市　初代　正彦
壇蜜も今じゃすっかりセピア色　岡山市　丹下　凱夫
乃木坂のももかと出合うレストラン　伊丹市　岡村　風琴
兵役に付くアイドルの凛凛しい目　西宮市　福島　弘子
親衛隊一歩違えばストーカー　奈良市　加藤江里子
親衛隊出来てアイドル大御所に　神戸市　上田　和宏
アイドルにされて人生狂わされ　越谷市　久保田千代
アイドルへなれると誘い鴨にする　鳥取市　池澤　大鯰
アイドルが時代の磁極引き寄せる　横浜市　加藤　佳子
集票へ元アイドルが担がれる　三原市　笹重　耕三
まるでアイドルワールドカップ戦士たち　大阪市　内田志津子
フクシマの空に輝くフラガール　弘前市　髙瀬　霜石
アイドルであったに違いない土偶　富山市　伴　よしお
アイドルはポックリ寺の仏様　福井市　伊藤　良一
アイドルは亡母が残した君子蘭　大阪市　折田あきこ
ツンデレのうちのアイドルにゃあと鳴く　寝屋川市　廣田　和織
ニューアイドルに膝を譲ってくれたタマ　堺　市　澤井　敏治
横綱を目指す曽孫の土俵入り　西宮市　亀岡　哲子
アイドルを妻にしましたさて今は　鳥取市　山下　凱柳
良く動き稼ぐカアさんアイドルだ　倉吉市　大羽　雄大
霧の中これでも私ミス三田　三田市　稲角　優子

スナックのママがアイドル駅前の　東大阪市　青木　隆一
ＡＫＢ群れて客呼ぶひよこ達　船橋市　中嶋　常葉
アイドルも困る４Ｋテレビジョン　米子市　竹村紀の治
乃木坂のももかと出合うレストラン　伊丹市　岡村　風琴
アイドルは坂がお好きなようですね　八尾市　村上ミツ子
天井のポスターに恋してた頃　交野市　山野　双葉
聖子カットうちの娘もやっていた　豊中市　貝塚　正子
アイドルに成り損なった九官鳥　神戸市　村松　久江
どうなっているのだろうか天地真理　神戸市　奥澤洋次郎
アイドルの悲しきまでの変りよう　和歌山県　三枝眞智子
もてはやされた子犬の頃に戻りたい　河内長野市　大島ともこ
アイドルの「あの人は今」のぞき趣味　豊橋市　小松くみ子
韓国と日本を結ぶＫ－ＰＯＰ　神戸市　冨永　恭子
兵役に付くアイドルの凛凛しい目　西宮市　福島　弘子
まるでアイドルワールドカップ戦士たち　大阪市　内田志津子
アイドルは口角あげて疲れ気味　岡山市　大石　洋子
ツンデレのうちのアイドルにゃあと鳴く　寝屋川市　廣田　和織
ロボットのアイドルになったばあちゃん　西宮市　緒方美津子
ベビー誕生祖父母四人のアイドルに　神戸市　みぎわはな
アイドルを真似する鏡ウフウフフ　鳥取市　大前　安子
おひねり手に婆ちゃんが待つお気に入り　奈良市　髙橋　敬子
惚けないようにアイドルを追っかける　男鹿市　伊藤のぶよし

ひばりちゃん追っかけしてた頃もある　東かがわ市　川崎ひかり
ジュリーへの追っかけだった嫁はんが　芦屋市　新阜　義明
還暦を過ぎて追っかけできる妻　尼崎市　宗　和夫
追っかけはいつも娘と一緒です　三田市　九村　義徳
アイドルを追っかけ習う韓国語　香芝市　山下じゅん子
太りました沢田研二も私も　神戸市　敏森　廣光
アイドルはあのユニークな羅漢さん　大阪市　津村志華子
八重歯が魅力そんなアイドル居た昭和　大阪市　小野　雅美
柚子湯の柚子がアイドルとなる十二月　鳥取県　斉尾くにこ
我が家のアイドルに髭が生えてきた　西宮市　髙橋千賀子
川柳のアイドルですと自己暗示　黒石市　北山まみどり
バッカスも交え柳論盛り上がり　札幌市　三浦　強一
ゆで卵ツルンとアイドルが並ぶ　松江市　石橋　芳山
アイドルはみんな見分けのつかぬ顔　堺　市　村上　玄也
ミニトマトみたいな歌手を数で売り　橿原市　居谷真理子
アイドルのようにペットを着替えさせ　塩竈市　木田比呂朗
スポットライトのあたらないアイドル　笠岡市　藤井　智史
アイドルの大きなあくび見てしまう　尼崎市　八木　幸彦
アイドルの「あの人は今」のぞき趣味　豊橋市　小松くみ子
アイドルと同じブランド紙オムツ　豊中市　貝塚　正子
アイドルもわたしも老けたペンライト　松山市　宮尾みのり
肩書の元アイドルがものを言う　香芝市　大内　朝子

僕のアイドルは二宮金次郎　倉吉市　牧野　芳光
アイドルの涙を拭いてやった風　西予市　西田美恵子
オーディションあの坂この坂よく滑り　寝屋川市　長尾　千賀
輝彦も秀樹も逝ったボクの星　鳥取市　福西　茶子
御三家も新御三家も一人欠き　大阪市　近藤　風羅
アイドルをアイドルにする視聴率　西予市　黒田　茂代
郷ひろみテレビ越しでも胸がキュン　松江市　藤井　寿代
五列目で目が合うひろみコンサート　神戸市　城戸　誓子
親衛隊一歩違えばストーカー　奈良市　加藤江里子
郷ひろみアイドルのまま突っ走る　大阪市　岩崎　玲子
青リンゴ齧って聞いたキャンディーズ　寝屋川市　川本　信子
あの頃は猫も杓子もSOS　松江市　中筋　弘充
剣玉が上手い歌い手人気者　奈良県　渡辺　富子
壇蜜も今じゃすっかりセピア色　岡山市　丹下　凱夫
アイドルと訊けばサユリと言う八十路　高槻市　片山かずお
同い年後期高齢サユリスト　伊丹市　延寿庵野鶴
アイドルがタレントになる滝登り　宝塚市　岸田　万彩
集票へ元アイドルが担がれる　三原市　笹重　耕三
「アイドル」と呼ばれりゃ心地良くピース　松山市　大内せつ子
二歳の子身ぶり手ぶりで歌手きどり　沖縄県　あらさくら
アイドルを追うなど無縁農に生き　箕面市　出口セツ子
カッコいい元アイドルの農作業　今治市　安野かか志

往年のアイドルが出るコマーシャル　三田市　北野　哲男
アイドルのショーに集まる喜寿傘寿　羽曳野市　吉村久仁雄
アイドルになっても序列つきまとい　大阪市　古今堂蕉子
アイドルの卵うじゃうじゃ保育園　尼崎市　藤井　宏造
僕だって施設に行けば握手攻め　三田市　村田　博
アイドルと呼ばれカツ丼食べにくい　大阪市　高杉　力
妻小百合子の名は百恵孫聖子　大阪市　吉積　栄次
変わらない口鼻一つ目は二つ　奈良県　長谷川崇明
アイドルを捨てて嫁ぐと言ってくる　津山市　高橋由紀女
アイドルは坂がお好きなようですね　八尾市　村上ミツ子
アイドルの話になるとトイレ立つ　大阪市　川端　一歩
娘は嫌う夫が付けた名は小百合　大阪市　横山　里子
夢千代の聖地訪ねるサユリスト　河内長野市　中島　一彌
文学は源氏の君をアイドルに　富田林市　中村　恵
親鸞のことばにすがりつくごとし　羽曳野市　三好　専平
永遠のアイドル富士は気まぐれだ　大阪市　田中ゆみ子
永遠のアイドル僕を生んだ母　和歌山市　西川　千鶴
アイドルになり切っている暈の月　岐阜市　喜多村正儀

秀　句

アイドルのいの一番は呱呱の声　河内長野市　坂野　澄子
アイドルとまるで気付いてないパンダ　大阪市　石田　孝純
小百合ちゃんアイドルなんてものじゃない　川西市　大坪　一徳

アイドルもわたしも老けたペンライト　松山市　宮尾みのり
永遠のアイドルでした観世音　弘前市　福士　慕情
アイドルの顔解るのは嵐まで　東かがわ市　川崎ひかり
アイドルのドーナツ盤を借りたまま　鳥取県　本庄ひろし
アイドルであったに違いない土偶　富山市　伴　よしお
大写しアイドル気取るつけ睫毛　高砂市　松尾柳右子
永遠のアイドル富士は気まぐれだ　大阪市　田中ゆみ子
笹を食み外貨稼いでいるパンダ　堺　市　澤井　敏治
白浜のパンダにいつも癒される　和歌山市　松原　寿子
ミニトマトみたいな歌手を数で売り　橿原市　居谷真理子
CDのおまけが付いた握手券　尼崎市　藤田　雪菜
希望だけ夢だけ見ようペンライト　枚方市　栃尾　奏子
アイドルの大きなあくび見てしまう　尼崎市　八木　幸彦
分母からアイドル一人だけ分子　富田林市　山野　寿之
妬まれて私困っているのです　佐賀県　真島久美子
フクシマの空に輝くフラガール　弘前市　高瀬　霜石
ゆで卵ツルンとアイドルが並ぶ　松江市　石橋　芳山
川柳のアイドルですと自己暗示　黒石市　北山まみどり

秀　句

アイドルは完司理事長知らんけど　大阪市　石田　孝純
じいちゃんの枕の下の由美かおる　大阪市　平井美智子
我が家のアイドルに髭が生えてきた　西宮市　高橋千賀子

「運」

（投句　214名）

菊地政勝選

茶柱に問いかけてみた運定め　越谷市　久保田千代
福耳を持って運には恵まれず　奈良県　中原比呂志
運だって実力のうち気にしない　男鹿市　伊藤のぶよし
残り運あればピンコロ願いたし　宝塚市　丸山　孔一
犠打ばかり練習をして運掴む　神戸市　米田利惠子
私の運を背負っている手相　西予市　黒田　茂代
運のいい人だとわかる転び方　黒石市　北山まみどり
富士山がくっきり見えたこれも運　鳥取市　岸本　宏章
強運の私にコロナ近寄らず　神戸市　みぎわはな
ラッキーを言霊にして運つかむ　鳥取市　門村　幸子
ラッキーと言われ努力はほっとかれ　札幌市　三浦　強一
占い師自分の運は蚊帳の外　富士見市　中島　通則
大吉の運の行方はどこへやら　生駒市　饗庭　風鈴
頂いたいのち天命尽きるまで　大阪府　米澤　俶子
前向きの笑顔が運を引き寄せる　横浜市　加藤　佳子
まん丸い笑顔が運を引き寄せる　尾道市　村上　和子
子に聞かす運は努力に味方する　寝屋川市　川本　信子
運のない男でいつも行き違い　堺　市　村上　玄也
初めての見合いで決めた運だめし　東大阪市　青木ゆきみ
男運そろそろ底が見えてきた　佐賀県　真島久美子

好運の女神に地図をわたしたい　浜松市　中田　尚
運命の出合いあなたとあの世まで　鳥取市　永原　昌鼓
女運恨まず妻の尻の下　宝塚市　岸田　万彩
幸運の女神から来た請求書　橿原市　居谷真理子
巡り合った運を大事にダイヤ婚　豊中市　松尾美智代
運の良い夫婦と思う今白寿　大阪市　榎本　舞夢
運命の人に出会って尽きた運　交野市　山野　双葉
腐れ縁これも運です五十年　三原市　笹重　耕三
子や孫に恵まれている共白髪　唐津市　坂本　蜂朗
やるだけはやったこのあと運まかせ　米子市　後藤　宏之
運がいい何より証拠生きている　黒石市　石澤はる子
たられば は言わない運は信じない　大阪市　大沢のり子

佳　句

幸運は身の丈程が丁度よい　三田市　稲角　優子
ひっそりと来る幸運に気付けない　岐阜県　喜多村正儀
努力して掴んだ運は身の宝　大阪市　津村志華子
落ちている運を踏む人拾う人　三田市　野口真桜子
正当に歩めば運も味方する　東大阪市　佐々木満作

人

運の字はひたすら努力せよと読む　鳥取市　大前　安子

地

運を逃さぬよう善を積んでいる　富山市　伴　よしお

天

運だけに頼り背骨に芯がない　倉吉市　牧野　芳光

軸

二人にはほど良い運と笑い合う

「初々しい」

（投句　213名）

川名洋子選

「初々しい」アハハと笑うZ世代　奈良市　米田　恭昌
あの人も初々しさ消えて二児の母　神戸市　近藤　勝正
新部員返事の声が裏返り　大阪市　田原　康雄
恋してた頃の初々しい涙　藤井寺市　太田扶美代
真新しいひざスカートが駆けていく　香芝市　山下じゅん子
初々しくはあるが大器の面構え　松山市　栗田　忠士
三歩後ろ歩いた頃のオムライス　大阪市　岡田　恵子
初々しさが百寿の母を若く見せ　貝塚市　石田ひろ子
桜咲く胸の名札とランドセル　宝塚市　丸山　孔一
新婚さん過疎地に住んでくれました　大阪市　大沢のり子
孫が描いた似顔絵を手に照れる祖母　大阪市　石田　孝純
新婚の返事はいつもハイでした　横浜市　菊地　政勝
全身で笑ってくれる赤ん坊　三田市　北野　哲男
気構えは初々しいぞ再雇用　唐津市　仁部　四郎
候補者の若さに期待する選挙　横浜市　加藤　佳子
カーネーションひとつで母は癒やされる　越谷市　久保田千代
初々しい高齢者道スタートす　鳥取市　太田　睦子
初々しさ消えて大人の顔になる　富山市　伴　よしお
初々しい囲碁の新星董ちゃん　大阪市　平賀　国和
八十がはにかんでいる恋心　神戸市　奥澤洋次郎

失った初々しさを掘り起こす　美作市　岡本　余光
初々しい頃もあったと虹の橋　和歌山県　三枝眞智子
初々しさを忘れぬように若づくり　米子市　後藤　宏之
初々しいお面かぶった老いの顔　鳥取市　永原　昌鼓
ジャガ芋を掘ったら真っ白な素肌　倉吉市　牧野　芳光
崩される初々しいという神話　岡山市　永見　心咲
戦争を止めてとヒトミ邪気が無い　塩竈市　木田比呂朗
初々しい妻を演じた日もあった　鳥取市　岸本　孝子
まだ髷の結えない力士初土俵　安来市　原　徳利
新妻に挨拶すれば赤くなる　唐津市　坂本　蜂朗
初々しさ百歳の伯母失わず　奈良県　長谷川崇明
お互いに好きだと言えず消えた恋　富士見市　中島　通則

佳　句

「奥さん」と呼びかけられて染まる頬　尼崎市　山本　百合
新人はいいな直球ど真ん中　大阪市　髙杉　力
祝われて照れて暴れる三才児　岡山県　古今堂蕉子
恋浅い二人はパフェの喫茶店　池田市　藤澤　照代
新妻はキッチンタイマーにらめっこ　　太田　省三

人

まだ声にならない思慕を抱いている　大阪市　平井美智子

地

古希を過ぎ新人ですと老いの会　橋本市　石田　隆彦

天

十六に戻ったような片思い　橿原市　居谷真理子

軸

最期までピュアな心を忘れない

初しぐれ教室

題 ― 守る

平井 美智子

原（原句）参（参考句）

リズムを大切にしましょう。

川柳の基本型は五七五の十七音字です。これを定型といいます。定型に固執しなくても良いとは思いますが、安易な中八や下六は折角の佳句をギクシャクさせてしまいます。本当に他の言い方ができないのか、よく考えてみましょう。

制約を課された中での工夫や句姿の美しさを大切にしてください。

原 妻の前いつも私は守備側　龍

とてもユニークな発想なのですが（守備側）は下四音です。

参 妻の前いつも私は守備に就く

原 守らねば俺の肩に四人分　のぞみ

折角の素敵な句なのですが中六なので

参 守らねば俺の肩には四人分

原 ルール作って守れない大人　尚

七・八音でリズムが取れていません。

参 ルールだけ作って守れない大人

中八の句を二句。

原 守る事すべては相手の為だけに　弥生

参 守る事全ては君の為だけに

原 亡くなって守られていたと気付く日々　名都子

参 守られていたと気付いた夫の死後

原 留守電がしっかり留守を守ってくれ　開子

下六音の表現の座りが少し悪いようです。

参 留守電がしっかり留守を守ります

参 留守電が聞いてくれてるメッセージ

上下を入れ替えてみました

原 日曜は自分を守る陽だまりに　えみこ

参 陽だまりで自分を守る日曜日

原 物価高まもりに入る年の暮れ　静恵

守りに入るという表現が身に沁みますね。

参 年の暮れ守りに入る物価高

原 子を守り後に守られ雲が笑む　幸子

参 雲が笑む守りし子らに守られて

原 羊水に抱かれて僕は生きている　栄次

羊水に抱かれるという措辞は素敵ですが

参 羊水に抱かれて眠る午前二時

原 ポケットにお守り袋今日も晴れ　康雄

原 ポケットの温いお守り今日も晴　一平

たまたま同じような句がありました。類句は防ぎようがないですが、なるべく、個性的な発想と表現を心がけましょう。

参 ポケットに守り袋という味方　レイ子

原 堅実さ守り通して孤独です　レイ子

上五を（律義さを）（潔癖さ）（安全を）など色々入れ変えてみてください。

参 頑固さを守り通して孤独です

原 言葉掛け次第で笑顔守り抜く　良子

参 言葉かけ子らの笑顔を守り抜く

原 嫁と孫全力守る子にエール　誓子

嫁・孫・子・作者と登場人物が多いので

参 全力で家族を守る子にエール

原 変異するコロナ感染守る知恵　閑

参 変異するコロナから身を守り切る

原 オフレコに自分を守る軽い嘘　次郎

オフレコとは内緒とか秘密という意味でしょうが句がややこしくなっています。

参 卑怯にも自分を守る軽い嘘

参 内緒だが自分を守る軽い嘘
原 まんまんちゃん小さなお手手を合わせ　歌　子

手と言う字が重なり過ぎますので

参 まんまんちゃん小さなお手手合わせる子
原 八十路半留守を預る自負がある　貴美江

八十路半という言い方の代わりに（八十路でも）（八十五）の表現も。

参 八十路過ぎ留守を預かる自負がある
原 老犬を守れぬ我も床に臥す　えい子

（我も）は言わなくてもわかります。

参 老犬を守れぬままに床に臥す
原 書き順を守って書いて文字きれい照　枝
参 書き順を守って書いたラブレター
参 書き順を守って書いた恋の文
原 独り居をふうわり包む見守る目　百　合

見守る目を具体的に表現すれば

参 独り居をふうわり包む地域の目
参 独り居をふうわり包む子のメール
原 老いた妻にそっと手を添え何気なく　のりひろ

（何気なく）はそっと手を添えと同じような語感ですので他の言葉に変えました。

参 老いた妻にそっと手を添え散歩道

このままでも十分なのですが少し表現を変えてみました。

原 子や孫に守られ生きる老いの日々　ひとみ

（守る）（守られる）の違いを考慮するなら次の表現もあります。

参 子や孫が守ってくれる老いの日々
原 亡き人に守られ今日を無事終える　双　葉

亡き人は亡き妻、亡き母のように具象があった方がイメージは湧きやすいです。

参 亡き夫に守られ今日を無事終える
原 側に居る私を守る夫がいる　智恵子

少し表現を変えてみました。ご参考に。

参 傍らで守ってくれる夫がいる
原 お互いに持ちつ持たれつ世を渡る　さくら

題が（守る）ですので

参 お互いに守り守られ世を渡る
原 コロナ禍で規則守った両手です　不二夫

好き好きですが韻文的な助詞の使い方もあります。

参 コロナ禍の規則守った両手です
原 君守る言った夫を介護する　行　久

上が6音になりますが助詞を入れれば

参 君守ると言った夫を介護する

添削不要の佳句

○子や孫の帰れる家を守り抜く　風　露
困った時に帰って来れるよう巣を守っている。素敵な発想です。
○政治家はルール守ると信じたい　和　夫
一番に手本にしたい人たちですものね。
○カニ缶は非常食には適さない　通　則
本当にその通りなのですが、改めて言葉にすることの面白さです。
○守られてみたい母です女です　静　恵
母は強いものと決められがちですが、母だって守られたいですよね。共感の一句。
◎いつだって私あなたの守護天使　双　葉
守護神だけでも凄いのに、おまけに天使。双葉さんの心意気に脱帽。
◎寄る辺ない風知らんぷりしてくれる　風　鈴
頼るところもなく孤独と不安を抱えている私を風は黙って見守っていてくれる。（知らない振りをする見守り方）という発想に心を打たれました。

家族、ルール、そして自分自身などなど守るべきものを指折り数えながら皆さんの作品を楽しませていただきました。

川柳塔鑑賞

同人吟　大久保　眞　澄

―1月号から

ある日ふとマスクを取ればおばあさん

平井　美智子

コロナの中でしんどいマスク、一分でも外したい。外してみれば三年分の加齢という現実。ありがたやマスク・・・・

悪いもの見たのか視力落ちてくる

牧野　芳光

それはやはり、悪いものをいっぱい見たからです。もう見なくてもいいように靄が隠してくれているのです。

やる気満々で包丁研いでいる

桒原　道夫

包丁研いで準備も意気込みも整った、さあ、やるぞ。お料理ですよね。いやまあ、怖い世の中ですから、念のためです。

娘等に老い見せまいと床磨く

山田　耕治

意地っ張りなおじいさんの、健気な姿が髣髴とするようで、何だかほっこりしてしまいました。頑張らず、諦めず、で。

弄っていじって操作方法覚え込む

辻内　次根

散々いじって、なおわからない。ヘルプは助けにもならず。これは私の話です。覚えられたら花マルです。お若いです。

音沙汰のないのが無事とかぎらない

永原　昌鼓

電話にもメールにも返事がないと、何かあったのではと案じる歳になりました。無視されているだけかもしれないのにね。

娘が捨てて母が拾って着た昭和

妹能　令位子

こんなの古くさいと、若い人はあっさり切り捨ててしまいます。拾ってもらえるモノも、拾う人も、切ない昭和です。

スイッチを入れても直ぐに歩けない

竹村　紀の治

ヨイショで立ち上がり、せーのーで踏み出す。次は転ばないように。歩き出したら、こっちのもの。まだ負けへんで。

沈黙は美徳かいつまでもバカな

石橋　芳山

そうです。いつまでも、特に女性にそんなことを言っているのは、もはや老害と言えそうなおエライ方々でしょうか。

他一名に括られて生きている

大石　洋子

ご署名を、で書くのは夫だけ。夫のいない場面では、一同だったりして。沈黙を破って、洋子です、と言いましょう。

スキップが出来なくなった骨密度

丹下　凱夫

子供の頃は鈍臭くて下手だったスキップ（私の話）。今は骨密度のせいで出来ない、ということにしておきましょう。

道路工事済み不自由な町になり

宮尾　みのり

改修というから工事の不便に耐え、終われば車にはよくても、歩行者にはどうなん、となっている。どうしてくれる！

骨になるまでここであなたと暮らしたい
あなたと同じご飯を食べてお茶飲んで

西田　美恵子

なんとまあ、ぬけぬけと！　参りました。私も言ってみたいです。負けんとこ。

痛たたたと言えば痛みが遠ざかる

坂本蜂朗

子供にはちちんぷいぷい、大人には我慢より素直に痛がることが効くようです。でも、カッコ悪い手前で我慢しましょう。

何処へいったか満タンだった筈の脳

伊藤のぶよし

満タンでしたか。よく走ったのでしょう。免許更新して脳にも給油して、もうひとつ走りしてみましょうか。

やっぱりねB型でしょと懐かれる

中村伸子

私もB型ですが、周囲を気にしないという悪い評価です。懐かれるのも微妙ですが、仲間を見つけた安心感でしょうか。

やる時にはやると一人で言っている

川本真理子

その気になればすぐできるんだから、でも今日は用事があるし、やっぱり明日にしよう。心の中で毎日呟いています。

深入りはせぬ友達でいたいから

早川遡行

深入りしたばっかりに、ということはよくあります。つかず離れずという、淋しくもある大人のお付き合いですね。

真ん中にでんと座ってケチつける

岩崎公誠

当然のように真ん中に陣取る。牢名主みたいに高いところから文句を言う。何人か、思い浮かんでしまいます。

若き日の僕の匂いがする息子

内藤憲彦

男同士の親子には、複雑な感情があるようです。ふっと、息子に自分を感じた、こそばゆいような、嬉しい瞬間でした。

逆上がりできた夢見てふとやる気

藤井則彦

頑張ってやっと逆上がりが出来た日を思い出します。私にもできる、あの時の気持ちで、一緒に頑張りましょうか。

どんどんとサラサラになる夫婦仲

廣田和織

愛してるとか、もしや不倫とか、そんなことより、ご飯何にする？　何でもええで。元気で留守がよろしい。円満です。

諦めが悪い僕です悪しからず

鈴木いさお

諦めが悪いからじたばたと生きられる。若いもんには負けんと思うから頑張れる。素敵なおじいさんじゃないですか。

とりあえず起きるなんとかなるだろう

村上ミツ子

予定もないし、とは言え寝ているわけにもいかず、でも起きたら起きたで結構することはあるものです。朝ですよ！

忘れましょ答え合せはしないまま

永田紀恵

忘れることは老人の特権です。答え合せをすると水に流せなくなります。でも曖昧なまま忘れるのもしんどいですね。

ストレッチすればポキポキ老いの音

中山昭美

お肉だ、運動だ、と親切な忠告が氾濫しています。手始めにストレッチしたら、ポキポキ。これぞ老いの音。言い得て妙。

いつか死ぬ今日でなかったそのいつか

萩原狸月

いつかは死ぬが、実は誰も今日だとは思っていない。でも、いつかと思うのはやっぱり恐怖です。ああ、生きている。

夢を見ることはAIでは出来ぬ

長谷川崇明

何でもデジタル化が良しとされる世の中。でも、人の将来の夢も、寝て見る夢も、AIには無理、と老人はほくそ笑む。

水煙抄鑑賞

―1月号から

永井松柏

古里にもう母はなく柿熟れる

坂本星雨

父の死後一人で家を守ってくれていた母が亡くなって今は住む人もない故郷の生家。庭先に子供の頃よく登って遊んだ大きな柿の木がある。今年も昔どおりたわわに実をつけて真っ赤に熟れている。

頑張れと言えぬがんばり過ぎたから

吉道あかね

病室へのお見舞いにガンバレ！の言葉は禁句。もうすでに頑張りすぎるぐらい頑張っているからです。あなたの微笑みと小さじ一杯分の春を届けましょう。

夕焼け小焼け気のいい鬼と手をつなぐ

中前幸子

今日も精いっぱい遊んだ鬼ごっこ。西の空が真っ赤に夕焼ける頃には家に帰ります。仲良しの鬼さんとも手をつないで。

今もなお枝雀が蕎麦をすする音

八木幸彦

扇子一本で全てを演じきる落語家。中でも桂枝雀の名人芸は落語通を唸らせたものだ。ずずずーっといかにも美味そうに蕎麦を啜る音が今も耳に残る。

生き下手の杉田久女の句に惚れる

清水久美子

田辺聖子著『花衣ぬぐやまつわる・・・わが愛の杉田久女』は、久女の名句の数々とその一途な生き様を活写しています。

足袋つぐやノラともならず教師妻

谺して山ほとゝぎすほしいまま

秋ですね栗にさんまにうろこ雲

阪本秀子

栗、さんま、うろこ雲と並べて秋を過不足なく表現しています。それにしても近年の秋刀魚の不漁は日本の秋の味覚の大いなる危機。懸念されますね。

生真面目で生き下手だった亡父が好き

大浦福子

今は亡き父親のことを懐かしく思い出す。愚痴を言わず黙々と仕事に励み、無言で家族を守ってくれた。その不器用な背中に温かいエールを送る川柳です。

階段で上げたつもりの足だった

巌田かず枝

加齢に伴い動作の俊敏性や精度が落ちてくる。何でもない階段につまずいたり、家具や柱にやたら手足をぶつける。特に転倒には要注意、命にかかわります。

飲めることそれが健康バロメーター

古川光雄

おいしいお酒が飲めるのは健康の証しです。ただし若い時のような「斗酒なお辞せず」の豪快な酒ではなくて節度ある飲酒が鉄則です。

マイペース崩して自分見失う

安野かか志

お酒も仕事もゴルフも自分のペースを守ることが肝心。無理は禁物。他人のペースに惑わされることなく、身の丈のピッチを刻んでいけば結果オーライです。

へらへらのクラゲになって生き延びる

花岡順子

へらへらのクラゲとは、自説に固執する正論居士の対極にいる、臨機応変・融通無碍を身上とする生き方を言うのでしょうか。丈夫で長持ちの極意のようですが、それはそれで難しそうですね。

■各地句会だより

六甲川柳会

上田和宏

三代の心は一つピーヒャララ　山口光久

第12回川柳塔まつりで、この句を天に抜かれた当時の河内天笑主幹が「神戸に川柳塔の灯がないなあ」と呟かれたとか：。

山口光久先生の奮闘が始まりました。そして平成19年（２００７）４月、六甲道勤労市民センター（現灘区文化センター）にて、六甲川柳会「メダカの学校」がスタート。川柳一年生ばかりの勉強会です。光久先生はじめ伊勢田毅先生、両川無限先生、黒田能子先生、山口美穂先生の情熱と団結の成果です。駅頭の勧誘も奏功の由です。

メダカはすくすく成長しました。

平成29年４月、メダカ十周年記念句会を開催。そして、勉強会を卒業し句会「ろっこうみち」に衣替え。祝して川柳塔小島蘭幸主幹から祝電を頂戴しました。

句報「ろっこうみち」の発行も開始。号数はメダカ時代の「添削通信」を引き継いで一二〇号からスタート。令和４年末で、一八五号です。

「ろっこうみち」の文字は、合同句集に西出楓楽理事長（当時）に揮毫願ったもので、使用の快諾を頂きました。句評欄「六甲おろし」とロゴは当地柄です。

今までに

◆合同句集「ろっこうみち」２冊発行。５周年・10周年（15周年を現在企画中）。

◆川柳作品展10回。神戸新聞社の後援を頂き、神戸市灘区文化センターで開催。令和４年の開催が第10回の節目。

◆吟行６回。１・２回目は、岡山県頭島への日帰り旅行。３・４回目は、神戸の酒心館・シーバル須磨。いずれも楽しいものでした。残る２回は、川柳塔まつりへの参加。会員の修行と刺激になりました。

◆２０１９年、兵庫県川柳協会に加盟しました。

現在、六甲川柳会は

◆句会「ろっこうみち」と勉強会「メダカ」の２本立です。スムーズな運営に「会則」を制定しました。現在、会員５５名、うち同人23名、誌友10名です。

◆「明るく」「楽しく」「朗らかに」をモットーに、初代会長山口光久先生・２代会長山﨑武彦さん・３代目現会長糀谷和郎さんと引き継がれて、「三代の・・」の句の通りになりました。

この先は

◆川柳作品展を、地域の風物詩にする。

◆いつか「大会開催」をする、が目標。

川柳塔誌の各地句会案内に句会要領を記載しています。ご来駕賜れば嬉しいです。

こんにちは　新同人です

始めたきっかけ

奈良市　東（あずま）　定生（さだお）

同人に推挙して頂きありがとうございます。

川柳を始めたきっかけは皆さまとだいぶ違っていると思います。平成二年四月からコロナ禍による外出自粛で会社に行くことが出来なくなりました。こんな時、会社の先輩から川柳への誘いがありました。今まで、川柳にはまったく関心がありませんでしたが、暇を持て余していましたので軽い気持ちで川柳を始めました。知っていたのは「五七五」で作ることぐらい。作ってはメールで交換していましたが、飽きてきたので新聞投稿三枚目で五月十八日**「アベノマスク届くころには鍋つかみ」**がビギナーズラックで掲載されました。

この句がきっかけとなり川柳の世界に入っていきました。始めたのが古希手前でしたので皆様に追いつけ追い越せと多作し、作句数は約六〇〇〇句になりました。

コロナ禍がなければ川柳はやっていないと思います。不謹慎ながら川柳との出会いをくれたコロナに感謝し、より一層、励んでいきますのでご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

同人への道すじ

大阪市　東（あずま）　敏郎（としろう）

このたび同人に推挙頂き、仲間入りさせていただきました柳歴四年、八十二歳の若輩者です。どうぞ宜しくお願い致します。川柳を始めたのは、二〇一八年六月、市の広報で「初心者向けの川柳講座」が開催される事を知り、受講したのが切っ掛けです。実は私、趣味は将棋と写真で、その頃までは何方も二十数年間続けていました。しかし、寄る年波で足腰の衰えが顕著になり、写真の方はそろそろ引退をと考えていた時期でした。受講を終えても川柳の本質さえ理解出来ず悶悶としていた矢先、区の施設で「川柳教室」が開催され、一日体験出来る事を知りました。軽い気持で参加させていただいたのは「川柳de遊ぼう会」（平井美智子先生主宰）の例会。歯に衣を着せない先生の熱心なご指導ぶりを目のあたりにしてすっかりファンになりました。女性会員が多くて後込みしましたが、「マイペースで良いのですよ」の先生の一言が決め手となって同年八月入会、今日に至っております。この四年間、先生はじめ会員の皆様、大変お世話になり、有り難うございました。尊敬する美智子先生の一句**「一匹の美学一途に月を追う」**

入会後まもなく川柳塔社の誌友となり、毎月のノルマと先生お勧めの誌上投句には積極的に挑戦、悲喜交交の結果を得ています。何とか続きそうな川柳に感謝。頑張ります。

こんにちは　新同人です

川柳さんありがとう

黒石市　石澤　はる子

退職を機に川柳に出逢い、それから始まる長い長いおつき合い。今では切っても切れぬ深い仲。あちこちの大会にも没句をぶら下げては参加、楽しい想い出ばかりです。

コロナ禍のステイホームにも退屈せずに済みました。みんな川柳のお陰、高名な川柳界のある方が「川柳さんと呼ぼう」とおっしゃるのを聞いて、それ以来川柳さんと呼ばせてもらっています。そして折に触れては「川柳さんありがとう」と呟いているのです。

「あっという間に楽しい時間は過ぎてゆく」のがこの世の常。私も終活の刻が来たと覚悟を決めたその矢先、畏れ多くも「川柳塔社」様からのお誘い、迷いました。

「良いのだろうか、この齢で……」

川柳さん、あと少しおつき合い下さいませ。

皆様、よろしくお願いいたします。

川柳との出会い

大阪市　大沢　のり子

川柳との出会いは、五年前のことです。身内の介護を終えて、だらだらと過ごしていたのを見かねて娘が探してきたのが近くの川柳教室でした。一年ぐらいは頑張ってみようと通うことにしました。その教室が平井美智子先生の教室でした。

文芸には無縁でしたが、あっという間に明るい先生のお人柄に惹かれてしまいました。講座の日は泣いたり笑ったり感動したり大好きな時間です。

二〇二一年一月に川柳塔の誌友になり、この度は同人に推挙していただきました。ありがとうございます。

今年は本社句会にも参加させていただき励みになりました。

里帰りするたびに川柳の本やノートが増えているのを見つけては、笑っている娘がいます。今では川柳を勧めてくれたことに感謝しています。

まだまだ未熟者ですが、今後ともよろしくお願い致します。

こんにちは　新同人です

川柳との出会い

大阪市　折田（おりた）　あきこ

川柳との出会いは、コーラス仲間に誘われて生涯学習センターの「川柳de遊ぼう会」に行ったことでした。そこは平井美智子先生の教室で、まず先生のユニークな髪型に驚きました。そして先生の率直な言葉にひかれ、川柳の事は何も知らないまま、こわごわ入会しました。

最初は先生のお話を聞くだけが楽しみで通っていたのが少しずつ句を作る楽しみを覚えるようになってきました。コロナが流行し通っていた教室は閉鎖、困っていたところ、川柳塔の誌友に推挙して頂いて感謝しています。

心の闇の部分を吐き出し斜めからみる穿ちが必要と解っていても、言葉探しに四苦八苦している昨今です。

これからは「歩かねば歩けなくなる」「書かなければ書けなくなる」と言い聞かせて、美智子先生の〝**飛花残花老いたることの美しき**〟をモットーに本社句会には全没覚悟で参加し、生の句会を楽しみながら勉強して行こうと思っています。

このたびは、同人に推薦して頂き有難うございました。継続は力なりを信じて、ゆっくり勉強させて頂きます。

どうぞよろしくお願い致します。

こんにちは、新同人です

黒石市　北山（きたやま）　まみどり

きっかけは些細なことだったが、よほど相性がよかったのだろう川柳にどっぷりと浸かってしまった。川柳の副産物はとても大きい。何よりも人との出会い、交流がいいのだ。川柳を始めて間もない頃から先輩柳友に言われ誘われたのは誌上大会やリアル大会への参加だった。

披講が始まるととてもドキドキする。どうせ抜けるなら平抜より上位がいいに決まっている。しかし全没のときもある。私はあまりめげない方だと思う。あとで誰かが句を覚えていて話の種にしてもらうことが楽しいのだ。

句は独り歩きをするという、いくら推敲を重ねた句でも、また深い思い入れのある句であっても相手が自分と同じ感情感覚で句を読んでくれるとは限らない。抜けなくても仕方ないのだ。また違う読み方や真逆の読み方で選ばれることもありそれはまたラッキーなことなのだ。

大会への参加は柳友と一緒に行く。遠ければ遠いほど旅行気分を満喫できる。これもそれも川柳のおかげ。せっかく出会えた川柳とその仲間たち、ここまできたのだからもう少し長く楽しんで、少しずつ恩返しをしていければいいなぁと思っている。

こんにちは　新同人です

川柳と人との出会い

大阪市　阪井恵子（さかいけいこ）

この度は同人に推挙頂き有り難うございます。

何か始めようと思い、地元の会館の川柳の体験教室に軽い気持で申し込みました。

川柳については、五七五、面白い句という知識しかない中、講師の平井美智子先生との出会いは、本当に驚きました。私の周りには、このようなパワーのある方はいなかったからです。しかも参考資料に載っている先生の句を目にして涙が溢れそうになりました。母を送り、ぽっかり空いた心にしみこんでいきました。これが川柳。

先生の表面の強さと内面の繊細さ。私にもこんな句が、作れるようになるのだろうか。

そんな思いで始めましたが、なかなか良い句は出来ません。怠けそうになる私を、先生の叱咤激励と講座仲間の熱心な姿勢や励ましに何とか続けてこられました。

二〇二一年五月に川柳塔の誌友に、二〇二二年九月に同人に推薦され、今日に至りますが、私が同人になって良いのだろうかという思いが続いています。

これからも平井先生や講座仲間とワイワイ楽しくやりながら、コツコツ作句に取り組んでいきたいと思います。

今後とも宜しくお願い致します。

川柳と出会って

神戸市　櫻井崇史（さくらいたかし）

定年退職後、友人に誘われ地域のシニア男性を対象の約三ヶ月、十回のゼミに参加しました。ゼミ終了後にOBの方々が活動されている各種同好会にも参加できます。

二〇一八年二月にゼミの終了後、物珍しさと面白そうの理由から、「川柳同好会」に入会しました。第一回目の参加の時に、「川柳しませんか」の冊子の説明をして頂いたのが、川柳への第一歩でした。

小説等は若い頃から読んでいましたが、川柳は今まで、あまり接する機会や実際に作る機会もありませんでした。ほぼゼロからのスタートで当初は、例会への投稿も四苦八苦でした。のびのびとした会の雰囲気もあり、少しずつ句を作る事が楽しくなりました。その頃から別の勉強会への参加、川柳塔誌友や六甲川柳会へ入会させて頂く等、未知の世界を体験しつつ、現在に至っています。

人生後半のこの時期に、川柳の世界に出会えた事は、本当に幸運であったと思います。川柳を通じて先輩の方や、友人との交流は温かく楽しい貴重な時間になっています。日常生活の中で、句の材料になりそうな出来事を探したりと、広がりを感じています。句会での独特の緊張感もいい刺激になっています。同時に学ぶ事の多さも痛感致しております。今後ともよろしくお願いいたします。

こんにちは　新同人です

川柳に出会って

米子市　妹能（せのう）　令位子（れいこ）

このたびは同人に推薦して頂きありがとうございました。平成二十九年秋、高校の同級生後藤宏之さん、本庄汪さん達に誘われ、きゃらぼく川柳会に入会しました。川柳は面白そう、季語はないし私にも作れそうといった軽い考えでした。入会してレベルの高い会に入ったのだと気付くのに、時間はかかりませんでした。竹村紀の治先生、八木千代先生、政岡日枝子先生、成田雨奇先生、錚々たるメンバーが揃っています。

最初の頃、千代先生の隣の席になり、暖かい人柄に触れ的確なアドバイスを受けたことは、幸運なことでした。千代先生は「もう一人の自分を作りなさい」とおっしゃいました。いつも、もう一人の自分に問いかけながら句を詠んでいます。また、亡き家族と対話する時間でもあります。

入会の翌年、県の大会で鳥取県作家協会賞の佳作に選ばれました。

百人に百の挽歌があるだろう

大事な人を失い挽歌を独唱していた私が、斉唱、合唱へと心が移った頃に詠んだ句です。今では私の生きる力に繋がる句になっています。

死ぬまでに人の心の琴線に触れる一句が詠めると信じて精進したいと思っています。

芦屋市　新阜（にいおか）　義明（よしあき）

このたび同人に推薦頂き誠に有難うございました。承認証を受け取り、喜びと併せて同人の重みを強く肝に銘じさせて頂きました。

小生と川柳のキッカケは10年程前の公募でお題が「花粉症」、**「一年が夏秋冬になればいい」**が初投句入選した事です。二〇一八年に山﨑武彦様が代表の勉強会「東灘マスターズ川柳の会」に入会しました。最初の入選句が**「チラシ見て思わず安さ妻走る」**でした。川柳塔誌の紹介から皆様より遅れて躊躇して購入。先輩の方々から「川柳塔誌へ投句してますか」と再々催促され、初歩教室から投句し始め、誌友です可能な投句に全てチャレンジする事になりました。

仕事で句会に出にくいハンディはありますが、他の句会にも入会し学ばせて頂いております。二〇二二年一〇月には川柳にはプラスになるとの事で「冠句」にも入会しました。川柳を通じて諸先輩の方々のご指導を頂きながら前進させて頂き、また人脈が増え、生き生きとハリのある生活が出来る日々に心から感謝しております。今後共、皆様方のご指導とご鞭撻を頂きたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

こんにちは　新同人です

愛する川柳

豊中市　松田　蟻日路

このたびは同人に推挙していただきありがとうございます。思い返せば二〇一九年の秋、幼なじみの川柳塔同人、髙杉力さんに、仲間内で「四水会」という川柳会を始めるからと誘われ、深く考える事もなく川柳の世界に首を突っ込みました。

それまでも四〇歳の時、思いつきでマラソンとピアノを始め、還暦を過ぎた頃囲碁に手を染め、川柳の際は、これで趣味は四つ目か、まあどうにかなるやろと、思ったものです。

二〇二〇年の春、力さんの勧めで川柳塔誌友に加えていただき、今年になって恐る恐る本社句会に参加。四月には同人の水野黒兎さんに誘われ「ほたる川柳同好会」にも加えていただき今に至っています。

手探りで始めた頃いただいた『髙杉鬼遊川柳句集』で

素うどんへ何ですかとは何ですか

消えるから雪は刹那を浄く舞い

白式尉ひとにたわけと言われても

を見つけ、川柳の幅の広さ底の深さに驚き、未熟な私も出来るところまでやってみようと思いました。

こんな私ですが、今後共機会ある毎にご指導願いたく、どうか宜しくお願い申し上げます。

「川雑」語録 ⑭

グロテスク

小出　楢重

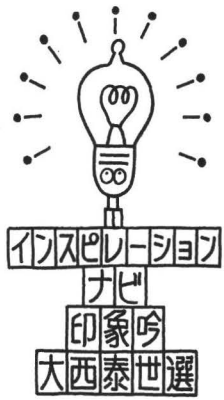
一部分と云ふものは妙に奇怪にして気味のよくないものである。人間の一部分である処の指が一本、若道路に落ちてゐたとしたら、吾々は青くなる。テーブルの上に眼玉が一個置き忘れてあつたとしたら、吾々は気絶するかも知れない。（中略）其不気味な人間の部分品が寄り集ると美しい女となつたり、羽左衛門となつたり、アドルフマンジウとなつたりする。

私はいつも電車やバスに乗り乍ら怠屈な時こんな莫迦々々しい事を考へだすのである。電車の中の人間の眼玉だけを考へて見る。すると電車の中は一対の眼玉ばかりと見えてくる。

（中略）

矢張り人間は全体として見て置く方が完全であり、美しくもある様だ。それだのに、私は何んだか部分品が気にかゝる。

（「川柳雑誌」昭和2年2月）



（投句 182名）

春の兆しが感じられる頃になって、やがて開く花々への期待も膨らんでくるのですが、今年はお花見も制限無しになるのでしょうか。

人が動けば経済も動く、勿論これも大切なことですけど、昨秋からの食料品や生活必需品の値上げ値上げの波、すっかり疲れ切ってしまった人も多いのではないかと思われます。

せめて桜を見るこころは穏やかでありますように。

では、ナビを。

角砂糖溶け新しい旅始む　大阪市　田中ゆみ子

（評）角砂糖というあまーいものから解き放たれ、ちょっぴり引き締まった気持ちで始まる新しい旅、いいですねぇ。

半世紀使った鍋はもう家族　豊中市　水野　黒兎

（評）犬や猫はペットというより家族だと思っている人は沢山います。台所用品だってリッパな家族の一員です。

プーチンよ僕は怒っているのです　豊中市　上出　修

（評）幾つかの国は別として、怒っていますよ全地球規模で！ お蔭で値上げに食料不足、ああ、たまりません。

言い訳はよそう選んだのは私　大阪市　小野　雅美

（評）結果が思わしくなければついあれこれ理由を付け、言い訳をしたくなるのですが〈選んだのは私〉とはご立派。

ストレスも逃げるおばちゃん達のお茶　貝塚市　石田ひろ子

（評）お茶を飲みながら、あけっぴろげに喋るおばちゃん達、怖いものもストレスもございませぬゾ！

グラグラグラ軍拡原発いらぬ　大阪市　江島谷勝弘

（評）グラグラグラはお湯がわいているのですか？ それともはらわたが煮えくり返っているのですか、たぶん後者。

女房の記憶に僕が漏れている　寝屋川市　廣田　和織

（評）これ、男性からすればショックかも知れないけど、だから何なん、としか思えませーん。

大臣がポロポロポロと零れ出す　塩竈市　木田比呂朗

（評）四人だか五人だか、名前も顔も覚えきれないほど次々と大臣がやめて行くなんて異常と言うほかは無し。　堺　市　坂上　淳司

沸点が近そう妻と少し距離

（評）ムム、何ちゅうアヤシイ雲行き。君子危うきに近寄らず、の心境でありますな。無事切り抜けて下さいませ。　松山市　栗田　忠士

痛ければ痛いと言っていいんです

（評）何だか切ないですねえ、ぐっと我慢している様子が。思いっきり叫ばせてあげたくなってしまいました。　堺　市　内藤　憲彦

知らんけど値上げのうえに増税か　尼崎市　山田　厚江

お茶にして次のトビラに進みましょう　高槻市　富田　保子

署名欄雨で余白が埋まらない　弘前市　福士　慕情

加齢という錆を落としにカルチャーへ　神戸市　みぎわはな

タヌキ化けた薬缶に鼻の穴二つ　橿原市　居谷真理子

百均の湯のみにペットボトルの茶　奈良県　中堀　優

酒五合今日は私の誕生日　藤井寺市　鈴木いさお

内外に敵あり孤立するロシア　香芝市　大内　朝子

長電話ストップさせるケトル鳴る

池田市　太田　省三
夫婦仲追い焚きしてもすぐ冷める

松山市　柳田かおる
この辺りでやめる沸点こころえる

大阪市　森　廣子
焦るまい大切なもの無くすから

佐賀県　真島久美子
古里は春じいちゃんが入れるお茶

河内長野市　中島　一彌
蓋してもだだ漏れをする民の声

米子市　八木　千代
水瓶をひっくり返すほど慌て

箕面市　出口セツ子
創世記こうして陸と海ができ

大洲市　花岡　順子
熱くなってきましたやかんもサッカーも

神戸市　奥澤洋次郎
意地を張り愚にも付かない我慢して

藤井寺市　鴨谷瑠美子
これもまた毒かも知れぬ甘すぎる

弘前市　髙瀬　霜石
自慢ではないがまいにち綱渡り

生駒市　飛永ふりこ
鮭茶漬するり濁まで洗われる

松江市　石橋　芳山
感動の涙がたまらなく熱い

唐津市　仁部　四郎
大臣を化かしてみてもお茶は出ぬ

大阪市　石橋　直子
湯たんぽに足を伸ばしていい夢を

岡山市　永見　心咲
悠長に湯など沸かせている場合

鳥取市　倉益　一瑤
わたしだって芸の一つや二つ持つ

大阪市　吉積　栄次
十円も負けてくれない五つ星

松山市　郷田　みや
困ったねえ欲張り過ぎて開いた穴

横浜市　菊地　政勝
新年に下戸も上戸もないお神酒

豊中市　藤井　則彦
欲が出て二兎を追おうかまだ迷う

大阪市　平井美智子
入り口はひとつ出口は二つある

東大阪市　佐々木満作
結構なお点前ですと褒めそやす

三原市　笹重　耕三
ここからここまでみんな私の陣地です

大阪市　古今堂蕉子
ヨーイドン貴方に勝った事がない

丹波篠山市　酒井　健二
辞書を引く同じ文言なん度でも

黒岩市　北山まみどり
大声を出しても誰も気づかない

鳥取市　永原　昌鼓
湯が湧いた御飯炊けたと機器が呼ぶ

三田市　村田　博
ミサイルの一方通行許さない

神戸市　近藤　勝正
分水嶺どちらに行こう迷う水

八王子市　川名　洋子
差しつ差されつ飲む熱燗の美味さ

枚方市　栃尾　奏子
今日もまた八方美人ですワタシ

大阪市　岩崎　公誠
家宝だとケトル磨いて穴があき

尼崎市　永田　紀惠
内緒だと言うからしゃべりたくなるの

和歌山市　上田　紀子
夜も更けて家族会議がまだ続く

大阪市　井丸　昌紀
去年まで飛び越せたのに水たまり

河内長野市　穂口　正子
家財道具わたし諸共襤褸になり

箕面市　広島　巴子
漏洩はアカンさっさとやめなはれ

大阪市　奥村　五月
飛脚なら土日も無しで夜中でも

広島市　羽城　裕子
あふれ出る言葉を誰も拾わない

大阪市　髙杉　力
終章へ要らないものの多いこと

高槻市　初代　正彦
一段落つけば最後は熱いお茶

4月号発表
(2月15日締切)

(平本　霧石人　画)
柳筥に2句

『麻生路郎読本』余滴(74)

「雪」③

桒原道夫

藤村青明は、大正4年8月2日に死去したが、前回紹介した斎藤松窓の日記中に、〈一日の句會に來て議論も吐いて居た〜〉とあった。今回は、その「一日の句會」について記す。

「一日の句會」とは、大阪市北浜にあった川上日車の事務所（日車は、大阪市桜島に製油工場を設け、事務所を北浜5丁目の帝国座前に置いていた）で開いた「番傘」の例会のことである。

まずは、川上日車の「大阪川柳小史(9)」（「番傘」昭和32年6月）から見ていこう。

〈「雪」の出た月、大正四年八月一日番傘例会では、私の事務所だった北浜の店で番傘の例会を催したことがある。既に番傘とは句の上で対立していたが、番傘側は当百、水府、五葉に、神戸から青明の顔も見え、「雪」側からが柳珍堂、游二郎、それに路郎と私で、各自の立場々々でそれぞれ句をつくった。それ迄はまことに和やかな句会であったが、句作を終る頃から、青明と路郎の川柳の本質について互いに意見の交換をやっていた迄はよかったが、いつしか激論に昂潮してきた。それは青明と路郎との夫れ夫れ句の上の立場の相違から対決にまで発展した。つまり番傘派と雪派の代表対決となったのである。青明といい、路郎といい、いずれ劣らぬ柳壇の闘士だから、論議はいつかな納まらず、互に火を発する程論じ合ったが、游二郎が程よく巧みに話題を転じたので一と先ず鳧がついた。唯だ最後に青明は「君等の主張では川柳国がまことに迷惑だ」と言い切って、結末はつかずに終り、散会となった。散会後あとに残っていた柳珍堂が「今夜青明君は川柳国が迷惑だと言いましたね」と意味あり気に私に囁いた。これはどういう意味であったか、今に私には解釈できぬまま今日に及んでいる。〉

青明と路郎との間に川柳の本質についての議論があったということだが、何がきっかけで議論になったのかが不明である。「番傘」（大正4年10月）は、「青明追悼号」と題して、親交のあった柳人が青明の思い出を綴っている。西田當百の「亡なつた前夜」を読むと、議論になったきっかけを推測できる。

〈此の夜君（筆者註―青明）は僕に對して近頃毎日柳壇に日車君や綠天君の川柳として首肯し難い句が時々掲載されるが、神戸の同人などは爲に大に方向を惑ふから、之れは是非廢して貰ひたいと要望し、且僕は近來漸く川柳の眞の味が解つて來たのだ。然るに我家のやうに思つて居る大阪で此麽事（筆者註―小さい事という意味）をやつて呉れると僕自身も迷ふやうになる。曾て僕等の短詩社時代にやつて居たやうにそれはそれで別にして川柳は矢張り番傘式でやつて呉れ、僕は今川柳が好きになつて來たんだといふ様なことをいつた。

毎日柳壇に之等の句を載せたに就ても、僕は矢張り普通の川柳とは區別を立てゝ居る積りで、他の句とは列記せずに出して居たのだが、併し同じ柳壇に含まれてある以上は、青明君の說も尤もである。之に就て、即ち此區別說に就いては他に議論もあつた

が、何うしたものか、此夜の青明君は平生にも似ず論鋒が鈍かつた。勿論僕も其區別論者であつた。唯茲に嬉しくもあり又異様にも感じたのは、今川柳の味が解つて來たとの一語である。

君は曾て短詩――川柳と區別して――を唱道し短詩社を起し、後神戸に歸つてからも短詩社の名を我家に置いて居た。何方かといへば、川柳から離れて、さういふ方面に趨むくべき傾向を有して居たのが、今日矢張り川柳をといふ。之れ君に於て果して喜ぶべきか悲しむべきかは知らぬが、今日の僕に取つては甚だ嬉しい言葉であつた。〉

藤村青明が西田當百に、毎日柳壇に川上日車や馬場緑天の作品を掲載してくれるなと注文をつけた。それを耳にした麻生路郎が反論し、激論を闘わせることになったのだろう。

藤村青明は、小島六厘坊の「葉柳」終刊後は、「わだち」「矢車」「新川柳」などに作品を発表した、いわゆる新傾向派の柳人だった。〈骨壺も朧ろ〳〵の夜なりけり〉〈マツチ擦つてわづかに闇を慰めぬ〉などが当時の作。ところが東京放浪後、神戸に戻ると「ツバメ」に出席し椙元紋太を指導。「番傘」にも参加し、〈スーさんと見たは僻目か戎橋〉のように作風は一変していた。

ここで気になるのは、當百選の毎日柳壇に掲載された句がどんな句かということである。そこで、大阪市立中央図書館で、「大阪毎日新聞」の大正4年7月分をマイクロフィルムで調べてみた。すると、23日に日車の「雑吟」21句が掲載されていた。全句挙げておく。

太陽の海に落つまで語るまで
いつもする事を氣に止めざりしを
飲仲間下痢を起して寢てゐたり
だし殻になつて立派な理解力
幸福と思へるそれが羨まし
思ひ切て歸る一足づゝの快樂
めでたしと六十老爺眞の聲
思ひある身に眞白な布團かな
女あまた取り卷けど第三の人
さら〳〵と事運ぶ日の雨となり
五月雨に消えゆく一人ひとりづゝ
だしになりだし殻になり遇てやり
二人きり十時半から物言はず
又虫が出たを殘して有馬まで
かたまらぬ頭に酒の醉心地
美しい指と言はれて働かず
果敢(はかな)しと手紙も卷かず眼を外らし
處女一人もゐぬ氣安けれ
我儘の勘定書で尻をふき
一かどの我と思へど折にふれ
仁義禮智信のほかに熱があり

路郎が青明と初めて逢ったのは明治39年8月2日。以後、数限りなく逢った。最後に、路郎の「回想記」（「番傘」青明追悼号）を挙げておく。

〈活社會に入る第一歩でお前は死んだのだ。陳腐な言ひ草でお前の短い過古をほめ千切る奴等や逸話と稱して、お前のダアクサイドを日向に出す奴等は用捨なく俺(ど)が筆誅してやる。死んだからとて誰れが何ということいふてもよいといふ理由はないからなあ。大正四年三月十三日俺のとこで會のあつた時（筆者註―番傘例会が大阪市上福島の路郎宅で催された）に來てから、八月一日の夜に逢つたのが最終であつた。阪神電車の梅田停留場で永遠にお前と別れたのであつた。それから僅か十八時間程してお前はこの世にゐない人になつていた。ああ。〉

（次回に続く）

本社　一月句会

◇一月十日（火）午後一時
アウィーナ大阪

令和五年の新年本社句会は、百十二名（内投句者十九名）の参加で始まった。初出席は奈良市から、田中薫さん、嶋慎一さん、播本英二さんの三人で、皆さん拍手で迎えられた。句会に先立ち令和四年度の年間最優秀賞の片岡加代さんの手にトロフィーが渡された。

今月のお話は、小島蘭幸主幹。『広島県の川柳作家』と題して湯来温泉の近く《湯来しあわせ観音》に百基以上の句碑が建立されている事を紹介された。ほとんどは山の持ち主の野村弘之氏が石を探してコツコツ彫ったものらしい。細い山道斜面に句の数々。

水平線をみている迷いきえている　小島　蘭幸
涅槃までわき見道草して歩き　森脇幽香里
すしになる一等米の男ぶり　熊谷　蓮生
（じゅん子）

月間賞は桒原道夫さん（堺市）

（司会―真理子・武人）（脇取―勝弘・奏子）（受付―蕉子・すみ子）（懸垂幕墨書―耕治）（清記―憲彦・勝弘・国和）

席題「B」　石田　隆彦　選

出しゃばらぬ母の躾でBが好き　津守　柳伸
落とし物拾いに来ないB29　村田　博
B29同じ恐怖のウクライナ　松岡　篤
メロンちらとAの値を見てB級に　森　菊江
B面の重さ知ってる苦労人　柿花　和夫
スリーサイズのBが若さを主張する　木本　朱夏
Cにならんようせーざい気一つけや　島田　握夢
B級の人生ですが悔いはない　平井美智子
B級のグルメで育つでかい孫　内田志津子
B面のわたしだーれも知らぬ顔　みぎわはな
朝帰り妻の温情B級犯　松岡　篤
Bの字は私の体形そのまんま　矢倉　五月
グランプリ取った焼きそば並ぶ列　冨永　恭子
B体をずっと維持して半世紀　藤井　宏造
懐が寒いBランチにしとく　中村　惠
B面と言われ知らない顔をする　播本　英二
ここは日本英語ばかりは読めません　山本加お里
まだAに登る希望が持てるB　矢倉　五月
たこ焼もB級グルメと胸を張り　青木　隆一
格差社会BにはBの長期戦　酒井　紀華
恙無くさてもめでたいB評価　饗庭　風鈴
B級で結構うちは年金者　冨永　恭子
定年後B面のツラぶら下げる　谷口　東風
君と居たくてBという選択肢　栃尾　奏子
BGMジャズを流して縄のれん　山野　寿之
柔らかく対応できる太っ腹　坂　裕之
6Bでストレスためず書きなぐる　江島谷勝弘
B級品だけでも幸せな暮らし　鈴木　かこ
曇日はBの気持ちのワルツ踏む　森田　旅人
10Bで主張くずさぬ太いペン　澤井　敏治
合言葉はB ブラボーのBだ　中岡千代美
二十歳から馴染みB級グルメ街　新家　完司
半額のB級品がよく似合う　北村　賢子
B級と言われて俄然ファイト湧く　安福　和夫
三っ星よりB級グルメ口に合う　油谷　克己
B面も読めば昭和史よく分かる　平賀　国和
Bクラス悔し涙が乾かない　伊達　郁夫
私は女優　B面は見せません　小島　蘭幸
ゆっくりと大輪咲かすBクラス　柿花　和夫

佳

AとBに二股かける憎い人　糀谷　和郎

この時勢安い美味しいBグルメ　飛永ふりこ
なせば成る伸びしろがあるBランク　内藤　憲彦
ABCいまだ英語にアレルギー　木本　朱夏
窓際の僕がもらったB評価　藤田　武人

人

ウクライナ地下にひしめく避難民　磯島福貴子

地

B6で核廃絶の署名する　川端　一歩

天

次点でもチャンスはあるさ陽は登る　両澤行兵衛

軸

リベンジへ燃えるキャンプのBクラス

兼題「祝　う」　岩佐ダン吉　選

少子化に歯止め産ぶ声新生児　川本　信子
元旦生まれロウソク吹いたことがない　米田利惠子
祝われて申し訳なく生きて居り　太田　昭
村中が祝う久しい呱呱の声　水野　黒兎
杖なしで歩き妻からほっこりと　興水　弘
塹壕で新年祝うウクライナ　東　定生
祝ってばかりおれない長寿国　三宅　保州
うつを越え見事成人式典へ　新阜　義明
祝いばかり出して息子はまだ未婚　出口セツ子
一言で終わったスピーチ拍手喝采　斎藤　隆浩
私の還暦だあれも知らんふりをする　きとうこみつ
高らかに祝う九条守らねば　津守　柳伸
米寿たまわる次は白寿をめざさんか　川端　一歩
代読の祝辞に欠伸噛み殺す　柿花　和夫
百歳を祝う酒の輪絆の輪　山野　寿之
幸せは五体満足初日の出　嶋　慎一
生きていることを祝ってクラス会　新家　完司
元日の朝水の音母の音　藤田　雪菜
意のままにならぬ身で何がめでたい　大久保眞澄
窓を開けよう全てが美しい春だ　栃尾　奏子
ミサイルに怯えながらもクリスマス　伊達　郁夫
目覚めたら今朝の元気を先ず祝う　藤村　亜成
移住者が来たと花火が上がる村　石田　孝純
お祝いに行って来ますと諭吉消え　澤井　敏治
クリスマスも正月も無い国がある　山﨑　武彦
百均が畏まってる祝い箸　谷口　東風
誕生日犬にもちょっとおすそ分け　播本　英二
偶数月に入金します慰斗袋　大久保眞澄
ケーキよりお札がほしいバースディ　永田　紀惠
百歳の兄別れを祝う家族葬　酒井　紀華
地球から戦無くなる日を祝う　中村　惠
最初から僕のコップに注ぐ屠蘇　藤田　武人
三ヶ日彬偲んで祝う句碑　津守　柳伸
過疎の地に後世に継ぐ祝歌　石田　隆彦
お正月それどころではない戦禍　宇都満知子
まだ若い喜寿米寿では喜べぬ　内藤　憲彦
成人を美容院から祝われる　山田　耕治

佳

ウクライナ想えば祝う気になれず　安福　和夫
鬱晴れて喜色満面おめでとう　中村　惠
やっかみも巧みに添えておく祝辞　初代　正彦
長生きを祝う陰には泣く介護　伊達　郁夫
明日退院こんな嬉しい夜はない　川端　一歩

人

地球からいつか戦が終わったら　栃尾　奏子

地

再々婚だし一万円でいいだろう　島田　握夢

天

ゼレンスキーに早くブラボー言わせたい　西出　楓楽

軸

核ゼロのその日地球にでかいマル

席題「大　変」　大久保眞澄　選

通院に日に四回のバスを待つ　北野　哲男
焦るほど深みにはまる遭難者　東　定生

理由なく面識もない殺人鬼　伏見　雅明
大変な話だまずは茶をすする　藤井　則彦
赤紙がSNSで来る噂　仁部　四郎
姥捨ての安いホームがまだ空かぬ　出口セツ子
大変大変となんだか楽しそう　桒原　道夫
プーチンがヤケを起こしているらしい　両澤行兵衛
9条の精神いずこ防衛費　柿花　和夫
無い袖を振ってしまった防衛費　澤井　敏治
大変だ鶴彬の句　点滅す　平賀　国和
9条に点滅してる赤ランプ　永田　紀惠
ばあちゃんの喉をふさいだ雑煮餅　大内　朝子
長生きのクスリ飲むことを忘れてる　山田　耕治
大変でしたねと退院のころ見舞う　上田　和宏
発熱におびえる豚も鶏も　田中　薫
年賀だと五人も子供連れで来る　両澤行兵衛
一人目は双子三人目も双子　藤田　武人
造反の兆し膝耳歯も脳も　木本　朱夏
大変の枠も小さくなる齢　森田　旅人
今思えば順風の日もありました　岩佐ダン吉
辛うじて生きていますが徳俵　村田　博
お隣の雨戸閉まったまま五日　山﨑　武彦
息切れがサインだったと後で知り　山本加お里
エビウニイクラいくつも入る孫の腹　敏森　廣光

殺処分たまご高騰止まらない　内田志津子
女は化粧炎天下だとしても　鈴木　かこ
八十の夫が髪を染め出した　鈴木いさお
右はつま先左はかかと足袋に穴　島田　明美
えらいこっちゃえらいこっちゃと飲んでいる　小島　蘭幸
帰省の日事故で不通になる電車　藤村　亜成
値上がりはするしパートは待機やし　平井美智子
禁酒せよこりゃ大変なことですよ　西上　遊二
鍋底に隠した肉が見つからぬ　木嶋　盛隆
お隣の火事枕だけ持って逃げ　山本加お里
〆切日全部ずれてたカレンダー　栃尾　奏子
三ヶ日過ぎた兎に生えた髭　津守　柳伸

佳

両国初場所大関只一人　内藤　憲彦
もう他に選択肢などありません　中村　恵
ぽちぽちと皺はふえるし金は減る　柴本ばっは
清貧の男が狂う当たりくじ　吉野　茂子
任せたと言われてからの長い指示　島田　明美

人

後から追いかけてくるえんま様　折田あきこ

地

今からは白紙あなたが決めなさい　小野　雅美

天

分身が良からぬ方へ行きたがる　木本　朱夏

軸

えらいこっちゃ披講はマスク取った顔

兼題「情け」　大内　朝子　選

人情の花咲く路地の暖かさ　水野　黒兎
増税には情け無用という総理　藤井　則彦
ゆきずりのなさけが呼んだ救急車　萩原　狸月
卒寿過ぎ人の情けにぶら下がる　太田　昭
腕前はともかく人情ある主治医　三宅　保州
手を合わす路傍に白い花の束　今村　和男
情愛の化身国境無き医師団　みぎわはな
いい人と思われぬよう慰める　稲葉　良岩
息詰まる重たく優し深情け　藤田　雪菜
痙攣の手をながめしみじみ情なし　島田　握夢
包帯の方を攻めれば勝てていた　髙杉　力
見ない振り聞こえぬ振りをする情け　柿花　和夫
人間の芯は情けでできている　平井美智子
肩そっと抱いて一緒に泣いている　鈴木　かこ
しんしんと情け容赦を知らぬ雪　宇都満知子
老いて知る人の情けの有難さ　平賀　国和
情けある言葉に弱い涙壺　古今堂蕉子
情けない出来ないことがまたひとつ　播本　英二
あたたかい言葉傷口軽くする　吉野　茂子

地域猫 地域の人の情もらう　きとうこみつ
我ながらあほな男に深情け　片岡　加代
親が子を子が親殺すこの世相　みぎわはな
人情も風も変わらぬ過疎の里　石田　隆彦
プーチンに裸ですよと教えよう　長谷川崇明
あの時にもらった情け返さねば　坂　裕之
いまいちど情けの海で溺れたや　中村　惠
今ここで許せば情け無駄になる　西出　楓楽
両親の重い情けにつぶれる子　冨永　恭子
情け無い何をするにもどっこいしょ　山田　耕治
小銭ではち切れそう 情けない財布　島田　握夢
情けあるさばきに開く重い口　嶋　慎一
高齢者人の情けの中に住む　鴨谷瑠美子
千羽鶴人の情けに泣きました　木本　朱夏
勝負には強いが情けには弱い　油谷　克己
ころばぬように施設の母が僕に言う　藤井　宏造
苦労した分だけ情け深くなる　中井　萌
やき芋の好きな男の人情味　山﨑　武彦

佳

情けない姿と思うわかってる　岩佐ダン吉
まごころが通じ目頭熱くなる　北村　賢子
友情は恋愛ですと青リンゴ　長谷川崇明
どん底で受けた情けは忘れまい　加藤江里子
人情の濃さ ありがたく疎ましく　大久保眞澄

人

路地裏に人の情けが落ちている　木嶋　盛隆

地

同情から生まれる愛もあるのです　澤井　敏治

天

鬼にもなる情けを抱いて親でいる　原田すみ子

軸

情けにはなさけでハグをするハート

兼題「きりり」　鈴木かこ選

師の前できりりと姿勢正してる　惠利　菊枝
出納人指がきりりと仕事する　米田利惠子
会葬の謝辞は長男十五歳　仁部　四郎
一匹の雑魚といえどもきらめけり　三宅　保州
あほやなあ飲み過ぎまして胃が痛む　江島谷勝弘
きりりとしています痩せ我慢ですが　青木　隆一
しっかり者に見られ迷惑な眉　稲葉　良岸
早春のうなじに匂い立つエロス　美馬りゅうこ
巣立つ子をきりりとさせる火打ち石　村田　博
顔つきをきりっとせよと言う遺影　小野　雅美
演説を英語できりりゼレンスキー　上田　和宏
君子蘭きりり淡雪持ち上げる　津守　柳伸
打ち初めの棋士の一手は迷いなく　加藤江里子
ウイズコロナときにきりりと眉を引く　澤井　敏治
さよならの握手ブルーのアイライン　平井美智子
結び目きりり死んでも繋ぐこのタスキ　島田　明美
パリコレのモデルくるりと決めポーズ　藤田　武人
どん底で開き直って立つきりり　大内　朝子
鍋底もキリっと磨き新年だ　柴本ばっは
立ち姿タカラジェンヌに隙は無い　両澤行兵衛
見栄張って背筋キリリと座す傘寿　内田志津子
負けへんで辛い時ほどするキリリ　出口セツ子
更迭続きチコちゃん喝をいれたって　きとうこみつ
確かにあったきりりとした目した時代　野口　龍
子を守るか弱い母の仁王立ち　大内　朝子
核禁条約きりっとなさいませ　大久保真澄
一月の顔してカレンダーのきりり　古今堂蕉子
紅きりり紙人形が立ち上がる　中村　惠
もう元には戻らない寒椿　中岡千代美
一日中ぶらぶら宵酒できりり　古今堂蕉子
ポンと帯叩き商いの顔になる　島田　握夢
予断なきカルテへ空気引きしまる　吉野　成子
威勢よく竹刀の響く寒稽古　初代　正彦
緩まぬようきりりと結ぶ赤い糸　永田　紀惠
蔵出しのきりり辛口まず一献　中井　萌子

眉きりり初めて母になった朝　敏森　廣光
靴きりり春風とゆく８０００歩　内藤　憲彦

佳

予科練の義兄の写真を飾る家　山田　耕治
オペ室のランプが消えた深呼吸　吉野　成子
真冬日の朝の空気は笑わない　石田　孝純
ショートカットきりりポニーテールふわり　小島　蘭幸
向かい風受けよう腹は決めている　岩佐ダン吉

人

ぱっと灯がともりましたよ君の瞳に　上田ひとみ

地

ちょっと辛口です僕の人間味　藤井　宏造

天

ダイアモンドダスト別れを決めました　中岡千代美

軸

靴紐をギュッさあ前髪をあげようか

兼題「自由吟」　新家　完司　選

新しいパンツうれしいお正月　上田ひとみ
足腰に錆止めを塗る年始め　石田　孝純
ＣＭをたっぷりと見た三ケ日　山田　耕治
物価高響ていますお賽銭　森　菊江
今年もまたお節の中に母がいる　敏森　廣光
丁寧に作ったおせち持て余し　藤田　雪菜
鮒っ子が戻った川に初氷　長谷川崇明
寒の水飲んで憑き物追い払う　吉野　成子
次の日のおでんに妻の愛がしみ　吉村久仁雄
粕汁は鰤にしようかいや鮭か　青木　隆一
コオロギを食べる時代が来るなんて　谷口　東風
カイロ三枚貼って覚悟の風の中　木本　朱夏
粉雪よ君はいっつも風まかせ　加藤江里子
合格のパーセンテージ聞く弱気　米田利惠子
誕生日目出度くないが無事に過ぎ　長谷川崇明
着飾ってデイサービスのバスに乗る　伏見　雅明
二万歩の後遺症三日後に出る　内田志津子
指舐めてページめくるのやめてくれ　斎藤　隆浩
カッコよくフェイドアウトがしてみたい　髙杉　力
新大阪ふっとこのまま消えたいな　片岡　加代
正直な鏡をだます厚化粧　木嶋　盛隆
エビフライの尻尾を残すバチあたり　きとうこみつ
場所代と思いコーヒー追加する　松岡　篤
風の時代にもう一度ボブディラン　鈴木　かこ
危ないと書いてあるから覗きたい　松岡　篤
メリカリで買ったオーブン作動せず　きとうこみつ
爆弾を抱えたままのコップ酒　木嶋　盛隆
嬉し気に五臓六腑を巡る酒　大内　朝子
飲み会もあってあれこれ忙しない　初代　正彦
ラーメンで締めて真っ直ぐ去んで寝る　油谷　克己
これからもずっとよろしくねと眠る　栃尾　奏子
宇宙ってきっと果てしのない丸さ　居谷真理子
じっくりと泣ける家まであと五分　小野　雅美
たこ焼きをひたすらつくるたこ焼き屋　藤井　宏造
使い方わからぬボタン押してみる　平井美智子
オレだって昔はもてた知らんけど　糀谷　和朗
あちこちで恋が生まれる春が好き　川端　一歩

佳

真っ直ぐで阿呆で優しい夫です　栃尾　奏子
飯茶わん小ぶりのものに替えました　島田　明美
今日の事今日で忘れて髪洗う　酒井　紀華
デイサービスに作り笑顔の父がいた　島田　明美
探し物するため今日も目を覚ます　伊達　郁夫

人

融通のきかぬ同士の僕と葱　桒原　道夫

地

時々は自分を褒めて換気する　内藤　憲彦

天

蜜柑剝く間も世の中を憂う　桒原　道夫

軸

一人では盛り上がらない福笑い

２０２３　としま川柳誌上大会

課題と選者（各題２句）

「アピール」　赤松ますみ　選
「守　　る」　安藤　波瑠　選
「主　　役」　上村　　脩　選
「　壁　　」　大野　征子　選
「描　　く」　新家　完司　選
「未　　来」　髙瀬　霜石　選

表　彰　2023としま川柳誌上大会賞（賞金３万円）ほか５賞

投句方法　＊応募料1000円（郵便小為替・切手不可）何口でも可
＊投句用紙使用（コピー可）または便箋大用紙（郵便番号・住所・氏名・電話番号明記）

締　切　**３月３１日（金）必着**

発　表　令和５年６月予定（発表誌呈）

応募先　〒１７０－００１３
東京都豊島区東池袋1-42-12
ステーションサイドビル１階
平井熙（ひろし）宛

連絡先　電話　090-9817-2983

主　催　東京池袋川柳会

第２４回 川柳展望全国大会

日　時　**４月16日(日)10時30分開場**

場　所　ホテル　アウィーナ大阪
大阪市天王寺区石ケ辻町19－12
ＴＥＬ（06）６７７２－１４４１

参加費　１５００円

お　話　「元気の出る川柳」新家　完司

題と選者

席題「　　」　梶井　良治　選
宿題「なれる」　ささきのりこ　選
「　軸　」　田沢　恒坊　選
「強　い」　植竹　団扇　選
自由吟　吉崎　柳歩　選
自由吟　鈴木　公弘　選
自由吟　森中惠美子　選
自由吟　天根　夢草　選

各題２句　出句締切　**12時00分**
自由吟は各選者に違う句を出してください

事務局　〒567－0009
茨木市山手台４－６－３－101
TEL (072)649-5226 FAX (072)649-2334

主　催　川柳展望社

朝日なにわ柳壇　今年の十秀

― 令和４年12月21日　朝日新聞発表 ―（太字は本社同人）

川柳塔社相談役　**西出楓楽選**

最優秀句

戦中派大和魂忌言葉　柿花和夫

秀　句

ぶらぶらを口実にして逢いに行く　沼田捷二
最高のワインで最期迎えたい　服部康彦
通帳を見せられ急に酔いが醒め　**井丸昌紀**
サプリより効果絶大寄席通い　井上昭
財政難国の財布に要るチャック　**水野黒兎**
爺(じい)さんと犬連れ孫が行く散歩　森純也
濡れ落葉不満募らせまだ不仲　玉瀬洋子
手のひらほどの幸せでいい平和なら　**平賀国和**
婆くれたお金に匂うナフタリン　谷口由子

番傘川柳本社主幹　**田中新一選**

最優秀句

どう生きるなぜ生きるかの問いつづく　山崎達彦

秀　句

向かい合いただ佇(たたず)んだ崖っぷち　桑原すゞ代
自画像は最期の日まで描きつづけ　杉本和夫
お役に立ちながらこれからを生きる　故・上山堅坊
辛ければ白旗振ればいいんだよ　玉瀬洋子
化けて来いあんなに苦労させたのに　辻肇
煩悩を鎮め極める無彩色　井本健治
冷蔵庫に入れて地球を冷ましたい　田部和幸
やさしさがますます老いの身にしみる　越智宰
平穏を味わう水の出る蛇口　**柿花和夫**

柔地初壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳de遊ぼう会（大阪）石田　孝純報

戒めの雨斜めから降って来る　雅　美
また増えたサプリ数える朝餉かな　次　郎
アイスコーヒーズズと啜り恋終わる　(岡)恵　子
遺産なし家族仲よく暮らせてる　爽　也
近頃の雨は加減を知らんから　喜美子
天空に雨乞いをする蝸牛　敏　郎
結局は大きい方を選っている　美智子
万歩計千歩越えなくスマホ振る　はるみ
肝心なときにスマホは電池切れ　幸　徳
ごめんねに機嫌直らず飴ひとつ　(阪)恵　子
単純な父複雑は母困る我　晋　一
臨月にじたばたしてるおじいちゃん　のり子
雨上がるまたも電車に傘忘れ　康　雄
ダメそうな人見つけてホッと試験場　恵美子
老いじたく時雨に似たる心地して　てるひこ
てにをはの辺りで詐欺師カード切る　よしみ
手ぶらです雨が降ったら濡れるだけ　和　男
急くほどに髪も化粧も決まらない　満知子
罪もなく火あぶりされているあわび　孝　純

川柳塔さかい（大阪）　内藤　憲彦報

除夜の鐘わたしの海がなぎに入る　進
ほっこりと心を洗う冬至の湯　禮　子
弱いもの同士しっかり手をつなぐ　いさお
しっかりと財布握って妻元気　光　雄
しっかり者と皮肉を込めて褒められる　世紀子
クラス会しっかりしたのしか来ない　時　雄
子だくさん戦中戦後生き抜いた　志津子
こぼれぬが飲みたい時に開かぬ蓋　五　月
しっかりと聞いていたのに皆忘れ　さくら
うっかりもしっかりもしてまだこの世　万紗子
しっかりと歯みがき健啖の白寿　恵　子
リベラル派しっかりしなきゃ戦くる　(江)勝　弘
右向け右しっかり者の妻と居る　蕉　子
ノーモアをしっかり次世代へ繋ぐ　満　作
春の芽へ今日もしっかり水をやる　満知子
雑草がしっかり生きて石を割る　佳　子
「さわらないで下さい」立て札のあり　美津子
とぼけてもホシ本物と老刑事　素頓馬
ブロードウェーこれが本場のミュージカル　清　萠
本物の愛が絆を強くする　育　子
イミテーション付けて本物金庫内　里　子
「好いとう」と友の本場の博多弁　ひさ子
生涯で命を賭けた恋でした　敏　治
本物と思て飲んでる森伊蔵　玄　也
本物が出てきて化けの皮剥がれ　久仁雄
「ほぼカニ」をカニと信じている家族　ダン吉
本物の人だ空気は気にしない　ひろ子
本物の涙は喪服脱いでから　八千代
嫌な事さっぱり忘れ今日生きる　廣　子
いい時に咲いてくれたね綺麗だね　敬　子
言い訳もさらりと流す君でした　和　夫
言い訳を先に読まれて虚勢張る　尚　邦
イワシよりサンマへ今日は給料日　憲　彦
言ったでしょさらっと妻の決め台詞　憲
粋な傘さっと咲かせて京の町

川柳さんだ（兵庫）　酒井　健二報

ばあちゃんは家で一番よく食べる　和　子
食欲さえ残っていれば生きられる　美津子
食欲は腹のあたりで相撲取る　敏　夫
口上に親父ハラハラ新之助　徹
運動会靴で見分けて孫見つけ　玲　子

新型コロナ今年も几帳面にやってくる　雄太郎
尾身さんのご登場第八波だな　武彦
ひさびさの赤子に沸いた過疎の村　真桜子
スーパーの鶉の卵孫が孵化　喜弘
命生む女は凄さ秘めている　優子
超一流は異次元の神がかり　俊朗
一泊の旅行で妻のその荷物　宗鉄
プーチンに負けるもんかとTシャツで　正和
生まれた川に命をかけて戻る鮭　(高)千賀子
アスは雨確信もって膝が言う　三ツ代
生きるって凄いことだと四股踏んだ　義徳
本当のアメリカ人はインディアン　英秋
趣味合わぬタダでも要らぬ米軍など　万彩
モンローがいまだ住んでるマイハート　和郎
鬼畜でも時が過ぎればオトモダチ　勝正
憧れた金髪青い目赤い靴　美和子
アメリカに「ノウ」と言えないじれったい　登志子
次々と友の訃報に驚愕する　祐康
我が庭の築山ですよ有馬富士　博
背筋ピン九十ですと軽く言う　えい子
政権にこんなに深くカルト教　健二
耳遠いのに驚くほどの地獄耳　廣光
呆けた母ヘソクリの場所おぼえてる　紀恵
お隣りが毎日サンマ焼いている　野薫
ストレスを真っ赤な服で包み込む　厚子
ともだちはお酒とテレビ今の僕　ひとみ
閣僚の軽さが目立つ岸田丸　雅尚
ステイホーム午後はテレビのミステリー　耕治
古里で帰り待ってる祭り寿司　哲男
赤い羽根こころ優しい人になる　おさむ

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

コロナ禍も一緒に過ごす年の暮れ　俊久
震源地地元も地元妻でした　宏之
孫の手を借りてぽつぽつするスマホ　恵子
コンサート生声聞いた秋の暮れ　治代
何もかも綺麗に見える嬉しい日　久直
大ボラを吹き大空に叱られる　令位子
記憶力減って体重増えてきた　紀の治
老いた今開き直って楽に生き　多美子
直ぐに経つ二十四時間早すぎる　ひろし
秋日和わたしも干して旨味増す　美穂
食べて寝る起きるつまりは生きている　千代
髪染めた笑うしかない色が出た　雨奇
こんにちは挨拶したら名が出ない　菜々
喧嘩して夫婦の愛は工事中　瑞枝
きっぱりと断ることで身を守る　宣子
週刊誌見出しだけでも満腹だ　美緒

藤村亜成選

ぼんやりと木になってみる小半時　繁子
大あくびして浮かんでる朝の月　昌紀
人はみな輝く星を持っている　一歩
孝行に哀しい嘘もまぜておく　蛙明
満天の星に聴かせるハーモニカ　武彦
秋ナスを食べる淋しい過去がある　のり子
走ったら転ける歩いたら遅れる　義
しあわせのお手伝いです空の青　あかり
わだかまり解けて落ちだす砂時計　和織
民族楽器奏でる人の生きる音　廣光

佳句地十選　（1月号から）

上村夢香選

ニッポンの誇りだこども平和賞　いさお
園児らの元気な声を運ぶ風　宗鉄
思い出が家族を繋ぐ小宇宙　常男
どの顔も輝いている秋祭り　瑠美子
リストラの話も聞いたパンの耳　和子
消えていくオアシスだった本屋さん　定生
ゆっくりと爪研ぎながら策を練る　すみ子
いくつかの壁乗り越えてまだ未熟　行久
昭和史の戦禍忘れぬ古時計　香代
結局は終の棲家も仮の宿　のぶよし

富柳会（大阪）　山野　寿之報

答弁はあたふたピエロ演じきる　和子
虎の威を借りた五輪の共倒れ　文重
冷やかな視線でアタフタを嗤う　恵
虎になる酒猫になる妻の膝　武人
風と舞う落ち葉のダンスパソドレブ　由夏
虎の威を借りて虚勢を張る小者　壽峰
最後には軽い会釈で終りたい　一文
般若経すらすら母の一周忌　あかり
皇帝ダリア師走の街を俯瞰する　涼子
人間を諫める酒に褒める酒　欣之
人間でずっといたくて愛を編む　かこ
熱狂から一瞬奈落W杯　高鶯
魂を磨き白寿まで生きる　晴美
接種済み旅のお供に証明書　きよみ
白い目にマスク忘れてさらされる　隆充
老いの坂私の坂は上り坂　正邦
逆縁の息子が立った枕元　圭
北風に大根干して重石のせ　和雪
心は春花の音符とハーモニカ　章子
酒の輪の話し上手に聞き上手　寿之

川柳ふうもん吟社（鳥取）山下　凱柳報

駐車場所忘れ頭はおおばえだ　紫陽
たかが癌そげにおおばえしなさんな　隆浩
小惑星宇宙の神秘おおばえだ　一平
おおばえをするほど遺産有りません　金祥
おおばえる熊が冷蔵庫を開ける　蟹郎

おおばえ（因幡方言）＝大騒ぎする・慌てる

金欠を逆手にとって楽に生き　回春子
正論をかざして友のない男　ふりこぼし
何とまあ便利な言葉知らんけど　茶人
白寿まで歩くつもりの靴を買う　昌鼓
若返るワクチンならば何度でも　紘一
青空の大きな画布に秋を描く　哲子
弱点を見せて仲間にしてもらう　拓治
風百態百のドラマを演じ切る　一瑤
銀杏並木揺すると金が落ちてくる　千賀子
想像と素性大樹の成る日こい　初恵
たくましい想像力に舌を巻く　みゆき
想像外オコゼが鯛になるなんて　稲佐獄
空想に浸ると生えてくる翼　無限
百年後想像したら妻といた　勲章
物価高想像越えた割烹着　洋子
想像では今年も私ミス日本　八千代
里に寄る代が変われば茶も出ない　日出美
飲み会で言い寄られるもすましてる　大
寄らないで私濃厚接触者　ミツコ
日々寄せる黄泉への招き胸詰まる　頼太
思いも寄らず父は急いで旅立った　龍枝
不用品持ち寄り開く蚤の市　みつこ
掃いてすぐ落ち葉を寄せる秋の風　房江
修羅場さけ本音はいつも胸の奥　(久)千代
借用書ばかり出てきた遺産分け　毅
後一票修羅場と化した開票場　節子
父母の修羅場に子らが泣き叫ぶ　菊江
酒の席他人の修羅場肴にす　月満
寂聴の記憶の中にある修羅場　賢悟
人は皆修羅場乗り越え強くなる　凱柳

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

聞く耳を捨ててしまった有頂天　宏章
プーチンが小麦粉までも食いつぶす　孝子
腰を折り安全祈願祈ります　草文
新年を祝う金粉浮かぶ酒　静恵
一人占め夜のゴキブリ有頂天　すみれ
有頂天なってメガネが曇りだす　弘子
有頂天になると見えない穴がある　楓花
持病です美人に弱く騙される　小鹿
プライドが粉々九九を忘れそう　茶子
老いてなお胸が高まる恋の病　白周
糖尿病らしいが酒はやめません　完司

忘れもの次第に増える数と量　ゆたか
へそくりを隠すページは角を折る　文道
有頂天でも味噌汁の具を考える　孔美子
歳重ね出ましたついにガンの奴　弘六
何もかも思いどおりと有頂天　瑞子
話の腰折られて気付く不愉快さ　慎一
性格だ君のためなら身を粉にする　大鯰
有頂天やがて淋しき秋の風　恒
めきめきと腕が上がって鯛が釣れ　蟹郎
言い訳は厳しくチェック誤字脱字　紫陽
粉雪が舞う中芝生積みました　重忠
ワールドカップ初戦突破に有頂天　一平

川柳塔まつえ吟社（島根）**相見　柳歩報**

生まれたよ地球にしかも人間に　柳歩
高齢者球技はやっぱり野球だね　あきら
紛争が絶えず汚れていく地球　豊仙
地球を守れるのは人間だけだ　モナカ
引き際の球ねちねちと指の腹　とも子
窓際に寄ればハイネに囲まれる　美智子
窓を開け胸のムジナを追い払う　徳利
窓際に座れば見える人のエゴ　桂子
天窓は閉めぬ亡娘が戻るから　弘充
深窓の令嬢となる認知症　青帆
村の隅まだ生きてます手を上げる　米估
村を出た男が帰る秋祭り　知恵子
村社会プライベートのない世界　ビル
さそり座をこの手に握れそうな村　芳山
安心の切り札ちらり遺言書　みちを
世界中みんなが笑顔なるように　邦代
安心にいささか欠けるグータッチ　吹喜
安楽の方程式は現ナマだ　雪代
安全な国は天国かもしれぬ　小鹿

川柳茶ばしら（愛知）　**金子美千代報**

負けてはならぬ雑草のしぶとさに　遡行
理想像追ってはみても夢は夢　三樹夫
あの時が転換点の左前　まみ子
親見れば分かる子供の育て方　かつ子
行かなくちゃ今日はポイント五倍デー　美千代

竹原川柳会（広島）　**古田比呂子報**

トンボメガネ母より母に似て普通　笑子
無事ひと日過ぎて合わせる手の温み　弘子
コロナ超えようやく祭り集う顔　夢香
普通に生きたく戦争ノーと断固言う　慶子
それぞれに自分が普通線はない　輝恵
永年勤続父の普通を誇りとす　蘭幸
タンポポの綿毛仲間と風に乗る　比呂子
信じて貸した十万円が戻らない　団風
街中で昔の仲間ふと出会う　栄香
妻よりも僕を知ってる飲み仲間　和子
毒舌の仲間が諭す愛のムチ　節夫
リズム感所作が命の和太鼓よ　千代美
眼裏に一途な父の打つ太鼓　敬子
合格と太鼓判押されたけれど　宣之
定年後から小太鼓に持ち替える　昭紀
プーチンの太鼓はなから無理がある　白狐
アフリカの太鼓地球を打つ音だ　京子
東照宮とそっくり家の眠り猫　厚子
幸せのお裾分けです嬉しい日　歩美
祭り囃子男のロマンはじけてる　幸子
健康体操明日も歩けますように　初音
眉間のシワ消えない曇り空つづく　貞子
張り詰めた朝の空気に背筋伸び　史子
フリフリのかわいいドレスきてみたい　小二沙弥
マーチングバンドピアニカ2曲　小一央

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

老骨も煽てられるとよく動く　起世子

まだ動く手足が暮らし弾ませる　昭枝
若者が消えて休耕広い土地　まき
朝起きる先ずは目玉をみぎひだり　一雄
手術日は時計の針が身に迫る　敏照
解決へきみの頭をお借りする　准一
頭上注意どう注意すりゃいいのです　ひろ子
ちょっと頭下げれば風も通りよい　俶子
ストレスになるから我慢やめました　宏枝
帽子屋は頭の形先に誉め　和子
落日に明日があるよと励まされ　菜摘
先頭の雑魚は覚悟を決めている　保州
激動をよそに巡ってくる季節　(酒)純子
口だけは老いを忘れて動き出す　彦弘
オリパラの裏側闇の金動く　義泰
シャッターチャンス心の動き逃さない　あき子
重い腰の父動かした子の涙　明子
釣り人を選んでタイは針を呑む　眞智子
ふところにあった希望が動き出す　和美
それなりに頭使った過去である　悦男
広い道できて歩道が狭くなる　よしこ
悩み聞く広い縫い代用意して　澄夫
天高く心も広く憂いなく　(松)純子
川柳を始めて世界広がった　さやか
失明が視野を広げるきっかけに　孝雄

日記書く今日の動きを残しとく　幸
大正の音色で動く掛時計　興一
クラス会出世頭も杖をつき　俊介
床の中ラジオ体操する頭　碩子
カーテンを開けると今日が動き出す　碧
虫食いの脳ときめきのメス入れる　幸彦
白髪が似合う歳だという鏡　俊枝
国境を越せば大河の名も変わる　剛
オアシスの広さへ心溶けてゆく　八重子
錆び付いた脳を動かす缶ビール　千鶴

南大阪川柳会　松岡　篤報

ちょっと歪むそれくらいならちょうどいい　風羅
おいしいと言いつつ顔は歪んでる　昌紀
盆栽はイテテイテテと歪められ　東風
多少はね僕も地球も歪んでる　蟻日路
末吉を枝に結んで願かける　克己
おむすびに母の温もり詰まってる　志華子
結び目はすぐにほどける赤い糸　実
縁結びお守り八個持っている　双葉
敵の敵は味方とみなし手を結ぶ　国和
いきさつを捨てて結んだ手が温い　俊雄
皺増えて人間丸くなりました　一歩
周りには白髪の増えたお洒落さん　よしみ

老眼鏡シワを増やしてはずされた　まゆみ
ダメージ増なんとかしてよ物価高　勝弘
またひとつ仕事を増やす物忘れ　常男
生来のけちが物置狭くして　篤力
核の傘それで解決したつもり　
慰めたつもりの言葉泣かせてる　大子
ウクライナ助けるつもり粗衣粗食　ルイ子
ストレスには死んだつもりで目をつむる　蕉子
支持率が雪崩おこしている総理　加お里
娘の機嫌まごに慰められている　ひさ乃
掃除機に振り回されて小半日　通江
デイサービス塗り絵カラオケ満ち足りる　柳右子
前向きな姿勢を示す独り膳　弘子
カラフルな枯れ葉カラコロ出迎える　柳伸
シャンソンに耳傾けて秋惜しむ　千鶴子
コロナ気になるが紅葉も見たいし　直子
近況を聞いてほしいな電話待つ　峰子
マイペース老いの明け暮れつつがなし　楓楽
自粛の日日考えてみる自由とは　敏治

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

ネクタイと背広を捨ててマイペース　孝子
ゆったどしてお茶こ飲むのもいごすなあ　澄子
リタイヤ後しがらみ取れたゆったりと　義明

みんな家 ゆったり出来ぬ主婦だけは　英子
ゆったりなひと時欲しい育児ママ　ふさゑ
夢を追う鈍行ならばゆったりと　友二
ゆったりと暮せる老いの有難さ　洋子
幸せはゆったり歩く丁度良い　一呑
ゆったりと煮込めば味の出る人生　美鈴
いのちを解す露天風呂です月見酒　のぶよし
ゆったりとしてる夫に腹が立つ　吹喜
三食に昼寝がついてゴムの跡　則彦
鈍行で無人駅にも降りてみる　慕情
古希過ぎてもいまだゆったりなど出来ぬ　重虎
大らかなあなたをとても好きになる　龍馬
ゆったりの服で育む愛しい児　初枝
柚子浮かべゆったり浸る冬至の湯　風来坊
一杯のうどんに時間かかる老母　柳子
納骨を済ませば春がやって来る　霜石
ゆったりと楽しむ雪であったなら　真由美
鰊漬け今ゆったりと発酵中　ひろ
父の留守空気が違うそれだけで　規子
ゆったりと暮そと思ううさぎ年　隆樹
あたたかい手 優しい目には癒される　久美子
除雪する威力に猫の手を借りる　ひとし
侮るな女は三度勝負する　和香子
刈られても刈られてもなお芽を伸ばす　劦

少年の辞書から消えてゆく活字　花峯

城北川柳会（大阪）　近藤正報

恋人が相棒となる共白髪　朝子
つらい世も振ろはいつでも温かい　廣光
愚痴言わず両手を挙げて大あくび　峰子
阿と吽を従え世間闊歩する　繁子
退職後悠々自適どんな人　章
胃も腸も白湯でくつろぐ休肝日　隆一
新米祖母産湯使わす手もそぞろ　福貴子
すぐ怒るきっとビタミン不足だね　万紗子
俺に似て息子可もなく不可も無し　北舟
腕時計外しゆうゆう生きている　実
平凡な暮らしを祈るウクライナ　賢子
相棒だ道具の手入れ怠らず　克己
たくましく育って側に居てくれず　俊雄
平凡な母だが村の知恵袋　郁夫
ぬるま湯の老後追い炊きして生きる　満知子
平凡で主役出来ぬが脇締める　榮子
平凡な暮しで守る靴の底　捷二
私には百円ショップ夢の国　ゆきみ
相棒が居るので毎日が楽し　一歩
交差点命を守る盲導犬　野鶴
三食を作ってくれる有り難さ　宗鉄

前脚は任す後脚任せとけ　千恵子
戦禍無き平凡な明日きますよう　杁香
慎重に食べな命を落とす餅　博
平凡で良かったなんて負け惜しみ　和夫
また今日も昼寝の後は周五郎　黒兎
阿と吽を従え世間闊歩する　志華子
無し崩し定年 人も原発も　義明
酒はダメと言われたことは言わず飲む　かずお
度忘れた「ア」から順序に言うてみる　信子
お値段はそのままだけど量が減り　篤
針の山ゆうゆうと行く貴方　優
飛び立てばうしろは見ない渡り鳥　宏造
師走の風吹いて干柿でき上がる　恭子
宇宙の隅で今生かされている奇跡　星雨

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

気は急ぐ体が付いてこぬ八十路　龍枝
急ぐ奴先に行かせて一世紀　石花菜
なんとなく落ちる夕日に急がされ　陽之助
御負けつけ急がす国のマイナンバー　滋
土器の破片ざくざく出土遺産かも　大鯰
幼少期親にざくざく仕付けされ　悦子
ざくざくと亡妻のヘソクリ箪笥から　重忠
ざくざくと平和の畑耕そう　石花菜

ざくざくと日本に欲しいレアアース　義人
ざくざくと一円玉の命かな　余光
ざくざく桃も桜も褒め上手　美ッ千
ざくざくと言葉巧みになる不安　重利
日本丸借金ふえて沈みそう　久米代
完済で平々凡々の暮らし　清
借りた猫みたいに暮らす定年後　芳江
風借りて山頂の雲蹴散らされ　裕子
一滴を山から借りる命綱　紀子
本棚で媚びているのは借りた本　美知江
忘れてはいない消しゴム借りた恩　完司
家建てる図面描くが金がない　紀美恵
新築の図面に俺の部屋がない　節子
本棚を図面頼りに組み立てる　富隆
ピアノ置く部屋の図面に石の台　照彦
ゼンリンの地図はスマホに入れてある　紀の治
かすれたり途切れて見える未来地図　芳光
子や孫が図面どおりの目鼻立ち　三津子
生き急ぐ紅葉から散っていきます　くにこ

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

ウインナー五つ並べたような指　順子
グーパーがなかなかできぬ足の指　正子
指切りをしたのに夫が先に逝く　奈津子
大阪人指ピストルで倒れます　勝弘
背伸びにはなくてはならぬ足の指　宏造
太い指もスマホ操る軽やかに　直子
働いた指だと思う握手する　螢柳
今更と思う気持ちで薬足す　契子
幼子の指さす先にある未来　純子
言い訳を付け足したのが命取り　則彦
うっとりと見とれて睨み返される　蟻日路
古稀過ぎた人にうっとりサユリスト　黒兎
禁酒始め寝つけず僕の長い夜　一弥
長電話おいて用件何だっけ　春代

川柳塔なら　大久保眞澄報

君らしく青く未熟なままでいい　江里子
女より女形がよほど艶っぽい　薫
微笑みに勝る力はないらしい　すみえ
俺らしい言葉遺して逝きたいな　げんえい
同期生笑顔で交わす久しぶり　裕之
挨拶は一七音でまとめましょ　勝弘
「暑いね」の挨拶もでる紅葉狩り　崇明
犬どうしワンと吠えてる散歩道　恭昌
挨拶がきちんと出来て嫁がせる　扶美代
カバンからでっかい夢がごあいさつ　定生
挨拶をすれば返ってくる平和　文聡
不意突かれ無念千万本能寺　隆一
不意に出た苦し紛れにこそ本音　則彦
人はみな逝くが逝く日は突如です　武人
或る日不意に明けない夜がやってくる　いさお
不意打ちでもろく剝がれた付け焼刃　淳子
ピーンポンと貧乏神がやって来た　盛隆
雑踏で不意に淋しくなる孤独　すみれ
不意打ちを食らった辛い過去を持つ　優
忘れてた齢が時どき顔を出す　ひろ子
度忘れも得意になって古希の坂　ふりこ
いやな事忘れて暮らす生き上手　萌子
物忘れ年相応と一気呑み　志津子
昨日のことは忘れ覚えている昭和　かずお
メモ魔だが忘れん坊で困ってる　ゆきみ
議員バッジ健忘症の印かも　和夫
面会にどなたはんだす母が問う　行久
きっちりと飲んでる薬なぜ余る　貫一
忘れたい事だけ残す骨の髄　敬子
スーパーに四季を忘れた花野菜　寿之
ときめきを無くしほつれたパンツ干す　敬介
少しずつ記憶が洩れるひび茶碗　和郎
悩みには忘却という常備薬　史郎
叩き込みの技は忘れぬノミカンナ　茂子
ものさしを忘れて豊かさを知った　かこ

プラザ川柳（大阪）　藤塚　克三報

ロボットに磨いた枝を押し付ける　克三
枝を磨き見事にきめた宇野昌磨　園子
横文字の看板がない過疎の村　五月
神田川一度はいって見たかった　政夫
歯治療打った麻酔が全身に　靖子
南座の招き看板風物詩　悦夫
一生の幸せ願う宮参り　景子
ここまでとうるさい口にチャックする　和代
看板の本家元祖で訴訟沙汰　一彌
これ以上埋めて汚すな美らの海　清乃
句に磨きかけたら題とかけ離れ　弘光
好青年打って投げての力業　正子
孤児達が靴磨いてたガード下　淳司

川柳塔すみよし（大阪）　田中ゆみ子報

楽な方楽な方へと足が向く　いさお
慌てたよドドドドッド不整脈　勝弘
世界から俊足揃うドーハの地　志津子
迎え来て心静かにお浄土へ　廣子
見目よりも心映えとは言うものの　俊雄
詰襟のボタン誰からもろたやろ　里子
心からお慕いしますお人柄　克己
歩けさえすれば大根足で良い　アヤ
笑顔なら心いっぱい咲かせます　満知子
お疲れさま足の裏まで陽を当てる　万紗子
やさしさは強さの表れ知ってます　龍
一本のシュート日本中湧かす　一歩
足もとが酔うてまっせと自白する　眞澄
心には鬼と女神を飼ってます　直子
放心の頬杖に降る夜の雨　寿之
子育てに化粧忘れて離乳食　さくら
慌てないゆっくりすれば思い出す　芳香
忠臣蔵心ゆくまで観て泣いて　まつお
勇気出し一歩踏み出す試歩の杖　美籠
無駄足でなかったようだ今日の幸　智子
薬師参り寛いこころに抱かれる　とみ子
その昔僕らロミオとジュリエット　憲彦
ドラマーのジャズが引き込む足拍子　ふりこ
慌てない落ち着くのよと慌ててる　舞夢
その心意気のあなたに惚れました　(矢)五月
信心も度を越さぬよう程程に　福貴子
墓参り山辺の道遠くなり　小枝子
駆け足で進む季節に追いつけず　陽一
慌てるなまだ余地残す養生剤　敏明
おどろくな足の大きさ背の高さ　重信
父ちゃんは上座で家族見守って　裕之
受けて立つ気力もあった四十代　民子
初恋は実らずマフラーは未完　ゆみ子
僕じゃない指名写真に似てるけど　真桜子
我が心きれいさだけは自信あり　猛

長柳会（大阪）　大浦　福子報

真実をねじ曲げフェイクつっ走る　福子
微笑みを忘れてしもたウクライナ　淳司
地球儀じゃどこも火の手上がらない　孝
正義などグニャリと曲げる独裁者　純風
今日もまた戦死者たえぬ地球上　靖博
宗教に家を壊され金取られ　正美
カタールで頑張れ日本沸く思い　幸子
お歳暮は海苔がいいのにまたお酒　直樹
夢うつつ三年振りの祭り笛　和子
コロナ禍に誰もが忍の字を背負う　ともこ
ナンプレのとりこにされている笑顔　ヒロ
就活に替え玉受験何のその　おくみ
炊き立ての新米キラリおかげさま　孝代
背中にも目があるような母でした　ふみ
君逝きて背中も冷える冬初め　澄子
理不尽な思いが晴れぬ拉致家族　克巳
老い来ても素敵に年を取る覚悟　光弘
メダルよりずっと眩しい汗努力　隆彦

高原の満天の星魅了され　由夏
特売の安物買って又もごみ　登美子
クラス会幸せ芝居する彼女　正博
マイナンバー健保を盾に卑怯者　くにお
ボーナスが乾いた仲を引き戻す　たけし
慣れた味煮物美味しい母の舌　由子
スマホデビュー孫の指から教えられ　秀子

川柳花の輪（大阪）　**川本　信子報**

節電で値上げの牙に立ち向かう　博泉
足許が火事でも他人の世話をする　亜成
ああ嗚呼と理解し合える夫婦仲　正太郎
あああれもこれも出来ない齢になる　泰子
開票と同時に当確聞くテレビ　和織
嗚呼の声トーンによってさまざまに　笑子
音のない万歳三唱コロナです　やすの
消火器が埃まみれで差無い　信子

ほたる川柳同好会（大阪）**水野　黒兎報**

問答に金婚夫婦目で語る　正子
わが道も正答だったこの夫で　直子
ひと筋の涙流したのが答　螢柳
数学は答が一つだからイヤ　宏造
取り敢えず会釈で返すマスク顔　奈津子
落葉に細い枝見せ冬が来る　契子
人生とは細くて長い登り坂　守啓
ダイエットしすぎふらつく細い腰　順子
口喧嘩細い声ほど勇ましい　則彦
細腕の妻チャーハンが大得意　一弥
ぐらりぐらり楽しかったが飲みすぎた　勝弘
札束に血圧上がり目がくらむ　蟻日路
大臣の首に総理の不整脈　黒兎
整理整頓苦手なとこは母ゆずり　春代

はびきの市民川柳会（大阪）**藤原　大子報**

よごれシャツにあなたのですかとにらまれる　専平
一夜漬け山大当りペン走る　庸郷
綺麗ごと図星を衝かれてすぐ剥げて　勝久
図星でも落ち着きはらう年の功　宏造
図星なり無心の帰省親は知り　洋一
図星され言い訳できずうなだれる　フジ
足音で勝った負けたを当てる妻　一歩
図星かな父さん急に照れている　さくら
脛の傷図星さされて痛み出す　泰子
顔色に出るから君は分かりよい　まつお
コロナ禍の互い励まし合う電話　大子
お互いに励ましあって八十路行く　かつ美
励ましの言葉に応え空元気　ひとみ
きっと来る春が来るのを待ちましょう　千鶴子
毎月の署名の数が元気薬　冬のト
大きな声でふるいたたせておく自分　こみつ
なるようにしかなれへんと励まされ　久仁雄
励まされ妻のうしろについて行く　一文
励ましは却って辛い臥せる床　ちづる
石蕗の黄に元気をもらうスニーカー　みつこ
励ましの悲しい嘘を許されよ　扶美代
陽の匂い土の匂いに励まされ　瑠美子

川柳あまがさき（兵庫）　**大浦　初音報**

母さんにあったのかしら骨休み　宗鉄
骨密度測り安心させる骨　こみつ
冬の空骨身にしみる待ちぼうけ　惠子
骨のある奴と言われたたこ焼き屋　隆一
甘言にのって男は骨抜きに　初音
昭和から生きて背骨が軋んでる　廣光
私だってまばゆい鎖骨だったのに　千代美
家計簿が我家の歴史残してる　佐和子
大阪の味になじんで「けつね」食う　英坊
年頭に立てた目標まだ出来ず　新録
残り香を猫のまねして嗅いでみる　照代
認知の友遠い昔はよく残す　れい香
百歳も遠くなくなり我が命　柳明

耳も目も遠くなったら角が取れ　和夫
いつまでも近くて遠い父の背な　幸彦
友が逝くホントに遠い人になる　かずお
遠からず迎え来るまでのさばろう　厚江
幼馴染み爺婆なるもちゃんで呼ぶ　(入)修平
一冊の句集が遺産悪しからず　健二
一服にお茶も紅茶もマグカップ　雪菜
旧友の訃報に苦い献盃を　純
定年でどこへ行くにも野球帽　耕治
百歳までまだ二十年リスキング　菊江
家族麻雀こたつ天板裏返す　ゆきみ
十八歳大人と子供使い分け　紀恵
老いたけどやっぱりいいな妻のひざ　宏造
飲みながら喋り合いたい笑いたい　祐康
娘が嫁ぎピアノはついて行けぬまま　和子
つづけるか止めるかなやむ年賀状　勝弘

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

今の子はカスガイよりもホッチキス　哲男
亡き父のその年となり恩を知る　稠民
変な奴じゃこの嫌いなうちのネコ　善輔
パッとす男の料理味見せず　重男
風に立つ自分を活かし生き延びる　良子
お茶の席優雅な時へもみじ舞う　美智子
百年後うたが伝えるコロナ危機　(長)哲夫
ケー犬好きが犬に挨拶して通る　すみえ
日記書く短い文は平穏日　智恵子
つまずいて上手にころびこつ得たり　凛絵
朝起きて母の手作りお弁当　照代
守り抜く君を泣かせてなるものか　ひとみ

六甲川柳会（兵庫）　糀谷　和郎報

やれやれと先思いやる金遣い　すみ子
ドアチェーンは女の迷い知っている　利惠子
本音言いあとは小言をやんわりと　和宏
柔らかい手をしてすごい過去語る　健二
派手好きな友の寂しい家族葬　正美
初孫の派手な産声夢を生む　廣光
やれやれと今日退職の靴みがく　武彦
ふっくらパン朝の始動に弾みつく　弘
言い訳は素面の時に聞いてやる　博
両親の若い笑顔に手を合わす　崇史
派手好きな妻が選んだ地味な俺　和郎
もう卒寿まだまだ卒寿ベンツ乗る　隆浩
今はただ健康だけを拝むのみ　勝弘
伴走の握る手強く柔らかく　美恵子
妥協したようだね風が凪いでいる　千賀子
派手な事縁なく生きて笑いジワ　道子
早起きをしたとて困る歳となり　克美
柔らかなおかゆが癒す二日酔い　義明
夕べまであった記憶を探す朝　狸月
合掌の形で軍手捨ててある　哲男
反抗期終えた娘と腕を組む　次郎
最後かも派手にやろうよクラス会　盛夫
十二月やれやれ句会もおしまいか　忠志
もう還ることはないから拝まない　洋次郎
せめてもと派手なパジャマで巣籠りや　正和
派手好きでいつもサイフを泣かせてる　光久
柔らかい言葉で芯をついてくる　憲央
ゴール決めガッツポーズも晴れやかに　美穂
ふわふわのいのちを包むバスタオル　ひとみ
策尽きて神社仏閣はしごする　恭子
手を合わすことを覚える七五三　美津子
今日も又日の出拝んで命ごい　弘華
新米を今年も口に生きている　洋一
言い間違い正してくれる人が好き　敦子
傘寿からスピード落とす砂時計　博史

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

ふぐのセリ袋の中の指で決め　隆雄
糸を操る百一歳の母の指　穏夫
指一本で大儲けする人もいる　達彦
仲間だよ平和ピースの指二本　義泰
美しい人指の先まで美しい　一歩
すり減った指紋に長い月日見る　蕉子

松茸サンマ指を咥えて見てるだけ　いさお
指先が触れて全身血が走る　朝子
千手観音一指一指にある慈愛　保州
尺八の冴えた音色に癒される　珠子
廃屋が増え星だけが冴える里　ダン吉
会得した勘でどんどん釣れる鯵　三成
虚を突かれ思わずに出る河内弁　玄也
新聞を読む顔チラリ見る車内　万彩
大粒の栗を思わず買いました　信子
介護改悪思わず背筋寒くなる　はこべ
松茸に思わずうなるその値段　ふさゑ
迫られて思わずはいと嘘をつく　常男
また彼の自慢話にチッと出る　裕之
稲光り思わず彼の胸の中　敏治
同感です思わずポンと膝たたく　扶美代
蛇の目傘シックな時が甦る　香代
外出は黒の背広に茶のズボン　康信
装いはシックだけれど軽い口　勝久
装いがシックな人にある魅力　麻子
紛争の国でも同じ冴えた月　愛子
一刀両断政治のウソを暴くペン　眞澄
減量中しかし思わずケーキに手　英夫
答弁のうそが思わず泥沼に　照千代
勲章が節くれだった指晒す　恵子
指さして指をさすなと叱られた　タカ子
シックな装いあなたの音を奏でてる　恭子
苦労話ゴツゴツ指が語り出す　航太郎
久しぶりよく寝た今日は冴えてるぞ　優
紬着てそぞろ歩きの古都の秋　ひろ子

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

幸を呼ぶボクのハンカチ黄色です　宏造
身に覚えあって意見が軽くなる　俊雄
めっちゃヤバイ妻の名前が出てこない　良種
支える手背中推す手があって今　恭子
九十歳少し傾き自由律　ばっは
大仏さん連れて歩けぬマスコット　邦男
ちょっとだけ聞こえるようにぼやきます　ゆきみ
なんとまあ眠ってからもぼやいてる　千賀子
熟年のパワー祭りを盛り上げる　紀乃
すんまへんなんでもぼやくボヤキマン　勝弘
めっちゃくちゃ可愛い子だが意地悪い　富次
ぼやき方忘れ流れるはぐれ雲　緑
着ぐるみの中で世間を値踏みする　敏子
川柳は生に限ると来た句会　野薫
人生の節目節目にいた恩師　幸彦
めっちゃ嬉し寝たきり母の笑顔見た　廣光
幸せを着ているような妊婦さん　洋次郎
ぼやくより次のチャンスに構えよう　盛夫
真心に触れて気分が和み出し　野鶴
息抜きに眉の白髪を抜いてみる　隆一
思い切り泣きたい時は亡母を呼ぶ　武彦
幸せはやりたいことのある暮し　ひとみ
好きになるただ裏表ないだけで　和宏
出来ちゃったこれを節目に籍入れる　新録
出だしは上上だめっちゃいい天気　敦子
棚飾る亡母手作りのご殿まり　恵美子
これ最後めっちゃ得した気になった　みよし
黒髪に染める勇気はクラス会　靖夫
逢いたくてたまらん時もありました　宗鉄
大声で笑える若さ残ってる　美津子

川柳藤井寺（大阪）　鈴木いさお報

春の足音一歩近づくうれしいな　公輔
スタンディング拍手が止まぬアンコール　比呂志
人生のフィナーレ花に埋もれてアリガトウ　俶子
フィナーレはピンコロリにしてと祈る　かずお
桜吹雪のフィナーレ飾る花筏　久仁雄
休肝日妻は隣りでロング缶　まつお
激戦のニュースに暗い夕御飯　ひろ子
フィナーレは花の棺を閉じる音　みつこ
激論のあとはすっきり縄のれん　ちづる
いよいよだ八十路が迫るすぐそこに　勝弘
北風に妻の笑顔とうまい酒　さくら
フィナーレだったのかイチョウが落ちる　瑠美子

日々静か親に背いた頃もあり　喜代子
前線に出ないプーチンよく吠える　ダン吉
フィナーレを花はふわりと舞い終える　扶美代
誰も気付かぬ穏やかな日に炎　亜成
寄り添って愛のフィナーレ樹木葬　憲彦
酒の味健康管理バロメーター　正義
フィナーレは傘寿卒寿が過ぎてから　一歩
十三の時に掠めた父の酒　いさお

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

人生のところどころに徳俵　和織
和ダンスの肥やしと共に老いている　かすみ
仏にも鬼にもなっている財布　亜成
やりくりは女の出番物価高　博泉
徳ある人やいつも奢ってくれる　勝弘
転がった徳利は僕の万華鏡　武人
徳積んで積んで会得の低い腰　壽峰
すぐひがむこれが得意で生きている　武彦
ジェラシーと言われてみてもなんでっか　秀雄
他人にはとられたくない宿六で　銀杏
シェイクスピア四大悲劇の生みの親　高志
図書館に生きる縁がないものか　鈍甲
愛と言う肥料うらぎらない成果　高鶩
生き辛さ癒やすこやしに歎異抄　信子
広辞苑親しき共になり切れず　一歩
この苦労肥やしにすると根性もん　篤
見込みあると思い鬼になっている　ルイ子
節分ではないが家には鬼がいる　彰一
大笑いした日の鬼はよく笑う　郁夫
オニアザミきつねの嫁入り通る村　千賀
ミサイルの遠吠えを聞く日本海　常男
路地裏で銘酒ゆっくり一人呑み　武彦
閣僚に我が社の社員送ろうか　泰子
頼もしいあのB級の立ち姿　后子
立ち位置を変えても同じ風の向き　楓楽
ユニークな考え変人にされる　かずお
年老いて極めたいこと溢れくる　順子
リラックスすれば仲間は多くなる　博
女郎花空の青さに恋をして　弘子
もたもたとわたし独りの冬支度　あかり
くっきりと虹の架かっている返事　かこ
徳積んだお人はてっぺんが嫌い　恵子

あかつき川柳会（大阪）　磯島福貴子報

削除などしてはならない負の歴史　夕胡
戦の字消せば新聞アキが出る　ひろし
削除する前なら一歩引けたのに　(長)敏子
削除すること多いですマスコミ誌　かつ美
だからって消してはならぬ恋心　ひとみ
住所録に棒線星になっちゃった　美春日
いつの間にか仲間はずれにされました　シマ子
削除せず恥をさらせばいいのです　直子
キュンキュンの心青春しています　朝子
再会に胸いっぱいで立ちつくす　(河)正
この感じうまくことばにできないが　文吉
再会しました八十三歳で　一筒
赤ちゃんが笑うバイバイもしている　賀世子
北風にびくともしないメールくる　(立)信子
もう一度フォークダンスがしてみたい　佑治ゼミ
初月給ばあちゃん行こな好きな店　遊
やるだけはやった冬の空仰ぐ　ダン吉
弔いの席で遺影の師と語る　英雄
席替えを前後左右が言い出した　利秋
大臣の席を揺すれば虚偽落下　(川)信子
末席も来賓席もパイプ椅子　宍道
指定席なのにおばちゃん走ってる　ひろ子
陣笠がしがみついてる銭と椅子　春雄
ムーミンが黙って座る被告席　恵
さよならを言わぬ帽子が置いてある　千代
朝日満つ席で未来の子が育つ　知栄
圧政に自由を求め白い紙　一歩
悲劇から歓喜に変えたドーハの絵　哲夫
防衛費増額よりも対話増　信明
辞任ドミノそのうち岸田さんの番　楓楽
定年を過ぎた原発再雇用　眞澄

アクセルに老いという字を書いとこう　文鎮
ポイントの餌に食いつく柔でない　征之
ウクライナ偲びエアコン2度下げる　栄子
半世紀二人三脚長い旅　鮎子

豊中もくせい川柳会(大阪)初代　正彦報

眠ってるサイズの合わぬチャイナ服　真理子
念願の奈良ホテルにてランチする　晴子
妻の愚痴総理に代り僕が聞く　健二
三高を狙う我が娘はまだ独身　英三
気位の高いお人も友の仲　時子
もう一度登りたかった槍ケ岳　多美子
逝った友緩やかしかし足早に　武彦
老友のまだ届かない年賀状　北舟
ソプラノで君の心を掴みます　きらり
ハネムーンハワイの夕陽目にささる　憲央
初孫を高い高いで手なずける　義明
スイーツと呼ばれ高価になった芋　敏昭
諦めると違う明日が見えてくる　野鶴
涙雨誰のシナリオなんだろう　公輔
ああ師走第九の調べ鳴り渡る　満作
試供薬だけでちゃっかり風邪治す　英旺
年金を底上げしてよ物価高　勝弘
やぼったい母の形見が似合う妻　一歩
ノラはペットに憧れたりはしない　眞澄
ハスキーな声に思わず高値買い　正彦
玉砂利が高く響いている社殿　肇
ユートピア都会にあると信じてた　哲男
僕だけが優先席で起きている　武人
冬の陽が温い双子の乳母車　黒兎
私にはわたしだけしか知らぬ海　ひとみ
誕生日ごまかした歳一つ増え　忠子
生きている今日やる事がある私　(岩)玲子
憧れた先輩は今の宿六　いさお
コオロギをいっぺん食べてみませんか　耕治
冬晴れに鳶が輪を描く高い空　千鶴子
捨てるまい心を癒す古い辞書　則彦
憧れが己が生き様決めてくる　(永)玲子
深呼吸詩嚢広げる秋の天　ヨシヱ
生ものは夫に毒見してもらう　洋志
いつもの事いつものようにできる幸　美津子

寒中お見舞申し上げます

匿名

寒中お見舞申し上げます

長浜美籠

〒661-0012
尼崎市南塚口町七―七―一五

寒中お見舞申し上げます

江島谷勝弘

〒536-0001
大阪市城東区古市一―八―一四

柳界展望

★第39回渡辺銀雨すずむし全国誌上川柳大会「風」。参加1467口。同人成績。

準賞・特選　北山まみどり

シーソーの相手はいつも風だった

特選　石澤はる子

いい風が笑い声するあたりから

特選　山崎　武彦

ヒュルリヒュルヒュル
ヒュルヒュルリ北に住む

★第3回太宰府秋の川柳まつりは、令和4年11月3日太宰府天満宮余香殿にて開催。参加者193名。同人成績。

特選　木本　朱夏

わし掴みされた深夜のふくらはぎ

順位賞2位　木本　朱夏

▽**動向**△

○札幌川柳社会長・岡崎守氏が令和4年12月をもって退任し、佐藤芳行氏が新会長に就任した。

○埼玉川柳社（代表・願法みつる氏）が令和4年12月をもって解散した。埼玉川柳社は、清水美江（一八九四～一九七八）が昭和33年に埼玉県下の柳人を結集して設立した川柳社である。

▽**訂正とお詫び**△

○一月号P36上段後ろから5行目、ぬらりひょうたん→ぬらり**ひょん**。下段15行目、働き→**動**き。P81私の一句後ろから2行目、漠だって好き嫌いある夢の跡→漠だって好き嫌いある夢の**味**。P87上段11行目、雨かいな雪やでと炬燵から→雨かいな**いや**雪やでと炬燵から。P90中段後ろから6行目、コンビニへ車が客と5ヒヤリ→コンビニへ車が客となる**ヒヤリ**。

▽**訃報**△

○青山ひろしさん（同人・神戸市）令和4年12月21日逝去。享年90。

○岸桂子さん（同人・出雲市）令和5年1月12日逝去。享年88。

▽**新誌友紹介**△

丹波篠山市　**久保木　剛**
紹介者　北野　哲男
神戸市　**酒井　宏**
紹介者　糀谷　和郎
伊丹市　**田吹　宗鉄**
紹介者　藤井　宏造
西宮市　**北島　邦男**
紹介者　緒方美津子
近兼　敦子

▽**川柳塔誌電子化事業**△

1月2日、「川柳塔」1112号～1123号がアップされた。

常任理事会（1月10日）出席20名。①「第11回春の川柳塔まつり誌上第会」進捗状況報告②「第29回川柳塔まつり」（10月7日土曜日）の取り組みについて③「川柳雑誌・川柳塔100周年記念行事」の確認○「合同句集」2024年7月路郎忌発刊に向けて○「川柳雑誌・川柳塔100周年記念誌」進捗状況報告④同人・誌友の現状と拡大について⑤定例確認事項⑥各部報告○「新役員名簿」「役員規程一部改訂」を2月号に折り込む（総務部）次回常任理事会2月7日（火）AM10～

奈良番傘川柳会創立75周年記念川柳誌上大会

宿題と選者

「生きる」　田中　薫　謝選
「記　念」　阪本　高士　選
「伝える」　重徳　光州　選
「ハート」　江畑　哲男　選
「のどか」　小島　蘭幸　選
「　道　」　片岡　加代　選

締　切　4月25日（火）必着
投句料　1000円・定額小為替（切手不可）
投句用紙　指定用紙（コピー可）
投句先　〒630-0045
奈良市千代ヶ丘1-3-10　嶋　慎一
問合せ先　田中　薫　TEL 0742-41-1781

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 さかい	14日（火）14時締切 礼儀・うやむや 折句：つ・ば・き	会場　東洋ビルディング（堺東駅北西改札口から2分） 欠席投句先 〒599-8122　堺市東区丈六77－4　　齋藤さくら
川柳 あまがさき	14日（火）14時締切 逃げる・口（連記）・じつは 自由吟	会場　東園田町総合会館３F 阪急園田駅北口徒歩２分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　　藤井宏造
岸和田 川柳会	18日（土）14時締切 炎・鍛える・さらさら プライド	会場　岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄岸和田駅東へ徒歩５分 〒596-0076 岸和田市野田町２-13-19　　中岡香代
川柳 たちばな	18日（土）13時45分締切 印象吟・戦（互選）・さっぱり 自由吟	会場　東園田町総合会館２F 阪急園田駅北口徒歩２分 〒 661-0953 尼崎市東園田町３－49－5　　藤井宏造
川柳塔 みちのく	18日（土）17時締切 追う・てかてか・メニュー	会場 － 未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳 藤井寺	19日（日）14時締切 ストーブ・見つける	会場　パープルホール４F 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303　鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	20日（月）14時締切 半分・騙す・白い・自由吟	会場　豊中市立中央公民館　３F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩５分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　　初代正彦
川柳 ねやがわ	21日（火）13時締切 流れる・息抜き・阿呆・開運 自由吟	会場　寝屋川市産業振興センター 〒573-1104 枚方市楠葉丘１－9－13　　藤村亜成
川柳 さんだ	21日（火）13時30分締切 表面・嬉しい・ソファ・悩む 自由吟	会場　キッピーモール　６F（JR三田駅前） 投句先 〒669-1324 三田市ゆりのき台3-14-9　上田ひとみ
川柳塔 すみよし	25日（日）14時締切 石・震える・ぐったり	会場　住吉区民ホール集会室４ 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	25日（土）13時15分締切 絵・風・生きる	和歌山商工会議所　４階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民 川柳会	26日（日）14時締切 赤・浴びる・おどおど・席題	会場　陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	26日（日）13時から 自由吟 素早い・胃・真打ち 席題	会場　県民ふれあい会館　４F　鳥取市扇町２１ 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　　中村金祥

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。
★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

2月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	1日(木) 14時締切 縮む・ぎくしゃく・バトル	会場　奈良県文化会館 近鉄奈良駅奈良駅①番出口徒歩５分 奈良県磯城郡川西町結崎421-64　長谷川崇明
城　北 川柳会	4日(土) 14時締切 呆れる・プラス・宇宙・自由吟	会場　旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先　〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川　柳 とんだばやし 富柳会	4日(土) 14時締切 注ぐ・もてなす・自由吟・席題	会場　富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0066　富田林市錦織北1－14－6　中村　恵
倉　吉 川柳会	4日(土) 14時締切 頑固・昼・口・席題	会場　倉吉市明倫公民館 投句先　〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はわい長瀬1028-1　天野道春
川柳塔 まつえ 吟　社	4日(土) 13時40分締切 ゆるむ・予感・理想・転	会場　雑貨公民館 投句先 〒690-0012 松江市古志原7－19－19　中筋弘充
おりひめ☆ ひこぼし 川柳会	7日(火)消印有効 まさか・おめでとう・プリンセス	投句先　〒573-0095 枚方市翠香園町2－7 『おりひめ☆ひこぼし川柳会』　藤田武人 TEL・FAX 072-395-5453
あかつき 川柳会	10日(金) 香・命令・メイク・時事吟	会場　大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F203会議室） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区３－６　木村ビル２階 あかつき川柳会
六　甲 川柳会	11日(土) 14時締切 席題・姿・のどか（な） 浴びる・自由吟	会場　灘区民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒658-0083 神戸市東灘区魚崎中町２－12－５　敏森廣光
川柳塔 わかやま 吟　社	11日(土) 14時10分締切 兼　題＝故障・ほっこり・ドーナツ 課題吟＝煙	会場　和歌山県JAビル１１階 兼　題　〒642-0024 海南市阪井652－14　小谷小雪 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
川柳塔 打　吹	11日(土) 13時30分締切 暇・外す・ぱらぱら・席題	会場　倉吉市上灘町９　上灘コミュニティーセンター 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
南大阪 川柳会	13日(月) 15時締切 ご馳走・別れる・ぼろぼろ 雑詠	会場　大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋６丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008　松岡　篤
西宮北口 川柳会	13日（月）13時30分締切 席題・気配・痺れる・しぶとい 自由吟	会場　西宮市立中央公民館　6F　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27－4－602　梅澤盛夫
ほたる 川　柳 同好会	14日(火) 13時30分締切 火・足す・のんびり	会場　豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎

編集後記

★今月号の目次下に、鴨谷瑠美子さんが、御尊父の大島無冠王のことを書いてくださった。

★「川柳平安」昭和36年4月号に、「還暦の人」のタイトルで大島無冠王の記事が1頁掲載されている。宮田甫三が紹介文を書いているが、略歴は本人の執筆だと思われる。全文挙げておく。

★大正7年病気療養中に講談雑誌・面白倶楽部などに投句／近藤飴ン坊氏の紹介で井上剣花坊を知り錦浪・三太郎・五花村氏らの知遇を得る／昭和御大典後「尖光会」を主宰／「木馬」顧問／松窓・幸男氏らと「川柳街」創立に加盟／黄母衣・同人・川柳月刊・でるたを経て昭和34年4月平安川柳社同人に参加。

★「川柳雑誌」(昭和14・1)の第2回同情週間川柳大会の記事に、〈京都の川柳同人社の大島無冠王氏はあの朗々たる美声で「土」の選句三十七句を読み上げる〉とあり、このことからも著名な川柳人であったことが知れる。

(道夫)

♡1月号の主幹の巻頭言はウサギの島の話だったが、我が家もこの島で数回キャンプをしている。忠海港からフェリーで下船するとそこは別天地。ウサギたちが飛び跳ねながら出迎えてくれる。唯一の施設国民休暇村で手続きをしてテントをはる。土穴の寝床から子ウサギが覗いていたりする。夜は岸壁から釣り糸を垂らすとイカが面白いほど釣れ、朝食はイカ焼きだった。

♡戦時中、毒ガス製造工場があった為、地図から消されていたという大久野島。資料館に入ると戦争の悲惨さが伺える。

♡ウサギ年の今年は大久野島でキャンプしようと秋から予約をとっている。多いときは1000匹以上いたウサギたちもコロナ禍で観光客が少なくなり、エサにありつけず半減しているらしい。5月には、国産の人参を手土産にして、久々にウサギの島を訪ねるのを、楽しみにしている。

(じゅん子)

♣「川柳雑誌」から麻生路郎師と須崎豆秋さんの句の収集が一応完了したので、現在、路郎師の懐刀であった橋本緑雨さん、福田山雨桜さん、奥村丹路さん、六大家の一人椙元紋太師の四兎を一挙に収集することにして、今進行中である。毎日四兎の句に接し楽しい思いをしている。

♣「川柳雑誌」S2年7月号(№42)で、庄萬よし氏の「作句十戒」を発見した。96年前でもあるが今でも充分通用するのでご紹介する。

作句十戒

狭い範囲を深く見よ
聞くよりは行って見よ
艶を消してわめけ
よく作ってよく捨てよ
行きつまったら出て遊べ
スイコウせねば書くな
人の句のように自分の句を検せよ
一番よい言葉は一と通りよりない
選者のための句ではない
時々習慣の衣を脱げ

以上でした。**(勝弘)**

ひとこと

97歳のガールフレンド

第28回川柳塔まつりに出席させて頂きました。ホテルの大広間、大入りだと思いましたが、周りの方々は、今回は少ないとのこと。

私の隣に座って下さった方が、「三年ぶりに参加です。三年待っている間に97歳になってしまいました」と言っておられて、私はビックリ、どう見ても79のまちがいではないかと思うほど、溌剌としていました。私よりもお元気な方で、大会が年に一回の楽しみとのことでした。「入選だけにこだわらずに句を作りなさい」など、いろいろアドバイスを頂きました。

県外の大会は、私のことを全く知らない選者に出句出来るので楽しみです。今回も投句箱に自分の句を入れることが出来、とてもうれしい一日でした。97歳のガールフレンドが出来たこともうれしい事です。川柳塔の皆さま本当にありがとうございました。来年98歳になったガールフレンドにお会いしたいものです。

(中田　尚)

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

種目「　　」発表（4月号）

地名　　市都
県府道

姓
雅号

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から14時までにお願いいたします。

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「　穴　」（2月15日締切）

4月号発表

永見　心咲 選 ――共選―― 江島谷勝弘 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

	B	A
地名 県府 市都道 姓雅号		

切らないで下さい

	B	A
地名 県府 市都道 姓雅号		

左右に同じ句を書いて下さい

◎楷書で正確に書き、2月15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人特集　投稿用紙

同人特集「私の好きな笑いの句」
発表（4月号）

地名　　市都
　　道
県府

姓雅号

私の好きな笑いの句

句

作者名

※必ず原句を確認してください。

原稿用紙　70字

好きな笑いの句と作者名（フルネーム）を記入し、70字以内の文章を添えてください。
なお、文意を変えない程度に編集部で文章を添削することがあります。

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名	フリガナ
住所	〒　－
電話	－　－
紹介者	（無記入でも可）

○○　年　月から半年　5000円
○○　年　月から一年　9800円
該当の方に○をつけて下さい

きりとりせん

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話 06-6779-3490）
振替 00980-4-298479

川柳塔のホームページアドレス
https://senryutou.net

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社２月句会

とき　２月７日㈫　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　３階　葛城の間
　天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「最近、郵便着くの遅くない？」　藤田武人氏
席題「　　」　緒方美津子選
兼題「近　い」　中村恵選
「不　良」　初代正彦選
「売　り」　鴨谷瑠美子選
「しらける」　新家完司選
「自由吟」　小島蘭幸選
（各題２句以内）
会費　１０００円
投句料　１０００円（切手不可）

作品募集

４月号発表（２月15日締切）

川柳塔（８句）　小島蘭幸選
水煙抄（８句）　木本朱夏選
愛染帖（２句）　新家完司選
檸檬抄（２句）「穴」　江島谷勝弘　永見心咲　共選
インスピレーション・ナビ（２句）　大西泰世選
一路集（２句）「一番」　髙瀬霜石選
「輪」　金子美千代選
初歩教室「箱」（３句）　水野黒兎担当
初歩教室「箱」は５月号発表

５月号
檸檬抄「抜　く」
一路集「ぎざぎざ」「振　る」
初歩教室「　雨　」

本社３月句会

７日（火）午後１時から
兼題「学　ぶ」「かけら」「ノー（no）」
「好　意」「自由吟」

本社句会欠席投句のお薦め

＊幅4.5センチ×長さ25センチの句箋一枚に一句ずつを書き、裏面に題とお名前を記入のこと。
＊投句料1000円（切手不可）。
＊句会日の前々日までに事務所に必着のこと。

定価　八百円（送料100円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇二三年（令和五年）二月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　桒原道夫
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル２０１号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。

美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com

令和五年 二月 一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一一四九号 川柳塔 二月号
定価 八百円（送料 百円）

箸がとまらん 極うま塩昆布
「直火仕込み製法」により炊き上げた濃厚な旨さ
職人の技術で、超とろ火の火加減により、
秘伝の煮汁にじっくり溶けだした旨味を、昆布に染み込ませています。
お友達LINE
QRコード
舞昆のお友達になって下さい。
舞昆のこうはら
商品のお問い合わせはこちらまで（ご試食承ります）
フリーダイヤル 0120(11)5283

『歯を含むお口の中を一生守っていく場所』としての歯科医院
『痛くなく、怖くなく、通院が苦にならない』と思えるクリニックの実現

海岸通デンタルクリニック
KAIGANDORI DENTAL CLINIC

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
9：00～13：00	○	○	○	—	○	9:00～17:00	—
14：30～20：00	○	○	○	—	○		—

診療科目
・歯科 ・歯科口腔外科 ・小児歯科
・予防歯科 ・審美歯科
・インプラント ・ホワイトニング

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通２－２－３
HAT神戸メディカルモール３F（１F ケーズデンキ）
TEL.078-261-3300
www.hat-dental.com

雑誌 05703－2